Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

601 109 6

601-16

1200501530216

0 複写

1. 0220

# 東郷平八郎全集

元帥伯爵東郷平八郎

五

601-16

# 凡例

一、本書は東郷元帥の事蹟を詳錄し、之を傳ふるを以て主眼とせり。若し夫れ之に依りて、史學又は思想界等に些少なりとも裨益する所あらんか、編者は洵に望外の幸慶なるべし。

一、本書は筆を元帥の誕生せる弘化時代に起し、大正十五年二月を以て之を收めたり。

一、本書の材料は、主として海軍省の記錄、官撰の文書、島津公爵家の記錄、元帥の親族、舊友其の他特別の關係ある諸名士の談話、日記及び内外の新聞雜誌等に據り、之に加ふるに編者が二十餘年間元帥に親炙見聞せる所を以てし、猶ほ編者の質疑に對して元帥の懇到なる垂教もありたれば、庶幾誤謬尠きに近からんか。

一、元帥の事を敍するには、帝國海軍出仕以前は單に姓名若くは名のみを用ひ、出仕以後は概ね姓下に附するに其の時代の官名若くは職名を以てせり。例せば前者は『仲五郎』、『東郷平八郎』の如く、後者は『東郷見習士官』、『東郷浪速艦長』の如し。但し附錄にては、其の時代に關せず往々『元帥』と稱することあり。

一、本書中特に戰記の部分に於て、元帥には間接の關係に過ぎざるものをも併記せる箇所尠からず。

是帝國海軍に關する通俗的史籍稀なるが故に、伝つて以て其の事件の顚末を知るに便あらしめんが爲なり。

一、本書は、元帥の經歷を主とし附帶せる美談逸話等の多くは、本全集次卷に收錄せるもの多し。

一、原文を揭げ若くは引用したる際は、其の形式等も原の儘と爲せるを以て、擡頭、闕字を用ひたるものあれども、本文に於ては之を廢せり。

一、皇室に對し奉る以外、一般に引用の人名には、總て敬稱を省略せり。又初出の姓名には其の官職爵を冠せしめ、再出後は概ね省略に從へり。

一、外國の地名、物名等に譯字を用ひたるものは、初出以外にも時に片假名を振りて讀易からしむ。浦鹽斯德（ウラジボストック）、米突（メートル）等の如し。名詞には上下に「　」を施せり。例へば人名はマカロフ、地名はリバウ、其他は「ニウウイラード、ホテル」、戰艦「スウオーロフ」練習艦「ウースター」號となすが如し。

一、言語及び他より文章の一部を引用せる場合、其の他特別の文句、名詞等には、概ね其の始と終とに『　』を施し、又は別行とし、以て本文との區別を明瞭にせり。

一、初出の艦艇にして勢力の判明せるものは成るべく之を詳記せるも、明治二十七八年戰役以後は之を省略し肝要なるものゝみ記すことゝせり、是同戰役頃より官選の文書、將校の著書等に艦艇の勢力を詳記せるこの數からずして、比較的世に知られをるを以てなり。又船舶の大小を表する噸數には、排水量噸數、積載噸數（貨物噸數とも云ふ）、總噸數、登簿噸數、登簿總噸數等の別あり。而して普通に海軍にて噸と稱するは排水量噸數の事にして、之を單に幾噸と略稱することあり。又速力若干と記せるは、其の艦艇の一時間に航馳し得る海里（一海里は我が十六町五十八間三尺に當る）を指せるものと知るべし。

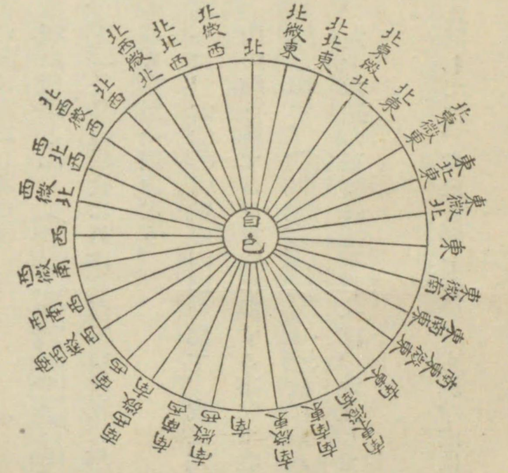
一、帝國軍艦旗の規定せられたるは明治二十二年にして、其の以前は艦艇等も他の船舶と同じく國旗を揭揚し居たり。隨つて本書の記事亦之に準ぜり。

一、軍艦を呼稱するに、前には概ね何艦と記し（但し文勢に據り例へば某藩の軍艦何と記し又は其の名のみを擧げて艦を略せる事もあり）後には軍艦何々（略して名のみを記す事あり）と改めあり（水雷艇亦之に準ず）是其の時代に於ける海軍の呼稱に準ぜるものなり。驅逐艇潛水艇を後に驅逐艦潛水艦と改めあるも亦同一理由なり。

一、艦、艇隊航行或は海戰の場合に、右（左）何點の回頭を爲す、或は左（右）何點の正面變換を行ふと云ふ如き記事屢〻出で來る。此の點と稱するは方位に關する事にて我を中心に置きて周圍の圈を三十二に等分し、其の等分點を點と稱す。（一點每に名稱あり別圖方位名稱略圖を參照すべし）故に右八點の回頭を爲せば「直角に右方側面に向き直る事となり、左十六點の正面變換を行へば、左旋して引返す事となる。其の他之に準じて知るべし。

一、前項記載の如く本書編纂に關しては、或は資料を貸與せられ、或は其の便宜を與へられ、或は實

踐談を承諾せられたる先輩頗る多數なるが、特に故伊東元帥、井上元帥、大迫（尚敏）陸軍大將、財部海軍大將、東郷（吉太郎）海軍中將、故同中將母堂、佐藤（鐵太郎）海軍中將、安保海軍中將、谷口海軍少*




方位名稱略圖

*將、小牧文學博士、淺井海軍編修、堀内海軍編修等の諸彦よりは多大の幇助を受けたり。玆に本書成るに臨み謹みて感謝の意を表す。



# 東郷平八郎全集　第一卷　傳記

## 目次

第一篇　幼年及び青年時代

第一章　出生の因緣……（三）
萬邦無比の靈氣——時代の觀察——鄕里の觀察

第二章　家系及び幼時の教育……（九）
澁谷重國——五箇鄕領有——遠祖——重親の憤激——島津氏の附庸——系譜の祖——吉左衞門實友——實友の五男一女——誕生——邸宅——敏捷無類の兒童——天成式偉人——幼時の教育——强情我慢——水軍設立の布達——水軍從事の奬勵——平八郎と改稱

第三章　英國艦隊との交戰……（一九）
生麥事變——英國艦隊の鹿兒島廻航——父子の初陣——英國艦隊と砲戰開始——英國艦隊の退去

第四章　阿波沖の海戰……（三四）

開成所建設——海軍局設置——三子海軍に入る——久光入京——吉左衛門死去——大政奉還——薩州邸襲撃——翔鳳丸回天艦交戰——春日艦兵庫入港——春日開陽兩艦交戰——春日艦鹿兒島入港

第五章　北越の警備及び函館の海戰……（三五）

明治と改元——春日艦柏崎入港——春日艦鹿兒島歸著——賊軍函館占領——春日艦品川廻航——艦隊北征——宮古港の血戰——函館戰爭——蝦夷地平定——春日艦の戰鬪報告

## 第二篇　壯年時代

第一章　海軍出仕及び英國留學……（五七）

東宮遊學——龍驤艦見習士官——英國留學——練習船「ウースター」號乘組——帆船「ハンプシヤア」號乘組——海軍省の設置——比叡艦乘組——比叡艦英國出發——比叡艦横濱著

第二章　歸朝後に於ける軍艦乘組……（七四）

海軍中尉——扶桑艦乘組——海軍大尉——比叡艦乘組——海軍少佐——迅鯨艦副長——天城艦副長——結婚

第三章　朝鮮仁川廻航……（七九）

中艦隊仁川廻航——濟物浦條約——袁世凱訪問——大同江測量——第二丁卯艦長

第四章　南清廻航……（八四）

天城艦長——天城艦上海入港——楊子江溯行——清佛開戰——新戰場視察——クルベー中將訪問——天城艦長崎歸著

第五章　布哇廻航……（九二）

海軍中佐——大和艦長——海軍大佐——沈滯時期——國除法研究——吳鎮守府參謀長——浪速艦長——浪速布哇廻航——布哇政變——禮砲問題——囚人投艦——浪速歸朝——浪速再度布哇廻航——浪速品川歸著

## 第三篇　明治二十七八年戰役時代

第一章　豐島海戰……（一一）

浪速運送船護送——聯合艦隊佐世保出發——開戰——高陞號擊沈

第二章　黃海々戰……（一三）

威海衛港前挑戰運動——艦隊强偵行察——敵艦隊發見——砲戰開始——浪速奮鬪——戰捷

第三章　金州半島占領……（一五一）

陸軍上陸掩護——大連灣占領——旅順口占領

第四章　威海衛の攻略……（一五七）

第一遊擊隊登州府砲擊——陸兵榮城灣上陸——林泰曾自殺——東岸砲臺陷落——水雷艇隊闖入——定遠以下四隻擱沈——艦隊總攻擊——敵水雷艇全滅——丁汝昌降を乞ふ——伊東司令長官の義俠

第五章　澎湖島占領……（一八〇）

海軍少將常備艦隊司令官——南方派遣隊出發——陸軍裏正角上陸——南方派遣隊佐世保歸著

第六章　臺灣征討……（一八九）

出發——清兵反抗——陸軍三貂角上陸——臺北占領——海軍將官會議々員

第四篇　北清事變前後

第一章　海軍大學校長……（一九九）

海軍大學校長——海軍中將——佐世保鎮守府司令長官

第二章　北清事變……（二一七）

義和團蜂起——常備艦隊司令長官——大沽砲臺攻擊——服部指揮官戰死——白石大尉先登——大沽著——アレキセイフ來訪——管大尉戰死——大沽出發——仁川寄港——吳歸著——益子逝去——舞鶴鎮守府司令長官

第五篇　明治三十七八年戰役時代　上

第一章　聯合艦隊司令長官の拜命竝に同艦隊の發進……（二三七）

天意奉行——常備艦隊司令長官——聯合艦隊の編制——聯合艦隊佐世保出發

第二章　旅順港外の敵艦隊攻擊竝に仁川沖海戰……（二七二）

征途第一命令——驅逐隊襲擊——艦隊開戰——艦隊南航——仁川沖海戰

第三章　旅順口第二次第三次攻擊及び第一回閉塞……（二八六）

第二次行動頓挫——速鳥朝霧邁進——第三次行動開始——第一回閉塞決行

**第四章**　旅順口第四次攻撃並に驅逐隊の激戰……（三〇〇）
第三艦隊聯合艦隊に入る――マカロフ中將太平洋艦隊司令長官となる――第四次行動開始――第一驅逐隊接戰――第三驅逐隊奮鬪――間接射撃

**第五章**　旅順口第五次第六次攻撃及び第二回閉塞……（三一一）
第五次行動開始――第六次行動開始――第二回閉塞決行

**第六章**　旅順口第七次第八次攻撃附マカロフ戰死……（三二四）
第七次行動開始――日進春日二艦入隊――蛟龍丸水雷沈置――「ペトロパウロウスク」爆沈――マカロフ戰死――第八次行動開始

**第七章**　旅順口第三回閉塞並に陸海軍聯合作戰の開始……（三三五）
陸海軍聯合作戰の訓令――備前吉房作の名刀――第三回閉塞決行――烈士の最後訊ぬるに由なし――美談數種

**第八章**　封鎖宣言並に敵艦隊の出港……（三五六）
陸軍鹽大澳上陸開始――八隻の艦艇遭難――金州攻撃應援――封鎖宣言――海軍大將――露國太平洋第二艦隊編制――敵艦隊大擧出港――敵艦隊を壓迫す――敵艦隊旅順入港

**第九章**　黄海々戰……（三七〇）
日本海々戰との戰勢比較――滿洲丸來訪――敵艦隊復大擧出港――大海戰開始――三笠の損害――三笠苦戰

**第十章**　旅順艦隊の全滅……（三九二）
第三軍爾靈山占領――敵艦隊續々撃沈せらる――「セワストーポリ」襲撃――兩大將握手――諸堡壘陷落――旅順開城

## 第六篇　明治三十七八年戰役時代　下

**第一章**　日本海々戰前記……（四一九）
三大將討議――露國增遣艦隊本國出發――戰鬪實施に關する訓示――聯合艦隊の勢力――露國艦隊の勢力

**第二章**　日本海々戰其の一（五月二十七日の畫戰）……（四三七）
七段備――敵艦隊發見――第一報告――艦隊主力加德水道出發――果斷變針――『丁字』戰法――第一、第二戰隊第一合戰を開始す――第二戰隊の活動――

第二戰隊分離——第四、第五、第六戰隊の戰況——武運長久——第一戰隊の損害——第二戰隊の損害——第三戰隊の損害——第四戰隊の損害——第五戰隊の損害——第六戰隊の損害——驅逐隊水雷艇隊の損害

第三章　日本海々戰其二（五月二十七日の夜戰）……（四六五）

驅逐隊水雷艇隊襲擊準備——第二合戰——敵艦隊益々敗北

第四章　日本海々戰其の三（五月二十八日の晝戰）……（四七一）

第四合戰——ネボガトフ司令官降服——第三合戰——第五合戰——第六合戰——第八合戰——第七合戰——第九合戰——第十合戰

第五章　日本海々戰後記……（四八二）

敵艦隊敗戰の結果——戰鬪詳報

第六章　聯合艦隊の凱旋……（五〇五）

媾和成立——伊勢神宮參拜——總艦隊横濱に集合——横濱上陸——登營——海戰經過奉告——海軍省訪問

第七章　凱旋觀艦式及び聯合艦隊の解散……（五二〇）

凱旋觀艦式——戰死者祭典——聯合艦隊解散——告別訓示

## 第七篇　海軍々令部長乃至元帥時代

第一章　海軍々令部長拜命……（五三一）

海軍軍令部長——大勳位功一級——伯爵——表忠塔建設

第二章　東宮殿下地方行啓扈從竝に韓國御渡航供奉……（五三六）

進水式台臨扈從——山陰道行啓扈從——韓國御渡航供奉

第三章　依仁親王殿下御渡英の隨行　上……（五四二）

賀茂丸横濱解纜——海上の海軍記念日——賀茂丸英國著——「スタンダード」の記事

第四章　依仁親王殿下御渡英の隨行　下……（五五七）

戴冠式——觀艦式——告別園遊會——「ウースター」號訪問——「ウースター」協會の晩餐會——英語の答辭——少年隊の檢閲——兩殿下に拜別——乃木大將と別る——英國出發

第五章　北米合衆國訪問　上……（五七〇）

合衆國民の熱望——「ルシタニア」號紐育著——紐育市長訪問——華盛頓著——大

# 東郷平八郎全集　第一卷　傳記

目次


統領訪問——大統領の晩餐會——ジョージワシントンの墓に展づ

第六章　北米合衆國訪問　下……（五八五）

未見の知友——ルーズヴェルト訪問——紐育出發——丹波丸にてシヤトルを發す

第七章　元帥の稱號を賜はる……（六〇〇）

元帥府に列せらる——大手術——手術後の攝養

第八章　東宮御學問所總裁　上……（六〇七）

東宮御學問所職員——御始業式の言上——近衛師團演習——艦隊射撃——新潟方面行啓扈從

第九章　東宮御學問所總裁　下……（六二〇）

山陰方面行啓扈從——奥州地方行啓扈從——九州地方行啓扈從——御修了式の言上——吉則作の名刀を賜はる——述懐の和歌

系圖及年譜……（六三五）

裝幀……田中良

背文字……梅園良正

# 第一篇　幼年及び青年時代

## 第一章　出生の因緣

萬邦無比の靈氣――時代の觀察――鄕里の觀察

御稜威輝く皇國には、萬邦無比の靈氣漲り、一大事起る毎に、必ず所要の偉人を現して、或は國體を擁護せしめ、或は國難を拂はしむる等、爰に不可思議の妙働を作し、靈氣の靈たる所以を示さずんば止まざるなり。而して如上の使命を帶びたる偉人は概ね時間的には究極の時節。空間的には有緣の地方。此の縱横の交叉點に生れ、由りて以て感奮し、切磋の便を得て、他日發揮の要ある勢威の原動力を蘊蓄し來る。此の理に基きて、不世出の大海將東鄕元帥と、其の誕生の弘化時代と、其の鄕里たる鹿兒島と三者の關係を照察なさば適切に其の然

る所以を覺知し得べきなり。

さらば吾人をして、先づ其の時代を觀察せしめよ。

鎖國を以て唯一の對外政策となせる德川幕府は、寛永年間に至りて、全く大船製造及び海外渡航を禁じ、國民をして一歩も外洋に出づることを得ざらしめぬ。是が爲めに其の海事思想は頓に衰退し、嘗ては我に寇せる十萬の元軍を粉齏したる、餘勢に乘じて亞細亞大陸に殺到し、其の船首に樹てたる八幡大菩薩の大旗一度灣口に飜れば、陸上忽ち無人の鄕となる迄に雄威を恐にしたる國民の元氣は、哀れや昨日の夢と消え、櫻花の下に春を追うて、婀娜めく節にうたふ小唄は巧なれど、叩けば音する鐵腕に舵柄掴み、怒濤を蹴散らす壯擧の如きは繪に見てさへ眩暈を起す腑甲斐なさに、目馴れぬ船影にても望み見れば、驚破こそ夷人襲來と、笑止や六尺の鬚男が狼狽へ騷ぐのみにてものゝ役には立つべくもあらず。此の內冑を見すかせる外人等は、我が鎖國の令を餘所にして、悠々大船を操縱りつゝ、近海に出沒すること漸く繁く、恁くて天保前後に至るや歐米の諸國我に開國を逼らんとするの氣勢を示し來りければ、從來特に交通を許され居たる阿蘭政府は弘化元年我幕府に向ひ『國を開きて諸外國と相親まずば、終には各國軍艦を連ねて來り侵すに至らん』と忠告せしが、早くも同年中に佛蘭西の汽船琉球に入り、同三年には北米合衆國の軍艦二隻浦賀に來り、それより數年



內に英吉利。露西亞等の軍艦も近海に出沒し、終に嘉永六年に至り合衆國の水師提督ペルリ軍艦四隻を率ゐ、我が國民が長夜の眠を汽笛の音に破りつゝ浦賀に入港せり。然るに之に對して警備の任に當れる我が三十萬の大軍は、彼に何等の痛痒をも與へ得ず、唯々として其の要求に應ずるの外なき苦況を呈しぬ。恁の如く弘化前後は、國運としては窮りて將に通ぜんとするの時機。國民としては海國々防の第一義を嚴切に自覺せざるを得ざりし、洵に究極の時節なりき。

次に吾人をして、元帥の鄕里たる鹿兒島を觀察せしめよ。

抑も鹿兒島藩は、其の地勢に加ふるに琉球を附庸となせる關係等より、從來外交及び海軍の思想頗る發達し、鎖國中と雖も比較的海外の事情に通じ、之に對して常に注意を懈らざりき。加之島津家三十八代の藩主薩摩守齋彬は、識見高く遠大の志を抱ける名侯なりしが、弘化元年佛國船琉球に渡來し、尋いで英國船も亦入港せるに鑑みて深く海軍整備の急務なるを覺り、當時蘭學者として有名なりし箕作阮甫に託し、蒸汽船の製造法を調査せしめ、其の進言に依り、江戸田町の藩邸にて同船雛形の製造に著手し、同時に西洋式軍艦をも建造せんと企てしが、這は幕府の禁ずる所なるを以て、乃ち一案を建て、從來許可せられ居る琉球通航船を改造すると稱し、嘉永五年十二月幕府に其の屆書を提出せり、これ同侯の海軍に關する最

初の書面にして文中に左の如く云へり。

（上略）琉球地へ多分之人數差置候ては孤島にて西洋船渡來之節却て爭亂之端にも可相成懸念も御座候間一組之人數可也に差渡別段大島へ人數差渡置猶又追々警衛之人數相增候樣取計候考に御座候付萬一琉地にて難捨置爭亂之節は大島より追々渡海申付候手筈致度左候得はいつれ大砲相用海上安心にて乘り渡候船無之候ては不相叶候付於國元軍船打立之儀相願度存候得共夫にては御制禁之儀外外響にも相成候て御免之儀不容易事と存候に付琉球船は元來砲門之姿唐船同樣彩色にて仕調有之候付前條之雛形通彩色に御座候處を誠之砲門に仕立且手薄之造作を『マツラ』を澤山にいたし丈夫之木材にて仕立候樣致度（下略）

恁くして幕府の許可を得、藩地に於て大砲船の製造に著手せしが、其の竣工に先だち、嘉永六年北米合衆國の水師提督ペルリ浦賀に渡來し、軍艦の威力を遺憾なく發揮したるにより幕府も大に覺醒する所あり。齋彬乃ち之れを機として軍艦、蒸汽船の製造を許されんことを建白し、之と同時に幕府に於ても、大船製造解禁の令を發したるを以て、齋彬は直に著手中の琉球大砲船を普通の西洋形軍艦に改造せり。これ其の當時有名なりし昇平丸にして、皇國に於ける西洋形軍艦の鼻祖とも稱すべきものなり。



附けて記す。昇平丸は安政元年に至りて竣工し、（長十五間、幅四間、備砲十門なり。編者曾て「帝國海上權力史講義」に於て長二十八間、備砲十八門とせしは誤りなり。）同二年鹿兒島より品川に回航せしが、水戸藩主德川齊昭及び幕府の重役之を觀て大に賞讃し、幕府は遂に齋彬に交渉して之を獻納せしむるに至れり。

尋いで齋彬は、更に大船十二隻及び蒸汽船三隻を新造するの計畫を立て、幕府に伺書を提出せしが、其の中に國旗制定の一動機となれる左の如き意見をも陳述せり。

（上略）右之通追々致製造度尤異船に不相紛爲め白帆に朱の日之丸の御印小旗吹拔別紙圖（編者曰く圖は之を略す）の通造方を以て異國通りに取拵仕度如圖左右欄板に取立伺之通製造被仰付候はゝ日本海岸乘廻り深淺等兼て相測り不申候ては非常の場合難致辨別仍之平常は運送船に相用人數要用の分爲乘致習熟置度此段御差圖伺候

洵に適切の意見にて、就中日章旗の件の如き、深き感興を吾人に與ふるにあらずや。猶ほ以上の外に軍艦製造に關する齋彬の建白書は、前後數通に及べるのみならず、水戸藩主、近衛右府等にも、屢々書を寄せて軍艦製造の急務なるを論じ、又幕府の委託を受けて大船を造り安政三年には水軍を創設し、加之家臣をして敷設水雷をも研究せしむる等、苦心慘憺以て海軍に貢獻する所あり。鹿兒島は實に敍上の如き海軍有緣の藩地なりき。

東郷元帥はかゝる因緣の下に生れ、かゝる因緣の下に修養を積み、かゝる因緣の下に偉功を奏し、以て皇國を守護するに至れり。靈氣妙働眞に不可思議にあらずや。

附けて記す。齋彬の計畫せる大船十二隻は、其の在世中に、大元丸（長二十四間）、承天丸（同上）、鳳瑞丸（長二十間）、萬年丸（同上）の四隻落成し、蒸汽船は、江戸田町邸に於て、雛形製造に著手せしが、安政元年に至り、藩士肥後七左衞門、梅田市藏の兩人を長崎に遣し、在泊の蘭國汽船に就いて、船體、機關等の實際を見學せしめたる後、再び江戸に召還し、更に製造に從事せしめたる結果、左も右も機關まで出來せるを以て、乃ち之を嘉永年中に造れる越通船（米國より琉球に送還されたる土佐人中濱萬次郎氏に訊き米國捕鯨船に倣ひて造れるものなり）に裝備し、安政二年試運轉をなし、高輪沖より大船邊まで往復し得たり。之と前後して藩地に於ても磯龍洞院附近にて長十一間三尺の船と、之に裝備すべき十五馬力の蒸汽機關製造に著手せしむる等、安政五年七月薨去に至るまで、孜々として造船、造機の研究を續け、一面には弘化二年より、工を起して大砲を鑄造し、百五十斤以下の野戰砲を初め、大小合して其數幾百門の多きに上れり。



# 第二章　家系及び幼時の教育

澁谷重國―五箇郷領有―遠祖―重親の憤激―島津の附庸―系譜の祖―吉左衞門實友―實友の五男一女―誕生―邸宅―敏捷無類の兒童―天成武偉人―幼時の教育―强情我慢―水軍設立の布達―水軍從事の奬勵―平八郎と改稱―

東郷元帥名は實良、初め仲五郎と稱し元服して平八郎と改む。平姓なり。昔者鎌倉幕府の時、武州秩父の支族たる澁谷庄司重國の子に、大郎光重と呼ばれし武夫あり。鎌倉に仕へ功を以て薩摩國祁塔院、入來院、東郷、高城の五箇郷に封ぜらる。是に於て光重六人の男子を引連れ、寶治二年（紀元千九百八年）遥々領地に下り、五人の子に五ヶ郷を分け與へ、次男早川次郎實重をして東郷を領し斧淵城に居らしむ、此の實重こそ實に東郷元帥の遠祖にして、後年其の領地の名を取りて姓と爲しゝものなるべし。然るに是より先き中世王政衰頽したる頃より、大前氏なる豪族ありて、高城、東郷に據り威を振へるが、今實重の領となりても依然として其處を去らざるを以て、實重遂に之と戰を開きしに、一勝一敗數代を經て猶ほ平定することと能はず。恁くて實重より三世東郷重親の時に至り、敵方に入道道超なるもの現れ、勇猛にして善く兵を用ゐ、重親之と戰うて屢々敗北し憤激措く能はず、終に死して惡鬼となりて

彼を亡さんと誓ひ、甲冑を着け弓箭を帶び、愛馬に跨がりて土穴に躍り込みたるまゝ再び出で來らずと傳へらる。（後世東鄉家にては、之を祭りて紫尾大明神と崇む。）然るに幾もなくして道超死し、其の後澁谷氏遂に東鄉を一統し毫族となりしが、元龜年中島津氏に從ひ其の附庸となりぬ。それより數十年を過ぎて重弘なるもの出づ。東鄉家系譜は此の重弘より始まり其の子重友を以て元祖となせり。

重友六世の裔を實友と曰ひ吉左衛門と稱す。文化二年八月十六日に生れ長ずるに及んで武道に秀で篠崎七郎左衛門と呼ばるゝ水野流の達人に就きて劍法を學び皆傳を受く、而も爲人勤勉にして文事にも暗からねば、天保十年拔んでられて郡奉行見習となり、職にあること九年、誠意事を執りて些の私なく、民皆其の德に服し之を敬慕すること深かりければ終に擧げられて郡奉行となり、後更に高奉行に進み、次に御納戸奉行となり、終始方正勤直を以て聞えぬ。加之識見ありて海外の事情にも注意し、外國船の無禮を憤り、其の和歌中に、

異國の船くつかへせ諸人の祈る誠を知れよ神風

との詠あるに徵するも、其の志の存する所知るに足るべく夙に屢〻海軍の必要を說けりといふ。其の室益子は同藩堀與三左衛門の三女にて、文化九年十月五日に生れ、賢夫人の譽高く容姿亦端麗なるを以て、知人之を白梅花に譬へぬ。



吉左衛門五男一女を設けしが、其の四男こそ、後年不世出の大海將として威名を世界に轟かす東鄉元帥其の人にてありき。

附けて記す。長男は四郎兵衛實猗と曰ひ、砲術に長じ荻野流の皆傳を受け、維新の際には皇師に從うて北征せしが、明治十年の役西鄉隆盛の麾下に屬し、所々に轉戰せるうち負傷したるも、遂に存命へて同二十年五十四歲を以て病歿せり。

長女は夭し、二男祐之進亦早世す。

三男は壯九郎實次と曰ひ、出でゝ小倉氏を冒し、同じく皇師に從つて北征し、十年の役には西鄉方に屬し、屢〻官軍を惱まし勇名を馳せしが、同年九月二十四日遂に城山の露と消えぬ。

五男は四郎左衛門實武と曰ひ、慶應三年許可を得て別家を創立す。是亦不敵にして武勇は諸兄に劣らず。十七歲の少年を以て皇師に從ひ、轉戰して會津若松城に至り、晝夜を別たず奮鬪せしが、惜しむべし二豎の侵す所となりて終に斃る。

後に元帥たる吉左衛門の四男仲五郎は弘化四年の蔵も逼りて新ならんとする十二月二十二日、薩摩國鹿兒島市加治屋町の邸宅八疊の納戸に呱々の聲を擧げぬ。固より邊土の小町に過ぎざる此の加治屋町も、西鄉吉之助、大久保市藏の二人既に現れ、今亦東鄉家の麒麟兒

を加へて、明治の三大功臣を產せる、帝國地誌上の寶土とはなれり。東鄉家に於ける慶事は母子共に健全なりと報ぜられたるのみにて、何等稗史的奇蹟を傳へざりき、されど時代を語ればこの國勢窮まりて轉ぜんとするの際。場所を尋ぬれば海軍の先進藩たる薩摩の國、縱橫共に偉人出現の資格に叶へるは、合理的の奇瑞とも言はば言ふべく、父が屢〻漏せる述懷の如きも、此の麒麟兒が後年に於ける海上の大活動と、至誠神を動かすの大信仰とを預言せる未來紀と解され、心眼を開けば其處に神祕の閃を觀るべし。

附けて記す。加治屋町に於ける東鄉家の邸宅は、方形にして面積三百坪ばかり、四方竹垣を以て圍み、門は北方に面し家屋は東西に延び、八疊三間、六疊四間、四疊二間、二疊二間、納戸（元帥は此の室にて誕生せり）物置、臺所、土間等より成り、邸の南北兩隅には倉庫を建て、其の中央に厩及び下男室を設く。庭は北方に偏り、松樹鬱然たる邊に氏神を祭れる小祠を安置し、其の西方には苔產す老幹蜒々たる紅白二株の梅樹、手洗石を挾みて立ち、雙龍珠を爭ふの風情を示せり。恁く質素にして雅趣ある邸宅なりしが、惜むべし明治十年丁丑の亂に兵燹に罹りて烏有に歸し、其の跡今（大正十年）は女學校の敷地になれりといふ。

仲五郎は眼光こそ炯々たれ、白面朱脣の優姿にて、敏捷無類の兒童なりき、此の一事は、苟も東鄉元帥を研究せんとするものゝ閑却すべからざる要點にして、それと同時に、身體肥滿



して飽迄沈著なる圓熟時代のみの元帥を知れる者には、眞に意外の感あるべし。世人往々東鄉、乃木兩將軍を比較して、東鄉元帥は天成の偉人。乃木大將は修養の偉人なりと評す。然り圓熟時代の元帥は、譬へば巨巖の海面に屹立し、寄せ來る千波萬波を碎きながら、自若として不關不動の態を持するが如く、默して大事を裁斷する所、頗る大乘的色彩に富むを以て如上の評言必ずしも誤れるにあらざるべきも、其の七十年の言行及び經歷を仔細に觀察し來れば、乃木大將と等く、修養に依りて本有の偉器を玉成せるは、殆ど疑ふべからざるなり。但乃木大將は修養に依りて修養式偉人となり。東鄉元帥は修養に依りて天成式偉人となれること、これ兩將軍の性格に頗る懸隔ある如く、吾人の眼に映ずる所以ならずんばあらず、然れども克己奮勵以て修養を積みたる不退轉の大精神に至つては、卽ち一のみ。吾人の元帥に學ぶべき第一義は、實に此に存し、修養の力の偉大なるを實證せる、其の生涯は、吾人に向上を促し、確信を與ふるの活教訓となるにあらずや。

才氣煥發せる東鄉家の四男は、方正謹直なる父と、寬嚴兼備れる母とによりて、峻烈なる隼人式教育を遺憾なきまでに施されぬ。彼の母は愛兒等を、天晴なる人物に育てあげんと、微細の事にまで深く心を用ゐ、例へば愛兒等が臥せる時、用事ありて其處を通過する際など、必ず足許を迂回するを常とし、『將來御國の爲めに、忠臣義士たらしめんとするものゝ頭上を

歩む如きは、之を輕んずることゝなれば、親と雖も嘗むべきことなり。』と家人を戒め、以て愛兒等に自重の念を起さしめんと努めたり。之に觀るも其の教育の用意周到なりしを窺ふに足るべく、傳へ聞ける者感歎せざるはなかりき。

仲五郎は、八歳の頃より諸兄と共に毎朝未明に起きいで、膚も顯の短袴に身を固めて、明六ツ（午前六時）の鐘聲もろとも家門の開くを遲しと許り、包抱へて街上を馳せ、程近き西鄕吉次郎（西鄕隆盛の舍弟にして後皇師に從ひ、越後長岡に於て戰死せり）方に至りて習字をなすこと半時あまり、やがて五ツ（午前八時）頃に歸宅して、髮を結ひ朝飯を濟ますや、日々順番に一友人の家に集り、凜々たる聲張り上げて四書等の素讀をなし、（造士官設立の後は、其の師範役川久保清一に就きて漢學を修めたり。）了れば直ちに甲突河原（又江月川に作る、鹿兒島市の南西を繞り海に注ぐ。）に走りゆき、或は水中に躍り入り拔手を切つて游泳を學び、或ひは河原の砂を蹴つて友人と相撲を試み、曳々聲して採み合ふなかにも、帖佐三次（後の陸軍大將黑木爲楨）伊知地休八（後の海軍大佐伊知地弘一）の兩童は、最も其の好敵手にて、常に烈しく勝負を爭ひしといふ。恁くて八ツ（午後二時）頃家に歸り晝飯を了るや、更に演武館に至り、木刀取つて師範役藥丸半左衛門より一進一退示現流の劍法を授かり、又は手頃の棒を打振りつゝ、掛聲勇ましく立樹に向ひて切込を練り、かくて一日文武の修業に身を委ねて夜に入れば、再び友人寄り集まり、朝鮮の



虎狩、島津家の歷代歌、さては曾我物語、赤穗義士傳、太平記と軍書傳記の講讀に一日の勞を慰め、佳境に至れば兒童等は、案を拍ち聲を發して、武譚に勇み、忠義に感じ、孝行に泣きつゝ、日夜日本魂の養成に餘念もなかりき。

やがて安政三年となり、仲五郎は十歳の齡に達しぬ。折しも七月十五日、百味の飲食供へて亡靈祭る盂蘭盆となり、凡ての課業も休暇となり、隨意の遊びを許されければ、彼は唯一人、小刀携へて、附近に出で、田の面を縫うて細く流るゝ小川の側に佇みしに、水中には許多の小鮒の乍ち見え乍ら陰れつゝ川上へと昇りゆくを發見せり、それと見るや直ちに裳を褰げて水際に下りたち、小刀振り上げ鮒を目掛けて打下せば、小腕の冴え頭を刎ね尾を斷ちて、瞬間に數十尾を捕へ、其の敏捷さに見る人を驚かしぬ。又同じ年のことなりき。或る時彼は何氣なく一枚二枚と呟き居たり、鹿兒島にてはかく云うて金錢を數ふるを以て、士分は之を口にするを卑みけるゆゑ、長兒四郎兵衛彼の呟くを聽き咎めて叱りけるに、彼は言下に兒を瞻上げ、『紙は何と言うて數へるにや』と答へければ、長兒は返す辭も無かりしと云ふ。

又一日彼は偶然に戶棚の中に氷砂糖のあるを知り、母に向ひて之を請ひしに、母は何氣なく『最早殘りなし』と答へたり、彼は心に可笑しく思ひ、要こそあれと母の不在を窺ひ、戶棚より取出して悉く喰ひ了り、素知らぬ顏してありけるうち、歸り來れる母は戶棚を開き見て

打驚き、正しく仲五郎の仕業なるべしと呼び付けて詰問せしに、彼は平然として、『無きものが無くなる筈なし』と言ひて空嘯きぬ、之を聽ける母は大に後悔し、己が虚言を深く謝しぬ、其の機敏なることも柳ね此の類なりき。而して彼は又强情我慢不負魂の盛んなることも群童に越えたり。一日彼は厩に入り、父が祕藏の栗毛の馬に戲れ居しに、癇强なる馬は一聲嘶くよと見る間に、前足あげて彼を蹴倒し、頂へカツと嚙みつきたり。さすがに彼も吃驚して、思はずアナヤと叫びしが、手にせる棒にて滅多打に打放し、辛くも外方に逃れ出で其の儘になし置きしに、翌朝結髪に際し、端なく母に馬の齒形を見付られ痛く叱られたり、之に激したる彼は再び厩に躍り込み、栗毛の横顏健に打ちて鬱憤を散じ、兼て前日の復讐をなしぬ。

附けて記す。東鄕家にては毎朝母親しく四人の愛兒の髪を梳り、更に之を結びやりて決して他人に委ねたることなく、又之に用ゐる元結は必ず新しきものを使ひ、以て清淨の意を表し、兒等が世俗の汚に染まざらんことを祈願せり。

又同じ頃父兄に隨ひ旅行して某旅館に宿りしことあり偶〻兄壯九郎入浴し、浴中渴を覺えければ『仲五』『仲五』と呼び、飲水を持ち來るべきを命ぜり、彼忌々しさに堪へず、何とかして困しめやらんと思案し、偶と側を見しに、唐辛の燃るが如く色つけるがありければ、これ屈竟と茶碗なる冷水に混じ浴室に至りて兄に與へぬ。かゝる惡計のあらんとは知る由もな



き兄は、一口飲よりアツと叫んで茶碗投げ出し、己れと言ひさま飛びかゝりければ、彼は身を翻へして一散に外面の方へ逃げ出しぬ。兄の怒は益々劇しく、遂一父に訴へければ彼は其の膝下に呼びつけられ嚴しく叱られたるうへ兄に謝すべしと言渡されしも、强情なる彼は其の言葉に從はず、十日あまり下役の家に預けられたる後、纔に許されたり。されど終に父にも兄にも陳謝せざりしと云ふ。

此の年藩主齋彬は、益々考ふる所ありて、新たに水軍を設立し、老職をして之に關する左の布達をなさしめたり。

異國船防禦筋に付ては、公邊より分て被仰出夷賊覬覦の情況漸く根深相成居候付、於此御方も御國力を被盡御手當向被仰付事候處、防禦軍艦の二つ究り候儀故莫大の御入費を不被爲厭御製造被遊候に付、打手の人數も稍相備候へども軍艦は去春より初て出來候ゆゑ水軍の兵士未御備不相成、海防第一の要路夫々精練の兵士御乘付無之候ては軍艦出來の詮も無之事候に付此節別段厚思召を以水軍兵士御備仰付筈に候、依之小番新番御小姓與水軍方懇望之者は支配頭へ相付名前可申出候（下略）

猶ほ右水軍兵士の優遇法等を定め、百方之を奬勵せる結果、多數の希望者を出せりと覺しく、同藩の公用控中に『水軍兵士被召建候間願望の者は申出候樣組々へ被申渡候處及多人

數追々願出候』と記載されあるに徴するも當時の狀況推知し得べきなり。

さらでだに忠義に篤く、且海防を念とし居れる吉左衞門は、水軍創設の布達に感激し諸子を集めて容を改め、藩侯の深謀遠慮を說き聽かせ、特に仲五郎には見るところやありけん、別けても懇切に、やがて青年にも達せば水軍に從事して忠節を盡せよと、折に觸れては之を奬勵せりといふ。これぞ後年震天動地の大活動を演出すべき海上の麒麟兒が其の使命に向つて邁進するの一大動機となれるや疑ふべくもあらざるなり。

萬延元年となり、仲五郎十四歲の春を迎へしが、事情ありて表面十五歲となし、元服して前髪を落し、改めて平八郎と稱せり、嗚呼東鄕平八郎。後年智仁勇の三德を備へし理想的日本武士として世界に轟き歐米諸强國より尊敬せらるゝ平八郎の通稱は、實に此の時より始まれり。而して彼は年少の身を以て出仕して書役となり、一ケ月に玄米三斗俵一個を給せられ、終日筆を執りて職を奉じ、退出歸宅して餘暇あれば、家族と共に畑に出で野菜の栽培に從事せり。又之と相前後して荻野流の砲術を習ひ細腕に十匁の火繩銃取りて射擊を練磨し時に同年輩の友人と共に甲突河口附近の廣場に集まり、法螺貝太鼓に調子を取り、銃を肩にしつゝ操練を勵みぬ。



## 第三章　英國艦隊との交戰

生麥事變—英國艦隊の鹿兒島廻航—父子の出陣—英國艦隊の退去

希世の名侯島津齊彬は、安政五年七月疫病に罹り、猶ほ春秋に富める知命の齡を以て惜くも他界しければ、嗣子忠義（齊彬の弟久光の長子なり。）其の忘を繼ぎ、益々意を海防の事に注ぎ文久元年（紀元二千五百二十一年）には鐵製蒸汽船天祐丸（長三十九間馬力三百五十なり。）を同一年には同永平丸（長四十三間餘馬力四百なりしが、翌三年正月播州明石灘に於て暗礁に觸れ沈沒せり）を、何れも外人より購ひ、更に同三年にも白鳳丸、靑鷹丸を買收せる等、頻に武備を嚴にし居たりしが、端なくも外國軍艦と砲火相見ゆるの運命に遭遇せり。之を文久三年七月に於ける英國艦隊の襲來となす。

是より先き文久二年、忠義の生父三郎久光、武藏生麥村を通行の際、英國人四騎、馳せて其の行列前を橫切れり。さなきだに豫てより外人の所爲に憤慨し、機あらば眼に物見せんと構へ居たる隼人の勇士、何云その儘になし置くべき、『無禮者』と叫ぶと齊しく、二三の藩士飛鳥の如く躍り懸るよと見る間に、紫電一閃一人の外人は其の場に斃れ、二人は重傷に打伏し

ぬ。其の報本國に達するや、英國政府は激怒して、公使ニキールに訓令を與へ、幕府に逼りて償金を要求せしめ、更に薩摩藩にも嚴談すべきを命ぜり。是に於て公使は英國支那艦隊司令官キューバ中將に協り、相共に「ユリアラス」「ビヤール」「パーサス」「アーガス」「レーヌホース」「コクエット」「ハボック」の七艦、砲數合計百一門より成る艦隊を率ゐ、文久三年六月二十二日横濱を拔錨し、舳艫相銜みて同月二十七日鹿兒島灣口に達し、翌日進みて前の濱沖に入り直ちに談判を開始せり。

豫てより、怪くあるべしと期し居たる薩藩は、英國鑑隊灣口に出現すると共に、藩士一齊に勇み立ち、何れも輕裝に身を堅めて、持場々々の砲臺に馳せ集まり、英鑑を眼下に睨みつゝ後命の下るを待てり。東鄕家にては末子を除きて父子四人皆出陣なしぬ。父吉左衞門は監軍として灣口の山川砲臺に據り、長男四郎兵衞、三男壯九郎、四男平八郎は何れも旗本勢として藩主の本營詰となれり。平八郎年紀甫めて十七歲、笥袖の打裂羽織に裁上袴五ツ蔦の定紋打ちたる半首(陣笠の如きもの)戴き、兩刀帶し火繩の小銃取れる年少氣鋭の姿飽まで凜々しく、勇みに勇んで母に別れを別げ、同胞と共に今將に門を出んとせり、雄々しき母は之を送りつゝ、唯一言『敗るな』と叫びて、初陣の愛子を激勵せりといふ。

我が砲臺は、天保山、大門口、南波止、臨時增設)新波止、辨天波止、祇園洲、櫻島袴腰、烏島、櫻島、赤水



沖小島の十箇所にして、砲數は攻城砲五十四、野戰砲十三、臼砲十五、合計八十二門(砲種は鬧式百五十斤、同八十斤、同長短二十四斤及び八十斤、六斤砲等にして、又臼砲は、青銅砲、二十九寸石臼砲、二十寸臼砲、陸用鐵椅等なり。)を備へ、猶ほ他に五箇所合して二十三門の備砲あり。又海上の防禦として、遽に水軍隊を組織し、新に造れる長六間の輕舸十二隻に、各十八斤砲若くは二十四斤砲一門を裝置し、敵鑑に對して或は衝突し、或は追擊せんと計畫し、(此の水軍隊は、交戰の際大風雨に障げられ、計畫を實行する能はずして止めり。)且沖小島と燃崎間の海中に三個の水雷をも沈設せり。蓋し其の製式は、先主齋彬の家臣に命じて研究せしめたるものにして、陸岸より銅線を引き之に電氣を通じて爆發せしむるの裝置たり。(英國艦隊は、退却の際沈設の場所を通過せんとしたるも、沖小島より猛擊を受け、航路を變じたる爲め、遂に目的を達せざりしと云ふ。)是れ實に我が帝國に於いて敷設水雷を實戰に用ゐたる嚆矢なりとなす。

戰鬪の準備既に整ひ、壯士皆腕を撫して今か今かと戰鬪の令下るを待つうち、二十八日、二十九日は空しく暮れて三十日となり、猶ほ談判は繼續され居たるも、到底不調に了るべしと豫測せる早雄百名商人に扮し、英鑑隊の旗艦には三十餘名、其の他の六艦には各十一名乘艦し、不意に起りて敵を殪さんと企てたるが、英人の覺破する所となりて、此の壯圖もあはれ水泡に歸するに至れり。

七月二日となりぬ。前日より吹き續きたる暴風は、怒濤と相打ち相激して海面さながら沸き立つ如く荒天準備をなしたる英艦隊の諸艦も、檣鳴り桁答へ、右に左に動搖して、錨鎖は棒よりも強く緊張せり。司令官キューバ中將は、薩藩の要求に應ずべからざるを覺り、先づ隊中の五隻を派して重富沖に泊せる薩藩の汽船青鷹丸、天祐丸、白鳳丸を拿捕して、之を櫻島の碇泊所に曳き去らしむ。我が藩士遙に此の狀を望見して怒り心頭に燃え、無念の切齒をなす折しも、傳騎の鐵蹄大地を蹴りて開戰の命下れり。

時正に午刻、天保山砲臺より、一簇の白雲迸るよと見る間に、轟然たる爆聲四面に響き、開戰の第一彈は、旗艦「ユリアラス」に向つて放たれたり。驚破やと許り他の砲臺も、思ひ〳〵の敵艦目懸けて、相前後して打出し、風雨の爲め見えては消え、消えては見ゆる砲煙中に、閃く戰光稻妻の如く、殷々たる砲聲山嶽を震動せり。英艦隊は猛擊に狼狽して、拿捕せる汽船を燒き、一艦を其の監視に留め他艦は辛うじて運動を起し、(錨を拔くに暇なくして、遂に錨鎖を切斷せる艦すらありたり。)六隻の單縱陣を制りて、先づ北方なる祇園洲砲臺を擊ち、漸次南方の諸砲臺に及ぼし、彼我狂風猛雨中にありて奮鬪を續けしが、我が勇士中には赤裸となりて下帶に大刀うち込み、大に叫んで戰ふ有樣、宛然惡鬼の荒れたる如く、目醒しさ言ふ許りもあらざりき。



恁くして激戰六時間に亙り、敵は十三名の戰死者と、六十三名の負傷者を生じ、各艦何れも若干の彈丸を被り、就中「レーヌポー」は一時祇園洲に乘上げしが、我が舊式の圓彈は勢力微弱にして多大の損害を與ふるに由なく、之に反して彼より放つ尖彈は、長距離に達して破壞力强く、且火箭をも連發したるを以て、遂に市街に火災を起さしめ、磯浦にある集成館(大砲及び砲彈製造所)及び其の倉庫を初め、許多の建造物は燒盡し、備砲も過半破壞して物の用に立たず、彈丸も亦擊ち盡しぬれば、今は接戰の一途あるのみと、壯夫皆大刀の鞘を拂つて海岸に潜み、來れ敵兵骨あるや否や、日本刀の切味見せんと待ち構へしが、敵遂に上陸し來らず、黃昏時に砲擊を止めて艦隊は小池の前に投錨し、炎々たる市街の火災を餘所に見て、夜更くるまで嘲嘵たる軍樂を奏し居たり。遙に其の音を聞ける藩士等は、皆悲憤の涙に暮れしといふ。

翌三日英艦隊は錨を拔き、再び單縱陣にて沖小島及び櫻島の砲臺前を過ぎ、一戰を交へたる後谷山沖に碇泊せしが、四日の午後に至り、鹿兒島灣を出發して橫濱に歸り、此の交戰は終結を告げたり。(後に至り鹿兒島藩より、養育料として七萬兩を英國政府に贈與し、事件全く落着せり。)如上の戰鬪中町田民部の手に屬して旗本勢たりし東鄕平八郎は、初め二の丸を固め、後其の北西方に移りて警護に任ぜしが、怒雷の如く轟きわたる砲聲に、有繋少年の血沸き肉躍りしも、性來自制力に富める彼は、自若として職務を固守し、風箏を生じて飛び來る敵彈に眼も呉れざ

りし其の態度には、歎賞せぬものなかりしと云ふ。又男勝の彼の母は、砲戰始まるや甲斐々しくも雨具に身を固めて、風雨も彈丸も物ともせず、食物携へ所々の陣所を音訪れ、心盡しの一椀喰せやと、戰士を犒ひ士氣を鼓舞して今し海に臨める巨巖の側に休らふ折しも一發の火彈風を切つて飛來り、轟然たる響と共に其邊に破裂せしが、朦々たる爆烟中に立てる彼女は冷然として、振りかゝる黑髪搔上げつゝ敵を睨みし清秀の姿は、天晴戰場の花と謳はれて永く女丈夫の名を留めぬ。彈丸は圓きものとのみ思ひ居りしに、敵の放ちし尖頭長身の巨彈を見て驚異の眼を瞠り、更に敵艦を如何とも爲し能はざりし戰況を語りて慨嘆せる先輩の述懷を聽き、既に超凡の識見を藏せる平八郎は深き衝動を腦裏に受け、靜座して沈思默考すること多時、豁然として、『海より來る敵は海に於て禦ぐべし』との眞理を會得し、豫ての藩侯の主張、さては父の教訓も今更の如く思ひ合され、益々海國々防の第一線たる海軍に從事せんとの決心を固めたり。

## 第四章　阿波沖の海戰

海軍局設置—三子海軍に入る—上京—吉左衛門死去—大政奉還—薩州邸襲撃—翔鳳丸回天艦交戰—春日艦兵庫入港—春日開陽兩艦交戰—春日艦鹿兒島入港



英國艦隊との砲戰に活教訓を得たる薩藩にては、更に大に海軍整備の必要を覺り、元治元年（紀元二千五百二十四年）には從來の蒸汽方なるものを改めて開成所を建て、海軍砲術、海軍操練、海軍兵法、陸軍砲術、陸軍操練、陸軍兵法、及び築城を一科に、天文、地理數理測量、及び航海を一科に、器械及び造船を一科に、物理及び分析を一科に、醫學を一科に、以上合せて五科を設け、藩士をして各科を研究せしめ、一面には攝津の兵庫に建設せられたる幕府の海軍操練所に數名の藩士を入塾せしめ、慶應元年（紀元二千五百二十五年）には、町田民部以下十五名の藩士を歐洲に派遣し、中にも森金之丞（後有禮と改む）吉田巳次（後清成と改む）高見彌一、市來勘十郎（後松村淳藏と改む）の四士には海軍測量科を、東鄕愛之介、町田申四郎の二士には海軍機械科を學ばしむる等、種々計畫する所ありしが、同二年五月遂に海軍局を設置するに至れり（島津元丸屋敷跡に建設す）其の達書に曰く、

海軍之儀御先代樣深き思召を以て被召立置尙方今急務之事にて屹と振興いたし度、此節海軍之一局相立候に付而は掛之面々一同奮勵いたし可致精練旨被仰出候條、此旨掛之面面も申渡面々へ可申渡候。

猶ほ之は同時に、左の海軍規則書を發表せり。

海軍急務の儀別紙の通被仰出の御趣意一同深奉汲受兼て實地の心得可爲第一事

一、非常の節御艦被差出又者御召船の節者猶又應御船兵士被召乘候兼て其心得可有之事

一、於船中は規則嚴重相守兵士之禮不失樣可相嗜事

一、海軍所御軍艦大小砲操練可爲英式事

一、平日調練の節迎も禮義正敷可相守事

一、規則を破り又は不出精の人は不差置可被差免事

一、號令官以下官の面々隊中は差圖は勿論萬事可爲受持事

右條々堅固可相守もの也

時は來れり。待ちに待ちたる時は來れり。東郷家の三子、壯九郎、平八郎、四郎左衛門は袂を聯ねて海軍に入り、或は十丈の檣上に、小索に縋りて暴風と戰ひ、或は激浪怒濤の間に、端舟を泛べて四斤半砲の射擊を試み、晝夜練磨に身を委ねて海國男兒の本領を發揮せんと相勵みぬ。

既にして、島津久光は鹿兒島を出でゝ上京の豫定なりしも故ありて中止し、西郷吉之助（隆盛と改む）、小松帶刀をして兵を率ゐて上京せしめしが、東郷平八郎、亦隨員中に加へられて海兵隊の第一遊擊に屬し、初め谷村小吉尋いで赤塚源六に率ゐられ、專ら乾御門の警衛に任



ぜり。然るに同年十一月二十日に至るや、東郷吉左衛門は六十二歳を以て鹿兒島に逝きぬ遙に其の訃音に接したる平八郎は悲歎の涙に呉れながらも、悠々喪に服するを得ざるの時節なりければ、僅に十數日にして出仕を許され、引續き警護の任を盡し居たりき。

時に幕府の權威大に衰へ、内には尊皇攘夷の說勢を得て志士の叫聲四方に振ひ、外には英米、佛、蘭の軍艦兵庫に集りて開港を逼り、加之長藩征討の擧不利に陷る等、内憂外患竝び至るの際、慶應二年十二月畏くも　皇上痘を患み給ひて崩御あらせられしかば、翌三年正月皇太子御踐祚遊ばされ、先帝に諡を奉られて孝明天皇と曰ふ。是より先き源家茂既に他界し、人心愈々恟々たりしが、天皇御踐祚と共に時勢は急轉直下し、同十月には源慶喜大政を奉還し征夷大將軍をも拜辭し、爰に皇政復古の大御代となれり。然るに當時江戸にては、舊幕府方と薩摩藩士等と互に反目嫉視せるの結果、同年師走の二十五日、德川方なる庄内、松山兩藩の兵士千餘人は、潛伏せる浪士を捕へんとして、遂に三田の薩州邸を襲擊し、薩藩の浪士等は直に之に應戰せしが、衆寡敵せず今は是迄なりと、浪士等一齊に白刃を拔きつれ門外で切つて出で、一條の血路を開きて品川の海岸に達し、艀舟に飛び乘り沖合に碇泊せる同藩の汽船翔鳳丸（元「ロ・チュス」と稱し、内車蒸汽船にて、船質鐵製、排水量噸數四百六十一なり。元治元年長崎に於て、英國人より十二萬弗にて薩藩の購入したるものなり。）に遁れたり。是に於て翔鳳丸は四ツ半頃（午前十一

時）錨を拔き全速力にて出港せしが、其の附近に在りたる德川の軍艦回天（元米國の軍艦にして「イーグル」と稱し、南北戰爭及び下の關砲戰にも參加せる外車蒸汽船にて、艦質木製、長四十三間、幅七間馬力四百、排水量噸數七百十、備砲十一門、乘組定員百五十六人なり。西曆千八百五十五年（我が安政二年）、英國タンジクにて製造せられ、慶應二年六月長崎に於て、持主米國人ウオールスより、十八萬弗にて幕府の購入したるものなり）、かくと見るより急に錨を拔きて翔鳳丸を追ひ驅けたり。回天の速力翔鳳丸を凌駕し、早くも約二町の距離に迫りて猛擊を開始せり。翔鳳丸直ちに之に應戰せしが、固より運送船のことなれば備砲とても僅に小砲四門に過ぎず、それすら數發にして物の役に立たざるに至れり。回天之に乘じ一發又一發、翔鳳丸は既に十餘發の彈丸に貫かれぬ。豪膽なる同船の乘員は空しく擊沈せらるゝよりも、敵に衝突して共に海底の藻屑とならんと、遽かに船首を旋らし敵に向つて驀進せり。回天之を見るや尙ほも猛擊を續けながら、同じく旋轉して敵の鋭鋒を避け、誓時は彼我所を換へて回天追擊せらるゝ形勢となりしがやがて翔鳳丸は再び方向を轉じて西航し、回天復之を追うて相共に神奈川沖に達せり。折しも夕陽既に春つき、蒼然たる暮靄海上を罩むるに至りしを以て、回天は追擊を止めて品川に歸り、十數發の彈丸を受けたる翔鳳丸は、先づ伊豆の小浦に入つて假修繕をなし、更に紀州の九木浦に寄港せる後、同月三十日辛うじて兵庫に著しぬ。



之と相前後して薩藩は、三條實美以下の五卿を筑前より京師迄護衞すべきの命を受けたるを以て、西鄕信吾（後從道と改む）、大山彌助（後巖と改む）、林謙三（後安保清康と改む）等同藩の軍艦春日（元キヤンスー」と稱したる外車蒸汽船にして、艦質木製、長四十一間、幅四間五尺、深二間、馬力三百、排水量噸數千十五なり、西曆千八百六十三年（我が文久三年）英國カウスに於て建造せられ、（機關はサフヘントに於てなり）、慶應三年十一月長崎に於て、薩藩の購入せるものなり。）に乘込み、博多に廻航し、五卿を乘せて十二月二十五日兵庫に入り、西鄕等は五卿と共に入洛して吉之助等に會し、種々協議中同二十九日江戸より薩州邸襲擊の顚末を報じ來り、それより數日を經ざるに兵庫碇泊の春日艦よりも、舊幕府の艦隊兵庫港を封鎖し、大阪を出帆したる薩藩汽船平運丸兵庫沖にて砲擊を受け、是非なく兵庫に入港せる旨を告げ越しぬ。

是に於て薩摩藩侯は、明治元年（九月八日改元せらる。）一月一日、第一遊擊隊長赤塚源六を春日艦長に、砲隊長伊東祐麿を副長に任じ、其の他林、東鄕、伊知地等五六の藩士を選拔して、同艦の乘員たらしめぬ。

附けて記す。西鄕信吾も乘員とせられたるも、廟議の定まるを待ちて出發することゝなり、爲めに一行に後れしが、折しも伏見にて官軍と德川方と開戰ありて遮斷せられ、春日に至ることを得ずして了れり。

かくて赤塚等の一行は、即時京都を發して伏見に至り、夜半に乘じて流を下り、暗に朧の影を浮ぶる兩岸の景色を夢路の間に眺めつゝ、三日の曉天大阪に著し、直ちに藩邸に入り情況を訊ねしに、留守居木場傳内答ふるやう、『昨二日夕刻より、會津桑名の兵先鋒となり、德川方京都に向ひ進軍せる故、兵庫への通路は海陸共に杜絶せるならんも、必ず往かんとならば水路を採るに若かず、さあらば安治川の關門あるのみにて他には何等の危險あるなし。』と、乃ち一行は此の言に從ひ水路を採るに決せしが、船頭の同行を肯ずるもののあらざるを以て、是非なく東郷伊知地の青年二人は、船頭を拉し來りて之を威嚇し、舟子二人と共に强ひて同行せしめ、一同復た乘船し遂に河口の關門に達せり。吉か凶か一行默して語なく、孰れも心中必死を期して小銃に裝彈し、いざと言はゞ打放さんと用意しつゝ、故意に船を關門に近づけしに、警固の士は唯一應の訊問をなしゝのみにて更に怪まず、容易に通行を許可せるを以て、一行は事なく西の宮沖に出で、夜に入りて兵庫碇泊の春日艦に到著するを得、東郷平八郎も始めて艦上の人となれり。

是より先き兵庫に於ける春日乘員は、德川方の軍艦が無法の發砲を憤り、之を詰問せんと決議せり。時に德川方は、榎本釜次郎（後武揚と改む）艦隊司令長として旗艦開陽（文久二年榎本釜次郎等和蘭に至り、同國ドルドレクトに於て製造せしめたる内車蒸汽船にて、艦質木製長四十間、幅



六間半、馬力四百、佛砲二十六門、乘組二百九十四人なり、西暦千八百六十七年（我が慶應三年）に竣工し、榎本等之れに乘組み本邦に回航せり、代價は四十萬弗なり。）に座乘し、富士山（内車蒸汽船にて、艦質木製長三十四間一尺、幅五間一尺五寸、深二間三尺、馬力百八十、排水量噸數千、乘組二百一人なり、此の艦は、文久二年幕府より米國に製造を託せる軍艦二隻中の一にして、米人の手に依り横濱に回航し、慶應二年二月幕府之を受領せり、代價は二十四萬弗なり。）蟠龍（元「エンピロル」と稱し、内車蒸汽船にて、艦質木製、長二十三間、幅三間三尺五寸、深二間一尺、馬力六十、佛砲四門、乘組五十七人なり、英國ブレッキワルに於て製造せられ、安政五年英國女王より幕府に贈れるものにして、女王の乘艦なりしを以て頗る美麗なり。）翔鶴（元「ヤンシー」と稱し、内車蒸汽船にて、船質木製、長三十三間、幅四間、馬力三百五十、乘組七十人なり、文久三年十一月横濱に於て、「デント」會社より十四萬五千弗にて幕府の購入したるものなり。）順動（元「ジンキー」と稱し、外車蒸汽船にて、船質鐵製、長四十間、幅四間三尺、深二間四尺、馬力二百六十、排水量噸數四百、乘組は士官以下六十五人なり、文久二年十月横濱に於て、「ザブリウインケスト」會社より十五萬弗にて幕府の購入したるものなり。）の五隻を率ゐて碇泊し、各艦船皆嚴重に戰鬪準備をなし、一令の下に開戰なさんづ氣勢を示せり。春日艦長井上新右衛門（赤塚艦長著任以前の艦長なり。）は三日の早朝和田彦兵衛、有川藤助二人を蟠龍に遣し、開陽艦副長澤太郎左衛門と談判せしめしも要領を得ざるを以て、更に開陽艦に赴き榎本釜次郎に面接し、無法の砲擊を詰問せしめしに

釜次郎儼然として答ふるやう、『江戸に於て弊藩既に尊藩と砲火を交へたるの報に接したれば、尊藩は正しく我が敵にあらずや、緻ひ改めて君命なくとも、武人の本分焉んぞ敵の艦船の出港を許すべきや、請ふ此の旨を尊藩の諸船に傳へよ。』と、辭色共に烈し、和田、有川聽き了りて決然『可矣』と言ひ放ち、急き春日艦に歸りて之を報じ同艦は直ちに汽罐に點火し砲には彈藥を裝塡し、戰鬪準備に遺算なからん事を期せり。既にして三日の夜に至り赤塚新艦長以下著任するや、詳に情況を訊き、赤塚艦長は即時港内に碇泊せる同藩の汽船平運丸、翔鳳丸の船長を召集し、告ぐるに京師の開戰を以てし、『今や躊躇するの時にあらざれば、春日は翔鳳丸を護衛し明四日の拂曉敵の封鎖を破つて港外に出づべく、平運丸は春日に顧慮せず全速力を以て瀬戸内を經て鹿兒島に歸るべし。』と命じ、艦内の配置を定めぬ。即ち三等士官谷本良助は一番司令官と稱して右舷四十斤施條砲を掌り、同隈崎左七郎は二番司令官と稱して左舷銅製十二斤砲を掌り、同黑田喜衛門は單に司令官と稱して艦首十二斤「アームストロング」砲を掌り、同東郷平八郎は三番司令官と稱して左舷四十斤施條砲を掌り、同隈元源之丞は四番司令官と稱して右舷四十斤施條砲を掌り、二等士官伊知地休八同井上直八（後の元帥井上良馨）は單に司令官と稱し交代して中央百斤施條砲を掌り、砲員全部を七十二名と定めたり。而して別に一等士官林謙三をして、艦副長を補佐して一般の事を監せし



む。

附けて記す。春日に於ては士官親ら牽索を引きて發砲することに定めあり。

夜未だ明けず、東天纔に白めるのみにて往くさ來るさの艪拍子も聞えず、四面猶ほ寂寞たる折しも、徐々に錨鎖を捲ける春日艦は、翔鳳丸を伴ひ、竊に兵庫港を出發し、平運丸は之に先だちて既に西航せり。

初め榎本等徳川方の諸將は、春日の戰鬪準備を爲すを見るや、乃はち開戰の際に於ける規約を定め、開陽を信號本船となして專ら春日に當らしむることゝし、蟠龍、翔鶴を脇備に、順動を臨時應援に、富士山を遊擊に充て、機を視て一擊に春日を粉齏せんと計り居しが、三日の夜半大阪の方に炎々たる火災を望見せるにより、遽に天保山沖に廻航し、兵庫の封鎖は自然に解くるに至れり。

意氣軒昂たる春日乘員は、二汽船を護衛し速力を早めて南下し、平運丸は淡路の瀬戸方面に、春日は翔鳳を曳きつゝ阿波沖へ進航せり。時に夜はほのぼのと明け渡り、紅雲空に漂ひて海面錦を疊み、夢より醒めし海鳥は、初春の和光を翼に載せ、高く又低く長閑に舞へり、折しも遙かに兵庫の方より、黑烟を曳き朝霞を破りて驀進し來る巨艦あり。春日の乘員之を望むや聲々に、『開陽』『開陽』と連呼し、艦橋に立てる赤塚艦長は直ちに曳索を斷ち翔鳳丸を

して單獨先航せしめ、總員を戰鬪配置に就け、從容として敵艦を待ち受けぬ。暫時にして近づき來れる開陽は、先づ一發の空砲を放ち、以て春日に停止せよとの意を示せり。かくと見たる赤塚艦長、急に一令を下すや否や、春日の檣頭高く轡の紋の旗飜へり、同時に井上直八が手にせる牽索張るよと見れば、百斤砲の巨彈迸り飛んで海戰は爰に開かれたり。青年の血氣燃るが如き東郷、伊知地等、薩摩隼人の手練知れやと、數門の砲を一齊に發射し、開陽亦「クリュツプ」砲及び「カノー」砲を以て之に應戰し、開戰の際二千八百「メートル」なりし彼我の距離は漸次縮まりて千二百「メートル」に近づける時、東郷平八郎が覘ひ定めて放てる一彈開陽の前面に落ち、更に飛躍して其の一桁を擊てり。開陽の砲員之に激し、十三門の右舷砲を連發せしが、一彈春日の車輪に觸れ憂として反對側に躍り越えぬ。此の日天晴れて風なく、兩艦の砲烟は煤烟と混じて海面に漂ひ、敵も味方も見えつ隱れつ、巴の如く旋轉して戰ひしが、開陽の速力十二海里に比し、春日は十七海里を出し得たるを以て常に有利の位地を占め、爲めに優勢なる開陽も如何とも爲すこと能はず、終に勝敗決せずして相分るゝに至り、開陽は迂回して兵庫に歸り、春日は南方に針路をとりて急航し、六日の早朝鹿島灣に入り、京都に於ける狀況及び海戰の顚末を本藩に報告せり。此の戰ひを世に阿波沖の海戰と稱し、我が帝國に於ける歐式軍艦交戰の嚆矢となす。



附けて記す。此の海戰に於いて、春日は敵の二十六門の備砲より、許多の彈丸を注がれしにも拘らず、一發の命中彈なく、又春日よりも、大小三十八彈を放ちしも、是れ亦た三ケ所の微傷を敵に與へたるに過ぎざりしと云ふ。又汽船平運丸は無事歸國せしも、翔鳳丸は逸走中阿波の由岐浦に於いて坐礁し、乘員自ら火を放ちて之を燒棄せり。

## 第五章　北越の警備及び函館の海戰

明治と改元—春日柏崎入港—春日鹿兒島歸著—賊軍函館占領—春日艦品川廻航—盛隊北征—宮古港の血戰—函館戰爭—蝦夷地平定—春日戰鬪報告

源慶喜大政を奉還し、征夷大將軍を拜辭して、數百年來の武家政治終結を告げ、皇政復古の御世となりぬ。然るに江戸に於ける、德川方と薩摩藩士との鬪爭導線となり、一轉して伏見鳥羽の戰鬪起り、再轉して江戸附近の爭亂生じ、三轉して奧羽の征伐始まり、四轉して函館追討を惹起せるが、此の戰役中薩藩の春日艦は、南北に馳せ東西に航して常に活動を續け、而して東郷平八郎は依然其の乘組なりき。

是より先き、阿波沖の海戰を終り明治元年一月六日鹿兒島に歸港したる春日艦は、更に運送船三邦丸を護衛して兵庫に向ふべきの命に接せり。是に於て赤塚艦長は航海の準備を

整へ、一月十八日再び出發し三邦丸と共に東航せるが、既に德川方の軍艦と砲火相見えたるを以て、何時何處に於て敵に會せんも測られねば、晝夜警戒を嚴にしつゝ兵庫に到著せり。然るに開陽以下の敵艦は何れも江戸方面に去り、今や隻影をも留めざるを以て、春日は悠々兵庫方面にありて京師にある同藩の軍隊と氣脈を通じ、二月に至り長崎に廻航せしが、修理を要する箇所あるに由り、清國上海に廻航し、同所に於いて約四ヶ月を費し、七月下旬に至り鹿兒島に歸港するを得たり。此の修理廻航中東鄕平八郎は艦長以下三人と共に退艦して鹿兒島に歸り海兵の訓練に從事し、且は良人に別れ諸子に離れて孤影煢然たる母を慰め、膝に絡はりし幼子の昔に返り、暫時は母子樂しき日を送り居しが、軀て春日の歸港と共に再び艦上の人となりぬ。

此の年八月、天皇御卽位の大禮を紫宸殿に擧げさせ給ひ、九月改元ありて明治となり、官軍の兵氣益々振へり。時に關東全く平定して官軍は專ら奧羽の征討に從ひ、長驅して一軍は越後方面に向ひ、他軍は兵を二隊に分ち、支隊は仙臺に備へ、本隊は會津に進み、賊軍を破りて遂に若松城を圍み戰ひ正に酣なり、是に於て春日は八月六日鹿兒島を發し、同月十日越後柏崎に着し、丁卯乾行等の僚艦と共に、其の附近に出沒し、風波を佐渡に避くること九度に及べり。此の一事に徵するも、如何に縱橫に活動せるかを推知するに足るべし。而して九月十



日には、西鄕吉之助及び若干の兵士を新潟より出羽の久保田に送り、轉じて其の附近を遊弋し九月下旬に及びしに、一日暴風に遭ひ、難を七尾に避けし際、端なくも若松城の陷落を聞きしを以て、直ちに新潟に廻航して戰況を詳にし、尋いで歸國の命令を受け十一月一日鹿兒島に歸りしが、幾もなくして更に函館追討に從事することとなれり。

初め官軍の東下して平穩裏に江戸城を占むるや、舊幕府の海軍總督たりし榎本釜次郎は兵二千餘人を、軍艦開陽、回天、蟠龍、千代田形（內車蒸汽船にして、長十七間二尺、幅三間三尺、馬力六十）及び運送船咸臨、神速、長鯨、三嘉保に分乘せしめ、明治元年八月十九日品川灣を脫して北航せしが、上總犬吠崎に於いて暴風に遭遇し、三嘉保、咸臨を失ひ、他の六隻（開陽は楫を失ひ、回天は前檣及び中檣を折らる。）は辛うじて奧州松島港に入りしも、兵氣は稍ゝ消磨せり。然れども釜次郎等屈せず、東名の濱、石の卷、松島、寒風澤等の諸港に各艦を分泊せしめて艦體の大修繕を爲し、陸路を北走せる同志と連絡を取り、進みて陸中宮古港に入り、十月十八日此處を出發して蝦夷地に向ひ、函館の背面なる鷲木沖に著し、陸兵を揚げ、之を二隊に分ちて直ちに函館を襲擊し、激戰の後遂に先づ五稜廓を陷れぬ。而して海面よりは回天、蟠龍の二艦函館港に入り、其の根據地既に定まりたるを以て、續いて海陸兩軍力を協せて松前城を拔き益ゝ勢に乘じて江差及び函館を占領し、蝦夷地の南部一帶其の手に歸せり。然れども江差を占領する

の際、其の附近なる辨天島の傍に泊せし開陽艦は、西北の烈風を受け、雙錨の力も支ふることの能はず、終に暗礁に擱坐して全く沈沒し、之を救はんとして來會せる神速も亦破壞せるを以て、海軍力著く減少するに至れり。是より先き、明治元年七月江戸を東京と改稱せられ、十月此處に行幸ましまして東京城を皇居と遊ばされしが、十二月一旦京都に還幸あり。二年三月聖駕再び東幸ありて東京は永く皇國の首都と定まりぬ。又之と前後して蝦夷地征討の議決し、艦船を品川灣に召集することゝなり、春日艦亦其の中にあり、是より先き同艦は、明治元年十一月九日鹿兒島を發して其の藩主を大阪まで護送したる後品川に廻航せしが、十二月十五日更に同港を發して岩倉俱視を鳥羽まで送り、同月廿四日歸途に就きしに暴風に遭ひ翌日紀州浦神港に入りて損所の假修理をなし、明治二年一月十六日同港を發し下田を經て、同月十九日横須賀に入港せんとせしが、其際港口の暗礁に觸れて艦底を破損せり、是に於て同所にて直ちに本修理を施し、其の竣工を待ちて品川灣に移り僚艦と共に諸操練を勵行せり。

既にして愈〻函館征討の進發となり、陸軍は總勢六千五百人、海軍は第一甲鐵（元は「ストーン・ウォール・ジャクソン」と稱し、鑑質木製甲鐵にして、長二十五間三尺、幅五間一尺、馬力千二百、排水量噸數千三百五十八、備砲四門、西曆千八百六十四年（我が元治元年）米國南北戰爭中佛國ボルドウに於て製造



せられたるものなり、幕府は最初米國に二隻の軍艦を註文せる際、代金として洋金六十萬弗を拂ひしに、內亂等の故障に由り、富士山艦一隻を送りたるのみなるを以て、慶應三年吏を彼の地に派遣し、甲鐵艦一隻の購入を依賴したる結果「ストーン・ウォール・ジャクソン」を買收することゝなり、明治元年横濱に回航せしに、幕府顚覆後にて、遂に之を朝廷に收めたるものにして、後に「東」と稱せるは此の艦なり。）第二春日、第三陽春（艦質木製、長十六間一尺、幅四間三尺、馬力百なり。）、第四丁卯（艦質木製、長二十一間、幅三間三尺、馬力六十、排水量噸數百二十なり。）及び運送船飛龍、豐安、戊辰、晨風の八隻と定まり、甲鐵之が指揮艦となり、明治二年三月九日、花や咲く新都の春を後にして品川灣を拔錨し、威風堂々北征の途に就きしが、途中風波の難を避けて陸中宮古港に寄港し、端なくも賊艦回天と、艦々密接の大血戰を現出するに至れり。

賊ながらもあはれ勇士かなと、五十年後の今尙ほ東鄕元帥より歎賞せらるゝ回天艦長甲賀源吾と聞えしは、生年玆に二十八歲、沈毅寡言にして膽略あり、幕府の海軍に出仕してより既に七年を經、其の間或は江戸內海を測量し、或は無人島に航行し、特に幕府政權奉還の時の如き、將軍大阪を棄てゝ走り、侍士倉皇去りて其の後を收むるものなきを聞くや、源吾一人慨然として大阪城內なる將軍の居室に至り、重要の文書寶器を收め、直ちに歸航して之を將軍に獻ぜりと云ふ。此一事以て其の爲人を推知するに足るべく、今や函館の主將榎本釜次郎

が左右の腕と頼む所たり。當時賊の海軍は、最も勢力ある軍艦開陽を失ひ、全軍の意氣頗る沮喪せるを以て、釜次郎深く之を憂ひ、甲賀等を會して、官艦中殊に有力なる甲鐵艦を途上に要して之を捕獲するの議を決し、先づ回天、蟠龍二艦に、神木隊と稱する襲擊兵を乘せ、日夜艦内突入の技を演ぜしめ、其の漸く熟練するを待ちて、之を回天、蟠龍、高尾(此の艦は、賊軍が函館占領の際、捕獲したるものなり)に分載し、三月二十一日三艦は函館を拔錨し官艦の搜索に從事せり。然るに海上濃霧に遭ひ、蟠龍の所在を失し、他の二隻は辛うじて二十四日陸中大津港に入り、土民より官艦八隻の宮古港にあるを聞知せり。是に於て甲賀源吾戰略を定め、高尾を以て甲鐵艦を襲はしめ、回天は他の七艦に當ることゝし、未明に宮古港に達すべきの時刻を計りて二艦共に大津港を出發せしに、禍津日神は復た祟りをなし、高尾は機關を損して遂に來らず。今や回天一隻のみとなり、進まんか衆寡敵すべからず、退かんか好機再び得がたし同艦の乘員皆切齒して曰く、『鵜に我が艦隊北行に際し、屢〻風浪の難に罹り、今又障害に遭うて空しく好機を逸せんとす、皇天何ぞ一片の孤忠を憐まざる』と、相顧み聲を放ちて痛哭す。甲賀艦長衆を勵まして曰く、『成敗は天なり、事に臨み分を盡して殪るゝは丈夫の本懷今に及びて何の躊躇かこれあらん。』と、乃ち單艦驀進に決し、衆互に手を握りて訣別を表し亂戰の際の目標にと、白布裂きて肩に著け、兩舷の砲には實彈の上に霰彈を重裝して急發に



備へ、檣樓員は、擲彈を取り、突入隊は刀を拔きて船側に潛み、恁くして悠然宮古港に進航せり

頃しも三月二十五日、氷雨降る北國にも、何時しか春は音訪れて、船室の床も寐心地善く曉天の總起鼓(當時は午前四時半に總起鼓を打つの規則なり)を天上の樂と聽きつゝ、官艦乘組の士官の多くは猶ほ華胥の國に遊び居ぬ。折しも各艦の哨兵は、當直士官に米國軍艦の入港を報ぜしが、幾もなく一檣一烟突の一艦は、米國軍艦旗を明渡る空に飜へして進み來り、我が各艦の乘員は上甲板に集り、其の投錨の樣を見んと、談笑しつゝ眺め居れり。時に天晴れ風靜にして海波蓆のごとく、米艦は艦首に水を切りつゝ、甲鐵艦の方に近々と乘り寄するよと見る間に、星旗急に下りて日の丸の旗颯と揚がり、其の艦首は旋轉して甲鐵艦の左舷中央に丁字形に乘り掛かり、轟然たる響とともに數個の彈丸は早くも甲鐵艦上に迸れり。『賊艦』、『襲來』、『發砲』、『拔錨』、甲鐵の乘員は口々に叫びて甲板上を右往左往に駈け旋り、不意の出來事に驚きながらも、直ちに戰鬪を開始し同時に他艦に汽罐點火を命じ、敵艦の舷我より高きを見て、乘員は銃及び鎗刀等を取つて敵兵の侵入に備へたり。果然數名の敵兵短刀を閃かして躍り下り、勢ひ甚だ猛烈なりしも、我が兵亦奮鬪して盡く之れを殪し、更に小銃を連發して防ぎしに、敵將甲賀源吾激怒して其の艦首に備へし五十六斤砲を急發せしめたるを以て、巨彈我が甲板に破裂し死傷少からざりしが、此の時春日以下七隻の官艦皆錨を拔きて兵士を甲

板に集め、回天を取り圍み四面より急雨の如く彈丸を發射せるを以つて、さしも勇敢なる回天艦長も、先づ右腕を擊たれ、尋いで左脚を傷つけられしが意氣毫も衰へず叱咤戰を督して猶ほ一令を下さんとする折しも、更に一彈に頸を貫かれ、『無念』と叫びつゝ艦橋上に斃れぬ。其の他の死傷者五十餘人肉飛び、血流れて慘狀言ふ許りなく、餘衆事成らずと見て終に港外に逃れたり。(回天は元來三檣を有せしも、暴風の爲め二檣を失ひ居たるを以て、侵入の際官兵は夫れと氣付かざりしものなりしと云ふ。)回天追擊の令は直ちに指揮官たる甲鐵より發せられ、第一春日、第二甲鐵、第三陽春、第四丁卯の順序にて出港し、全速力にて敵を追ひつゝ、九里餘を航して羅賀の沖合に達したるに、遙に前方に當り、賊艦高尾の機關を損して漂泊せるを發見し、進みて砲擊を開始せしに、敵は到底免るゝこと能はざるを覺り、羅賀附近の海岸石濱と言へる所に坐礁し、自ら火を艦内に放ちて乘員陸岸に遁れ、回天蟠龍は辛うじて函館に歸著するを得たり。

甲鐵襲擊の一戰は、最も明瞭に日本武士の覺悟を物語り居るものにあらずや、視よ、彼は一艦を以て八艦中に突進し來り、縱横奮鬪其の指揮官の如き二彈に貫かれて尙ほ惡戰し、我は不意の襲擊に狼狽せず、防戰善しきを得、慓悍決死の敵をして其の志を遂ぐること能はざらしむ。其の戰鬪の猛烈なる其の運轉の巧妙なる、兩軍の意氣凜として懦夫を起たしむるに



足るものあり。彼は我に感じ、我は彼に感ぜるが中にも、春日の備砲を指揮して敵に當れる東郷三等士官は、二十三歲の血氣壯烈に燃えて最も深き感動に打たれ、同時に二大教訓を受け得たり。曰く『よもやと思ふ所へも敵は來る。』曰く、『日本魂は又文明兵器の魂なり』。

附けて記す。東郷元帥編者に當時の狀況を語りたる際、附言して曰く、『陸軍參謀黑田(了介と稱し後清隆と改む)は深謀ある人なりし、回天襲來の前夜海軍側に向ひ、敵艦侵入し來るやも測られざれば、哨艦を港外に出すべしと忠告せり。然るに海軍側にては陸軍參謀として無益の容喙なりと更に取合はざりしに黑田屈せずして深更まで激論せしが、翌朝敵果して襲來し、予等は黑田の慧眼に敬服せり』云々。

又當時回天にありし安藤太郎、後に他に語りて曰く、『宮古の激戰に就て、海戰史に特筆すべきは、「アポルテージ、ボールジング」の快事なり、譯して襲入と爲す可きか、或は襲擊となさむか、敵艦と我が艦とを密接せしめ、恰も陸戰の如くに血戰せしことなり。かのネルソンがトラフアルガルの役の頃には、西洋にても斯かる激戰ありしと雖も、近世の如き發達せし海軍には、斯くの如き戰法なし。この宮古の戰は、恐らく空前にして又絕後ならむ(中略)初め甲賀氏函館に在る時、盛に襲擊論を主張して百方勉勵す。其の宮古に入るの夜欣喜自ら堪へず曰く、『若し事成就せば、南師恐くは北海に翔翼すること難かるべしと

然るに宿志遂げずして空く鮮血を宮古の波に濺げり。然れども回天闔艦の兵、上は將校より下水火兵に至る迄、一人の潛伏する者なく、皆氏の命令の下に勇戰して襲擊に從事せり、氏も亦地下に遺憾なかるべきか』云々。

『郭公われも血を吐く思ひあり』と、賊將の一人中島三郎助が、胸中無限の感慨を述べたる函館戰爭は四月九日を以て開始せられたり。是より先き宮古港にて、回天を擊退したる我が艦隊は、氣勢大に揚りたるのみならず朝陽艦（元幕府の艦なりしを官軍の押收したるものにして、長二十八間、幅四間、備砲八門なり。）を合せたるを以て、青森灣に進みて更に戰備を整へ、二千餘の陸兵を搭載せる運送船を護衛して、四月六日同灣を出發し、平館港を經て同八日の夜半、甲鐵、春日の兩艦先づ函館の西北十餘里に在る乙部の沖合に達し、陸上を偵察して賊のあらざるを確め得たるを以て、直ちに陸兵の上陸に著手し、丁卯陽春、の二艦も亦來會して之を援助し、偶〻來襲せる賊を擊退して、上陸は安全に遂行せられぬ。是に於て我が陸軍は、九日の正午頃より、乙部の南方なる江差に向ひ進軍し、艦隊も亦之と共に海岸に沿うて航行し、江差島の砲臺附近に達するや、之に對し砲擊を試みしに、賊は既に我が艦隊の來襲を知りて退去したものゝ如く、敢て應戰するものなし。陽春艦乃ち陸戰隊を揚げて砲臺の備砲を奪ひ、同日中に江差全く平定せり。尋いで陸軍は、松前城を占領せんと欲し、二路に分れて進擊せしに



賊軍善く防戰し、奇兵を放ちて屢〻我が軍を破り、十六日には勢に乘じて江差を回復せんとせり。恁くと察せる赤塚春日艦長は、陸岸近くに艦を乘り寄せ、急射擊の令を下して敵の側面より猛烈なる砲火を加へ、陸軍亦之に勢を得て突進しければ、必死に防ぎし賊軍も終に支へ得ず、大敗して松前城に退き、更に頑强に之れを守れり。我が海陸兩軍乃ち約を定め、十七日を期して松前城を夾擊す。賊軍惡戰苦鬪せしも彈丸全く竭きたる爲め復た敗れ、城を捨て吉岡峠を望み逃走せしが、其の道路海岸なるを以て、我が諸艦は海上より尙ほも砲擊を續け、以て夕刻に及べり。時に春日の艦橋上に立る赤塚艦長、雙眼鏡を取りて陸上を望みしに、我が陸軍城下の方に進入すると覺しく、旌旗夕風に飜れるを以て、直ちに發砲を止め東鄕、伊地知をして陸戰の狀況を視察せしむ。是に於いて兩人は、端舟に乘じて陸上に至り仔細に偵知し、歸艦して陸軍の城中占領を報告せり。松前城既に陷りたるを以て、陸軍は海岸に沿うて矢不來の方に進み、海軍は之れと分れ、二十四日の曉天より、甲鐵、春日、朝陽陽春、丁卯の五隻一隊となり、威風堂々進みて函館港に逼る。賊艦回天、蟠龍、千代田形の三隻黑煙を吐きつゝ港を出でて近づき來れり。我が五艦直ちに砲火を開き、敵亦之に應戰せしが、彼は遽に敗態を裝ひ、佯り退きて我を辨天臺場の著彈距離內に誘ふ。我覺らず、勢に乘じて敵に迫りしに、乍ち砲臺より猛擊を受け、朝陽大傷を被り、他艦も戰勢の不利なるを察し、且港內の水理に熟せ

ざるを以て、終に外洋に退出せり。尋いで同二十九日、陸軍は矢不來の賊を擊破せんとし、兵を二分して兩道齊しく進み戰を開きしに、賊軍の兵氣隆にして我は屢〻苦戰に陷り死傷頗る多し、時に艦隊は陸兵を援助せんとして海岸に近寄り、甲鐵、春日、丁卯の三隻は、矢不來の敵兵に對し側面より痛擊を加へ、朝陽、陽春の二隻は、別に矢不來の南方なる茂邊地を望みて砲火を注ぎ、陸兵亦機に乘じて突進したるを以て、賊終に辟易し海岸砲臺先づ守を失うて潰走し、他の諸分隊も悉く退きて五稜廓及び函館に據り、東は湯の川、東北は赤川、南は七重濱を限りて兵を配し、我が艦隊に對しては函館灣口なる辨天崎の砲臺を固め猶ほ港内に進入するを防ぐが爲め、砂洲より海中を横斷して七重濱に數十條の綱手を張り、之に加ふるに回天、蟠龍、千代田形の三艦を以てし、防禦頗る嚴重なり。

五月二日我が陸軍は七重濱に向ひ進軍せしに、賊兵奇略を恣にし、神出鬼沒屢〻逆襲を試み、我が軍爲めに惱まさるゝこと甚し。また海軍も四日の曉天より、諸艦列を正して函館港に迫りしに、敵の三艦巧妙に進退し、これ亦急に勝を制すること能はずして退却せしが、夜に入りて賊艦千代田形、暗礁に擱坐して動かずなりければ、乘員終に意を決し、機關兵器を破壞して艦體を捨て、士氣漸く沮喪し初めぬ。我が艦の諸將之を察し、勢に乘じて總攻擊を試みんと欲し、先づ敵の張りたる綱手を切斷するに決し、春日艦長は兵士を小船三隻に乘せて、五



日の夜一度派遣せしも成功せず、六日の夜に至り遂に其の目的を達し得たり。是に於て七日の黎明より諸艦港口に進み、甲鐵、春日、朝陽は奥港を望みて、回天、蟠龍の二艦に迫り、陽春、丁卯は辨天崎砲臺に向ひ、兩隊何れも猛烈に砲火を開き、敵亦之に應じ激戰數刻に互りしが、甲鐵より放ちし三百斤彈は回天に命中し、之に大損害を與へて運轉し能はざるに至らしめ、春日等亦蟠龍を大破せり。然れども賊猶ほ屈せず、直ちに回天を砂上に坐せしめ、浮砲臺となして强抗を續けたり。此の日の戰に春日最も奮鬪し、彈丸を發射せること百七十餘に及び十八ヶ所に敵彈を被りしも、遂に殆ど敵の發砲を沈默せしめたるを以て、諸艦逐次有川沖に退き、數日の間其の鋭鋒を養ひぬ。

既にして十日となり、總攻擊の準備全く整ひ、海陸兩軍の諸將相會して軍議を決せり。其の要たるや、先づ奇兵として六百人の陸兵を豐安、飛龍の兩船に分乘せしめ、海軍は之を護りて函館山の背面に當れる寒川附近の海岸に揚げ、以て函館を占領せしめ、而して甲鐵、春日の兩艦は、辨天崎砲臺に向ひ、兼て奇兵の上陸を掩護し、陽春は敵の背面に接近して本道の陸軍に應援するにあり。是に於いて十一日午前三時の頃より行動を開始し、豫定の場所に上陸せる奇兵は、背後より强襲して同六時の頃函館山を占領するに至れり。然れども辨天崎砲臺の守兵奮戰して甲鐵、春日に當り、容易に陷落の色なく如之賊艦蟠龍は修復して運轉自在

を得、出でて朝陽丁卯と戰ひしが、其の艦長松岡盤吉は、戰死せる甲賀源吾と共に、幕府海軍の雙璧と稱せられたる勇士にて、艦の操縱巧妙を極め、一進一退殆ど五指を使ふが如く、十町餘を距てゝ放てる一彈、怒り飛んで朝陽の舷側を貫き、火藥庫内に爆裂せしかば、何かは以て堪まるべき、轟然たる響と共に、黑煙捲き上りて艦體は微塵に碎け、爲に數名の戰死者を生じ、餘衆亦概ね傷つきぬ。

附けて記す。當時の狀況を記載せる朝陽艦長中牟田倉之助の報告あり、左に之を拔萃す

（前略）蟠龍よりの飛彈、我が艦の右舷を貫き、火藥庫にて破裂し、艦の後部瞬間に破壞、前部次第に沈沒、乘組助命の者波間に漂ひ、或は檣に取附き居り候を見て、蟠龍進來致し候付、水夫壯健の者は、舟を求めんが爲に濱邊を指して泳ぎ出し、中途にて殆ど沈溺の處、備州輜重方三宅某、漁舟二艘を出して之を助け、且艦側に來る。又英國軍艦「ベール」船より、端舟二艘に士官乘添ひ、沈沒の處に來り救ふ。此内春日艦直ちに蟠龍に向ひ、丁卯沈沒の所に來り、端舟を出し助け、（中略）中牟田倉之助其の外都合二十四人、英船端舟二艘より救助を受け、有川へ上陸、鬼塚鱗之助其の外都合三十八人は備州輜重方より差送の漁舟二艘より救助を受け、七重濱へ上陸有川へ罷越す。（下略）

蟠龍の奇功を奏したるを望見せる敵の陸軍は、士氣頓に振ひ其の鋒先鋭かりければ我が



軍一旦七重濱に退きたるに、勢に乘ぜる蟠龍海岸近くに乘り寄せ、猛烈なる砲火を開きたるを以て、我は愈々苦戰に陷れり。恁くと見たる春日乘込の東郷三等士官憤慨に堪へず、直ちに赤塚艦長に向ひ進擊を請ひ、遂に甲鐵、春日は蟠龍に近寄り、一齊に砲擊を開始せしに、蟠龍屈せず、二艦に對し奮鬪を續くるうち、更に我が延年（近く本州より來會せるものなり）丁卯も加りたるを以て、勇敢不敵の蟠龍も終に敵すること能はず、包圍を衝いて砲臺下に走りしも、艦體の損害甚しくて復用ゐること能はず。是に於て松岡艦長は、我が事了れりとなし、備砲を海に投じ、機關を破壞し、回天と共に火を艦體に放ち、乘員悉く上陸して陸軍に合したるを以て、賊軍今は一隻の軍艦をも有せず、一意五稜廓を死守するに至れり。是に於て我が海陸兩軍は、連日呼吸をもつかず攻擊せしが、就中軍艦より放つ巨彈は、最も敵を惱ませりと云ふ。

附けて記す。賊將大鳥圭介の日記中に、左の如く記載しあり。

十四日頃より、甲鐵艦龜田村の海岸に近づき、五稜廓に向ひ發砲せり。其の七十斤の破裂尖彈、廓内に落ち迸裂し、勢猛劇にして、廓内の屋根或は土堤に中り、或は桂を折り、或は石を摧き、極めて大害を負はせ、遂には夜室内に臥すること能はず、土堤、石垣を楯と爲し、疊を布き屏風を建てて之を防げり云々。

三河武士が血を傳へたる關東男兒の魂見よやと、惡戰を續けし賊軍も、今は力盡きて防ぐ

に由なく榎本以下の面々涙を呑んで五月十八日降を乞ひ、蝦夷地悉く平定するに至りぬ。

附けて記す。或時東郷元帥編者に對ひて、『函館戰爭當時、我が海軍が極めて幼稚なりしは、今更言ふまでもなきことながら、考ふれば能くもあれほどの戰爭を爲し得たるものかなと思はるゝ程なり。又其の時の觀念を言へば、勝敗を懸念するよりも、寧ろいかにして戰死するが善きかと、それのみ考へ居たり』と物語れり。

戰役後に至り赤塚春日艦長は、同艦の戰鬪報告を其の筋に提出せるが、其の中に東郷平八郎云々の記事あり。これぞ此の姓名が太政官日誌に依りて、公布せられたるの嚆矢なるのみならず、其の報告は好史料の一たるを失はざるを以て、乃ち重複を厭はず之を左に掲ぐ。

三月二十日諸艦と同じく南部鍬ヶ崎港へ揃ひ碇泊の、處同二十五日朝五時三十分忽然賊艦回天亞米利加の國旗を揚げ港内へ乘入直に日の丸旗章に替へ甲鐵艦へ襲掛け、大小砲連發則官軍の諸艦及び運輸船より一同雨の如く小銃を發し候處、賊艦甲板上の彈藥を塡する能はざるや砲聲たえて後しりに甲鐵艦を離れ故に諸艦より彌發砲す當艦より大砲は五發遂に賊艦港外に逃走依て諸艦速に追擊の用意をなし、七時頃當艦港を發す諸艦も續き發し遙に蒸氣艦二艘を見る、一は十五六里一は八九里隔てたるを追かけ一艦の蒸氣僅二里程に近寄りしに、賊艦アシロット切迫の體にて方向を他方へ替へ當艦十五六町許



の距離に追詰めし處、早海岸に乘上たり依て當艦より發砲せしに乘組人數不殘上陸逃走空艦の體に付暫く見合候内、甲鐵陽春續て來り發砲す、然後黑田了介、竝に弊藩村橋直衛、池田次郎兵衛調所藤内左衛門陸兵三十人餘を率ゐ當艦より追討として上陸す五時頃アシロットの火焚一人を生捕て歸艦す、夫より直に運轉し回天を追ふ傷者如左。

淺手　水夫　佐々木吉之助

四月九日陸軍松前領乙部村へ上陸早速進擊を始む、甲鐵、陽春、丁卯艦爲應援江差村へ廻り諸臺場へ向け發砲の處、賊更に不應早逃走たる體にて見合候内、陸兵も進入せしかども敵なく戰に不及候事。

同十七日海陸一同松前攻擊に一決し朝四時五十五分當艦弘前領三厩を發し松前領江良町村へ進む處賊兵二三百人大砲三門を押立同村迄繰出し居たり、依て直に發砲賊の横を擊つ賊狼狽す、然に味方陸軍のある所を分かたす故に程能く砲發し同村より一里餘り原口村の方へ進艦の處、陸軍より約定の號旗を押立ければ艦より蒸氣笛を以て之に答ふ、夫より陸軍道々松前の方へ進入す、當艦又江良町村沖へ引返し賊の軍中へ頻に發砲す、賊兵こらへ兼追々松前の方へ引退く、陸軍駈足にて追掛け海陸共に進擊賊大砲二門を棄置散々に敗北す、海陸兵江良町村より半里程の所に止り休息す、依て當艦も發砲を止め哨船より士官伊地知

休八を以て問合せ候處只今進擊せしは長州德山備前等の斥候隊出張の儘戰しなり既に二三里も駈足には追擊兵士大に勞れ暫時休息す、追付本隊續し上は直に松前の賊を追擊せし當艦應援可致樣申越す、夫より暫くありて官軍立石野臺場八九町程の處迄押寄するや否や諸艦一同繰打にて發砲臺を築き海陸へ砲發防禦す、暫くして官軍山手の方へ筋違に進擊賊の砲臺を我横に見下し發砲す、賊不堪して終敗走す、諸艦も城下の方へ廻り城中竝に敗賊を横に射擊す賊城中に止り得す吉岡福島の方へ落走夕刻官軍城下へ進入の旗見ゆるを以て發砲を止め伊地知休八、東郷平八郎兩人を以て陸軍へ問合せしに、賊は總て逃走既に落城の趣なり、但此日賊彈一も中らず當艦の發砲は凡九十五。

同二十日三時、頃諸艦三廐を發し松前領尻内村に至る木古内村沖に回天蟠龍を見受直に追掛函館港外にて當艦より二十町程迄に近寄り發砲す、賊艦不應して港口へ逃入る、暫くして回天運動を止め發砲す、當艦よりも發砲三十八許何分港口不案内にて十分乘入に立不至遠距離にて空く彈藥を費すを以休息す、回天蟠龍港内へ退入せし故に其儘引揚る。

同二十四日七時各艦木古内沖を發し函館港口へ乘入富川臺場前迄通船の處、賊より發砲仍て直に右へ向ひ五六發應砲し港内へ乘込第一回天へ進擊せし處、回天は勿論蟠龍千代田辨天崎砲臺より大砲數十門齊く發す、故に賊艦を悉く打碎かんと彌激戰すと雖も、港内淺海



なるを以て十分に乘込運轉發砲すること能はず、且遠間の打合にては勝算も無之に依て不得已三時三十分本艦より發砲止めの號令あるを以て各艦泉澤沖へ引揚る、此日當艦發砲百六十八、賊丸三個を受く。

同二十九日陸兵進擊爲應援曉二時三十分泉澤沖を發函館港口へ乘入、五時四十分頃より陸兵矢不來臺場へ掛り發砲を始賊亦十五六ヶ所の臺場より一齊に大小砲打出す當艦より也各臺場へ手繁發砲すと雖も賊要所に據り臺場も十分防戰す、然れども官軍奮鬪激戰七時頃遂に諸臺場を悉く乘取、然に敗賊海陸兼備の臺場へ大砲一門を架し追々と屯集發砲す、當艦より亦頻りに發砲の内百斤彈丸賊の砲門的宜の處へ中るかと見る内、屯集賊兵狼狽逃走陸軍十分に進入、其より富川臺場へ掛る十時十分同所海陸臺場一時に落去の内敗賊一小隊許引返し同所海邊の臺場近く進來る、發砲間もなく賊兵散亂陸軍直に追擊有川村に至る諸艦も止砲富川沖に漂ひ居る處、賊艦千代田港内より少々乘出すを以て各艦港の方へ進擊す賊艦速に奥港へ退き續て回天も同樣乘出し、當艦より發砲の内一二發は達すと見る是亦同く退く、依て各艦止砲有川村沖へ引揚る同夜甲鐵朝陽斥候當番の處、明る五月朔日曉六時兩艦千代田へ向け發砲するを以て、直に有川沖を發し千代田形へ進擊すと雖も彼艦不應故に暫らく砲を止る折柄、甲鐵より哨船を下し彼艦へ乘入る處空艦なるを以て卽ち分捕し富川

沖へ乘越す、翌二日賊艦へ向て暫時發砲す、五月四日函館奥港へ進擊に決し八時三十分諸艦同發甲鐵及當艦先鋒港内へ乘入回天へ砲發、四十餘甲鐵淺海へ乘掛け當艦は網の張たる如きもの艦足に懸り不審に思ふ内木艦より退旗を示すを以て引退（水雷杯風聞もあり且港内不案内なる故也）十時止戰、賊より海中へ綱を張官艦を防ぐ旨函館の者追々注進す、依て函館小林重、子吉平、船虎久丸水手の案内を知りたる者を當艦へ召寄せ、五月五日夜切拂の策申付水手三郎を始め住吉丸子の日丸の水手を小船三艘にて差遣し、曉迄探索せしか共短夜にして事不成、翌六日夜再び命じ當艦梶取の方八十二乘組ませ遣す所、夜二時頃迄に大綱二筋二ヶ所へ張たるを切除き海路開けし旨歸報す、依て明日進擊に決す。

同七日曉五時諸艦有川沖を發す、甲鐵朝陽春日三艦は函館港内へ進擊春陽丁卯二艦は臺場へ掛り六時八分より砲發を始む、賊艦回天蟠龍竝臺場より之に應じ打出し彈丸如雨賊の兩艦共兩舷の砲を片舷へ備頻に連發す、味方大に難苦激烈奮鬪攻擊漸く進軍の處、回天俄に陸地へ向ひ忽ち淺瀨に乘上る、依て當艦直に奥港へ入回天の艦の方へ近寄り、手繁く發砲過半は達したるべし、賊より亦散彈或は小銃を發す、當艦之に應す、然に賊艦の乘組海中へ飛入或は小船より逃走と見え發砲も絶々に成る、既に回天破れたるを見屆有川村沖へ引揚げ、諸船將衆議し陸兵と同く速に進擊を要す、當日艦へ賊彈を受る事十七八ヶ所我砲發百七十餘



死傷如左（死傷は日誌第五十五號に出つ今之を削る）同十一日海陸同じく攻擊曉三時より辨天崎臺場へ砲發、逐送船乘組の陸兵襲手より上陸する處、賊小銃を發し依て爲應援艦を進めて砲發す。間もなく陸軍進擊するを以て當艦轉じて又臺場を攻擊す。然に朝陽艦賊の蟠龍と打合ふ中朝陽燒破す。蟠龍直に七重濱口の陸兵へ砲發す。

依て彼方危急と見受臺場を打捨て蟠龍を攻擊し奥港へ進入したり。然に不圖（よからず）も淺海へ乘掛少し後ずさりして發砲す。甲鐵も追ひ來り、共に臺場へも發砲又同じく進み蟠龍へ近寄り攻擊の處、終に陸地に乘揚げたりと見え、乘組の者小船より逃走候に付、彌烈發の處臺場よりの一彈を水平下へ受け水入懸念且砲器大損し砲發しがたく、火藥も乏しきを以て不得已砲發を止め引揚げ修繕す。此日發砲二百八十餘死傷如左、

死　兵卒　前田嘉七郎　大工　春日傳助
深手　旗手　上床良吉
淺手　船將　赤塚源六
指揮官　伊東次右衛門
海岸案内　松前藩　清瀨佐平

右は函館屯集の賊徒追討當艦戰狀如斯御座候以上。

# 第二篇　壯年時代

## 第一章　海軍出仕及び英國留學

東京遊學—龍驤艦見習士官—英國留學—練習船ウースター號乘組—帆船、ハンプシャア乘組

東郷元帥の青年時代に於ける境遇は、明治二年函館役の終了に伴うて一轉化を示すに至れり。從來鹿兒島藩の海軍士官として春日艦に乘込み、既に數回の實戰をも經驗したるに拘らず、同艦の北征を終りて鹿兒島に歸著するや、三等士官の名義は其の儘なるも、直ちに退艦して書生々活に戻りしが、幾もなくして藩侯より、東京遊學の命を受けぬ。是に於て同年の秋の末僚友と共に、復もや故郷を去りて先づ横濱に到り、同地の官吏にして英語を能くする長崎の人柴田大助方に止宿し、其の附近にある學校に通學して英語を學び、且英國人ワクマン並に柴田より發音を正し貰ふこと數月に及び、稍會得する所ありたるを以て、乃ち翌三年東京に出で、當時英學の泰斗として學界に重きをなせる箕作秋坪（阮市の養子）の塾舍に入り二十四歳の年齢を以て少年と伍して英學を修め、笑はるゝも嘲らるゝも意に介せず、夜は睡

眠を減じ、晝は雜談を止め、無二無三の勉學人を驚かして進歩も著しく、終に『東郷さん』の敬稱を受けて、塾中の長者と立てらるゝに至りぬ。

是より先兵部省は、明治二年九月に海軍操練所を創立して海軍將校の養成に著手し、尋で三年九月には、英國海軍大尉ホースを聘し、横濱に碇泊する龍驤艦（明治三年熊本藩より獻納したる艦にして、木製鐵帶、長二一二呎、幅四一呎、排水量噸數二五三〇、馬力八〇〇なり）に、各艦の將校下士卒を集めて砲術を練習せしむる等、教育訓練の基礎漸く成立せしが、同年十二月十一日に至り、東郷平八郎は兵部省より左の辭令を受けたり。

龍驤艦見習士官被仰付月俸拾四圓被下候事

是れ實に東郷平八郎なる姓名が、帝國海軍の記錄に記載せられたる嚆矢にして、洵に記念すべき一事なりとなす。恁くて彼は砲術其の他海軍に關する學術を教授せられ、刻苦精勵成績頗る見るべきものありしも、其の遠大の志は更に大に修養を期し只管其の機會の到達を待ちぬ。偶〻四年二月、海軍兵學寮（明治三年十一月海軍操練所は海軍兵學寮と改稱せられたり）生徒及び御軍艦乘組の中より、成績優等なる者を選拔し、英米兩國に派遣の議あり。（是より先き明治三年三月、政府は既に海軍生徒伊月一郎、前田十郎左衞門の兩人を、英國軍艦に乘組ましめしが、後前田は事情ありて自殺せり。）之を傳聞せる東郷見習士官は、雀躍して機到れりとなし、百



方其の目的を達せんと奔走せり。

附けて記す。東郷元帥嘗て當時の狀況を編者に語れる中に、下の如き一事ありき、

『英國に留學したしと熱望せる僚友數名、一日打寄り希望の成否につき種々意見を交換したる際、其の中の一人が芝に石龍子と云へる有名なる易者あれば、占考し貰うては如何と言ひ出せり。孰れもそれ可からんと同意し、直ちに打連れて其の易者を訪ひしに、他の者には志望叶ふべしと告げしも、某と云へる一人のみには、到底遂げ難ければ斷念すべしと言ひ渡せり。之を聽ける同人は頗る立腹し、憤々として立歸りしが、妙なものにて、此の者のみ果して選拔に漏れたり』

既にして海外派遣の人選決定し、二月二十二日に至り兵部省は、其の人々に同文の左の辭令を與へたり。

今般爲海軍修行英國江被差遣候事

但出帆日限且委細之儀者追而可相達候事

而して之を受けたるは左の十二名なりき。

石田鼎藏　東郷平八郎　伊知地弘一

原田宗助　志道貫一　西村伊三郎

八田裕次郎　佐雙左仲　赤嶺伍作
土師外次郎　山縣小太郎　土方堅吉

附けて記す。右十二名の外に横井平次郎、曾根直之進、有馬幹太郎の三名も、同樣の辭令を受けしが、三月五日に至り米國に變更せられたり。

渡英の宿志を遂げたる東郷見習士官は、僚友と共にそれ〴〵出發の支度を調へ、蠟て横濱より佛國商船に搭じ、母國の影を水や空なる水平線に見返へりつゝ香港に達し、更に英國商船に乘り換へしが其の甲板上にて、一行十二名は浴衣がけで圓座を作り、琵琶歌を高吟し、チエーストの掛聞に、人を驚倒せしめしこと屢〻なりしと云ふ、恁くて浪荒き印度洋より、史蹟に富める紅海を過ぎて蘇士に上陸し、駱駝駈ける沙漠の荒寥たる風景に愕の目を瞠りつゝアレキサンドリアに著し、再度英國商船に搭じて地中海を西航し、近くジブラルタルの要害を仰ぎては英、西の覇を競ひし激戰を思ひ、遠くトラフアルガル岬を望見しては英、佛の海軍が雌雄を爭ひし當時を偲び、やがて恙なく英國サウサンプトンに到著せり。是に於て一行は直ちに上陸し、思ひ〳〵に宿を定め暫時は倫敦其の他の見物に日を送りぬ。東郷見習士官時に年紀二十五、白面痩軀瀟洒として貴公子の風采ありしと云ふ。

附けて記す。編者の知人某、元帥が留學當時と晩年との寫眞を見較べ、『東郷さんは一



人で、義經と辨慶とを兼ね居らるゝ』と云ひしことあり。これ固より一場の戲言に過ぎざるも、又以て元帥が青年と晩年との體格に著しき相違あるの一證となすべし。

著英後東郷見習士官はポーツマスに滯在し、中流士人某方に宿泊して、語學と共に英人の風俗習慣を研究すること六ケ月に及び、稍〻之に熟するに至れり。是に於て先づ、高僧ボリネーなる者が同處に於て經營しつゝある學校（主として陸海軍志願の少年を收容す）に入り、歷史、數學、圖畫等を學び、一通り修得するを待ちて、更に海軍專門の學校に轉ぜんと決せり。

初め兵部省に於て、海軍留學生を英國に派遣するの議定まるや、同省は之を英國海軍兵學校に入校せしめんと希望し、其の旨を我が國駐在の英國公使に依賴したるを以て、同公使は倫敦にある館員シーボルドをして、書面を以て本國外務省に左の如く交渉せしめたり、

日本海軍生徒之内英國政府海軍學校に入門爲致度旨、第八月二十四日竝其以前日本政府より、シル・ハルリー・バークスへ依賴有之候儀に付、拙者左に申述候、日本政府にて差向海軍に適當の士官を教育致候儀最必要の事に有之候間、其政府にて門地ある人々の内より幼年之者數人選擧致し、海軍學校之内にて一通り習學之上海軍生徒の爲め取設有之候、演習艦に乘組せ其の生徒自國之軍艦指揮相勤り候樣上達致候迄は英國軍艦にて修業爲致度主意にて英國へ差遣候事に決定致候儀に付、日本政府より之願意御承諾被下候はゝ右

海軍生徒共をして能英語に通ぜしめ、且入門之儀に付ては英國海軍生徒之學風に依り、算術習學相成候迄は初學之學校に入れ置き申候、右生徒等英國之法に依れば年齡既に入學之期を過ぎ候樣被考候、尤當時大概十七八歲に有之候は入門之序に至り候迄には更に加齡可致候、將又日本政府にては右生徒等英國軍艦に爲乘組候儀御差支に候はゝ演習艦へ爲乘組度との主意に有之候尤追て其生徒等右演習艦を離れ候節は別段御處置有之度存候、當時入門致度人數は六名に候得共當年中には必增加可致と存候以上

然るに英國海軍省は、事情ありて我が希望を承諾せざりしを以て、シーボルドは終に左の如き書簡を我が外務卿に提出せり。

以手紙致啓上候然は先便千八百七十年第十二月二十四日竝同月二十八日附兩通之書簡を以て申述候儀に付、英國在留日本生徒姓名錄(略す)差進申候獨逸にて新楮幣製造一件に付拙者不絕英國へ不居合候に付亘細に申述候儀出來兼甚殘念之至に存候、且千八百七十年第十二月廿四日附書簡に申進置候事情實に不得已儀に有之候、日本海軍生徒英國海軍學校に入門之儀閣下御希望之通英國海軍局にて承引不致儀に既に第十二月廿四日書簡にて申進候、此一件に付英國外務局と海軍局と之往復書簡に據り總裁次官ハムモンド氏拙者へ面會致呉申候間、既に海軍局にて他國之政府則瑞典政府に海軍學校に人員相滿



居候間右同樣之儀及斷候次第も有之候趣を以て日本生徒入門之儀被斷候旨同氏へ相話申候然るに瑞典政府にて同國士官英國政府にて使用之儀願出候由、一體閣下之御希望は海軍士官を敎育致候爲め英國海軍之各港內へ備置候、依て拙者此一件に付申述候主意は悉く日本政府之希望に有之候旨、別紙(別紙略)寫之通英國外務局へ申遣し申候、尤平人にて設置候海軍學校は練習艦に乘込候以前修業致候所に有之候間日本生徒容易に入門出來可申と存候、生徒右練習艦にて不學處を修業爲致爲追ては右練習艦より軍艦に乘移り可申候右可得御意如此御座候以上

當時の狀況恁くの如くなりしを以て、東鄕見習士官は止を得ず、傳を求めてウースターと呼ばるる練習船に乘組みぬ。練習船は商船學校の如きものにて、其の練習生中の優等者は、少尉候補生として海軍に採用せらるゝの制なれば、東鄕見習士官は一心不亂に海軍の學術を勉强し、此處にても幾ならずして諸生徒より、『誠實なる日本人』と呼ばるゝに至れり。

附けて記す。東鄕元帥嘗て當時の狀況を物語れる際、『概して英人は日本人程多く食せぬものと見えウースターに乘りて第一に困りしは食事の栄の少かりし事にて、忽ち平げて仕舞ふ故、其の後は麭包を紅茶に浸しては無暗に食りしに、英人の生徒等は毎も驚きて眺め居たり』と言ひて笑ひたり。

又當時ウースター號にありて、親しく教鞭を執り居たりし海軍大佐ヘンダーソン・スミス日露戰爭の際、他に向ひ左の如く物語れりと云ふ。

『東鄕は優秀なる青年なりき、彼は所謂敏捷といふ質にはあらず。常に刻苦勉勵し學ぶにも遲きも一たび學び得たることは是を自己のものと爲したり。彼は靜肅順良なる好青年にして、獅子の如き勇氣を有したりき。英國の青年は無遠慮なれば彼等は東鄕を呼んで『ヂョンニー・チャイナマン』と爲し、常に彼を戲弄したるが彼等戲弄の甚しきに至るや、彼は靜に書を片寄せ形を正して、『予は支那人に非ず、若し今後再び然樣の言を以て、予を愚弄する者あれば、其骨を碎くべし』とて拳を擧げたるに、愚弄せし者共は皆去れり。蓋し彼等は東鄕の眞に强きを知るが故に、彼をして堪忍袋を潰さしむるまでに、彼を愚弄することは爲さゞりしなり。東鄕はウースター號が出したる海軍々人中に在て、最も成績良き一人にして、予の教育したる者のうちに、極東の最大海將のあることは、予の榮譽として誇る所なるは今更言ふ迄もなき事也。』

爰に最も趣味ありて傳ふべきの一話あり。其は東鄕見習士官がウースター乘組中、砲術研究の爲め屢〻軍艦ヴキクトリーを訪ひしことなりとなす。

ポーツマスの灣內波靜かなるところ、三檣高舷なるライン型の一巨艦泛び、檣上には大將



旗を揭げ堂々たる雄姿何となく觀者の崇敬の念を起さしむるものあり。これぞ大英國の誇として史上に輝く海の英雄ネルソンが、君國の爲めに生命を捧げて、强敵を擊破したる當時の旗艦ヴキクトリーにして、今は砲術練習艦となり、英國海軍の勇士をして、精神修養と共に技術を練磨せしむる場所なりき。固より海軍と密接の關係を有する、ウースター號の練習生は、ヴキクトリーに至りて大砲小銃等を研究するを許され居たれば、東鄕見習士官も乘船後間もなく、時々同艦に至り專念其の研究に從事せり。

『英國は各自が其の本分を盡すを期待す』との、千載不朽の信號に始まりしトラフアルガルの海戰は、如何に猛烈を極めしよ。時は西曆千八百五年（我が文化二年）十月二十一日、多年相爭うて下らざりし英と佛とは、最後の勝敗を此の一戰に依りて決せんとするなり、當時英艦隊の提督ネルソンは、ヴキクトリー號に坐乘して三十一隻の堅艦を率ゐ、大小四十隻より成る佛西兩國の聯合艦隊を、トラフアルガル沖の近海に邀へて相對せり。ネルソン意氣軒昂、全隊に向つて前記の信號及び接戰の令を下し、其の得意の驀進を以て忽ち敵陣に突入し先づ佛艦隊の旗艦を擊破して用ゐる能はざらしめ、一縱一橫惡戰數刻に亙つて敵艦隊を粉齏せしが、其の身も敵彈に貫かれ、『我今本分を盡せり。之を上帝に多謝す。我今本分を盡せり。是に由て上帝を讃美す。』と、金剛不壞の信仰を吐露し、微笑を含みて終に逝きぬ。而

も彼が邦家に捧げし最期の血汐は、英國に空前の大勝を與へ、それをして海上王の榮冠を戴かしめたると同時に、絶世の怪傑ナポレオンの大野心を挫き、以て全歐洲の民を塗炭より救へり。春風秋雨幾十年、今日しも其の六十八回の記念日を迎へたるヴヰクトリー號の乘員は、紅花綠葉を以て檣桁を裝飾し、彼の『英國は各自が其の本分を盡すを期待す』との名譽の信號旗を檣上に揭揚し、以て當年を偲ぶの便とせしが、其の檣下に集へるウースター號の練習生に向ひ船長スミス大佐は、諄々としてトラファルガルの戰況を說き、終に其の結論に入るや、熱烈の氣眉宇に溢れつゝ、ネルソンの忠勇を激賞し、『彼の死は死にあらずして千載に活き、其至誠の精神は、深く諸君の觀念に刻まれ、以て大英國の國旗を無窮に守護すべし。』と叫べり。數百の學生皆肅然として之を謹聽せる中にも、一人の日本青年は、特に感慨に堪へざるものゝ如く、更に仰いで名譽の信號を凝視せしが、誰か知らん此の青年こそ、三十年後にはネルソン以上の英雄と稱せられ赫々たる威名を世界に轟かすべき東鄕大將其の人ならんとは。嗚呼未來の大海將が、過去の大海將の遺跡を訪うて、其の偉功を偲ぶ光景は正に詩人の歌ふべき絶好の詩題にあらずや。

ウースター號にありて、實地に、學術に螢雪の苦を積むこと前後二年にして、海軍技術の大要を會得せし東鄕見習士官は、轉じてハンプシヤアと云へる帆前船（西曆千八百七十年、我が明



治三年「グリーノック」製造所に於て建造せられし「シップ」形帆前船にして、登簿噸數千百六十四、總噸數千二百十四なり。）に乘組み、西曆千八百七十五年（我が明治八年）二月（明治五年十一月九日、「自今舊曆を廢して太陽曆を用ゐ天下永世之を遵行せしむ」との詔書を下され、同年十二月三日を、明治六年一月一日と定められたれば、本書も以下記す所の月日は凡て太陽曆に據る。）の末にテームス河口を出帆し、英領濠洲メルボルンに向ひ遠洋航海の途に上りぬ。渺茫として果しも知れぬ大洋に泛ぶハンプシアは、右舷開、左舷開、さては上手廻、下手廻の技術に風を間切つて帆走し、時には船の傾斜四十度を超えて桁端波を叩くかと許り、見る眼も眩む檣上に有て、高桁手の役を務むる東鄕見習士官は、さながら梢を傳ふ猿の如く、吊揚索を力に止索を解きつ括りつ、朝夕索梯を昇降して堅腕を鍛へぬ。船は一向南方に航し、三月八日よりは殆ど西經二十度の線に沿ひて進み、同廿三日の早朝赤道を越えて南緯に入り、四月三日より漸次東方に針路を變へ、同月中旬以後は殆ど南緯四十度の線に沿うて東走し、同十九日の正午、名に高き喜望岬の南方六十海里の所を通過し、愈〻東に航する事廿五晝夜に及び、五月十四日の午後遂に目的とせる濠洲メルボルン港に投錨せり。ボーツマスを出帆してより七十餘日を費し、其の間日も月も海より出でて海に入り、帆を掠めて翔る信天翁と、船を追ふ鱶の外には、目に觸るゝものなかりし長の船路に飽きはてぬる乘員は、陸岸を望みては矢も楯も堪らず、我先きにと上

陸して料理店に躍り込み、絶えて久しき生肉野菜等に舌鼓打ちぬ。

附けて記す。メルボルンは、濠洲南部ビクトリア州の首府にして、南緯三十七度五十分東經百四十四度五十九分に位し、同州の南方フイリツプ灣に注げるヤラヤラ河の吐口に跨がり、大船巨舶も市の海岸近くに碇泊するを得るなり。

ハンプシヤア號は、五月中旬より七月中旬迄、二ケ月間碇泊せるが、氣候は一年中最涼しき季節にして、華氏五十度内外を示し、頗る心地善かりければ、東郷見習士官等は暇ある毎に、或は市中を見物し、或は沿岸廻航の汽船に投じて遠近を視察し、雄大なる樹木、珍妙なる動物等に好奇心を嗾られ、特に世界第一なる珊瑚礁の一部を見、驚異の叫びを禁じ得ざりき。

附けて記す。濠洲大陸は、動植物共に珍奇なるもの甚だ多く、有加里樹の如きは、直立五十米突周圍二十尺以上のもの少からず。又美麗なる極樂鳥、勇猛なる食火鶏、獸にして鳥の如き嘴を有する鴨嘴獸等、世界に稀なるものあり。

又洲の北東海岸にある珊瑚礁は、最大幅二十五町餘、長約五百里にして世界第一と稱せらる。

既にして七月十一日、ハンプシヤア號は愈〻メルボルン港を出帆して針路を東方に取り八月十一日南亞米利加の南端より南方七海里の所を過ぎ、これより漸次北上して、九月下旬



無事テームス河口に歸著せり。即ち去る二月、同所を出發してより七ケ月を閲し、航程實に三萬海里に上りぬ。恁くて東郷見習士官は、其の專攻の科目たる航海術の實地研究を十分に積み得たれば、英國著と共に、ハンプシヤア號を退船してケンブリツヂに移り、同所に居住せる高僧コーペル方に留まりて、其の家族と同居しつゝ專ら數學を學びぬ。

是れより先き我が帝國にては、明治五年に至りて兵部省廢せられ、始めて海軍省の設置ありしが、當時同省所轄の艦船は、大小合せて十七隻ありしも、其の勢力たるや眞に微々たるものにして、合計排水量噸數は僅に一萬三千八百三十二に過ぎず。加之東(前名甲鐵)龍驤、孟春の三隻を除けば、他は殆ど言うに足らざるの小艦のみなりしが、同七年には佐賀の亂起り、又臺灣征討の役あり。尋いで翌八年には朝鮮江華島事件起れるを以て、帝國政府は海軍擴張の急務なるを感じ、同年優勢なる軍艦三隻(一隻を甲鐵、二隻を鐵骨木皮と定む)の製造を英國に依頼し、二年を期して竣工せしむることゝせり。これ即ち當時帝國海軍の中堅たりし扶桑(艦質鐵製鐵帶、長二二〇呎、幅四八呎、馬力三六五〇、排水量噸數三七一七、乘組二九五人、製造所はポップラルなり。)金剛(艦質鐵骨木皮、長二三一呎、幅四〇吋九吋、馬力二五三五、排水量噸數二二四八、乘組二五五人、製造所はキングストンウオンボールなり。)比叡(凡て金剛に同じ、但製造所はペンブロークなり)の三隻にして、海軍省設置以後外國に軍艦製造を依頼したる最初のものなり。而して英國

滯在の海軍留學生に對しては、同九年四月十四日付にて『既に留學滿期の所新軍艦出來に付成就の節迄滯英申付候』との辭令を與へたり。是に於て東郷見習士官はグリーンウヰッチに移り、主として扶桑の建造監視に任ぜしが、同十一年二月に至り、三艦相前後して竣工し、扶桑はシヤーネスに於て、金剛はハルに於て、比叡はヤージツフに於て、各試運轉をなし好結果を得たるを以て、留學生の九名は、同年一月三十日付にて三艦に分乘歸朝を命ぜらる。則ち扶桑には赤峰、松田、土師の三名。金剛には横井、曾根（米國より轉じ來れるなり）、志道の三名。比叡は山縣、佐雙、東郷の三名なり。是に於て一同は夫れ夫れ指定の艦に乘組みしが、既にして二月十八日金剛先づ本邦に向つて英國を解纜し、（艦長は、ゼートブリウ・ウエブにして、四月廿六日横濱に著せり。）扶桑之に次ぎ、（艦長は、エフストブリウ・ハルローなり、又同艦は途中にて修復をなしたるため豫定に後れ、六月十一日横濱に著せり。）比叡は最後となり、（艦長は、エフ・アールブラック・ボールンなり。）三月二十三日ミルフオルドを出發し、本邦回航の途に就けり。

右三隻の廻航員は、我留學生を除くの外全部英國人にして、之に關し我が上野公使と海軍條約者との間に取結びたる條約書は左の如し。

茲に帝國日本政府の特命全權公使上野景範閣下と倫敦味斯閔斯德の巴力門及びブロードウエイ公會の議員コムバニヲン・ヨフ・バス賞牌（三等賞牌）を受けたる海軍條約者エドワアド・ゼイムス・リード氏との間に取結びたる條約左の如し。



イー・ゼー・リード氏は帝國日本の甲鐵艦扶桑、金剛、比叡を各其造船者より領收し之を擔任し航海の爲め之れに食品及び諸貯蓄品を充備し、其間之れを十分に補正整齊し開帆に適當なる海港に送致し士官及び水夫を適當に乘組ましめ、且日本に運送の爲め諸事其準備を十分にす可し。

イー・ゼー・リード氏は右の三隻の艦船を前に云ふが如く十分に艤裝し準備したる後之れをスエズ溝渠を經て、日本横濱に送致し帝國日本政府の有權の代理者に交付す可し

イー・ゼー・リード氏は航海中に要する總ての船溝稅港稅及びスエズ溝渠稅を拂ふ可く總て必要の食品、石炭、油獸脂、ワステ（古布の類）鉛丹及び其他此の如き消耗すべき物品を各所の港泊に於て要するに從ひて右各艦に供給し士官及び船伴（各艦に於て條約したる二名の機關士は之れを除く）に總て其俸給及び其請求せる各種の費用を授與す可し、但し本國に歸航の入費も其中に籠れり、而して全權公使は前條に云へる諸務の謝勞及び艦船交附に付き右三隻の艦船の爲めにイー・ゼー・リード氏に四萬六千ポンドの總金額を拂ふ可し、而て其拂方は四回にして下の如し、卽ち第一回は一萬二千ポンドを此條約書に捺印せし後一週間內に、第二回は同金額（一萬二千ポンド）を造船者より右艦船の二隻を交付した

る時に、第三回は同金額(一萬二千ポンド)を三隻の艦造開帆の準備整うたる時に、殘金一萬ポンドは日本に於て右艦を交付する時に拂ふ可しイー・ゼー・リード氏は前に云へる艦船は航海中避くること能はざる摩損等の已むことを得さる者の外は全く清淨且つ功用なる形狀にて交付すべし、但し航海中已むことを得さる正當の理ありて損傷を生じ、再修理再艤を爲さるゝことを得ざると人事の及ばざる天變に際逢し、右艦船沈沒若くは破毀等の事あるときは同氏は其責に任ぜざる可し。

イー・ゼー・リード氏は運輸の爲め艦内に裝載して航海の爲めに使用す可からざる總ての貯蓄品及び其他の諸物は之れを所有と爲し擔任し前條に云へる政府の代理者に交付す可し。

此條約書は各艦の二名機關士に關係する管理の事に涉る可らず是れ其機關士は各條約者ありて善く機械に注意せしめんが爲めに之れを補任し其俸給は帝國日本政府之れを拂ふ可き者なればなり。然れとも該機關士に旅中相當の食料を給するはイー・ゼー・リード氏之れに任ず可し

全權公使不慮の事或は破損に因り生じたる費用を造船者或は保險者より徵求す可き時其事件に付き久しく時日を遷延し之れに因り生じたる增入費はイー・ゼー・リード氏之



れを償却す可きことは明かに理會せらるべし、艦船到着の時に於てイー・ゼー・リード氏の所有する石炭、油、獸脂或は其他斯の如き諸貯蓄品の艦内に殘りたるものあらば、其代價をイー・ゼー・リード氏に拂ふ可し。

かくて比叡は海路恙なく、マルタ、ポートセード、アデン、シンガポールに寄航して五月二十二日午前十一時二十五分横濱に入港し、東郷見習士官は新知識を齎しつゝ八年振にて目出度歸朝せり。

附けて記す。東郷見習士官が此の英國留學中、明治七年我廟堂に於ては彼の有名なる征韓論起り、終に西郷隆盛以下多數の薩南健兒、袂を聯ねて職を辭したるの報、幾もなく英國に達しければ、留學生中には、急遽歸朝すべきを主張せるものありしが、東郷見習士官は斷乎として之に應ぜず、『吾々は朝命を以て、海軍研究の爲め派遣せられたるものなれば縱し本國に何事ありとも、十分成業するまでは歸朝など思ひも寄らず、必ずや留學の目的を達し以て君國の爲め本分を盡さゞる可からず。』と主張し、遂に對手を屈服せしめしが尋いで十年の役起り、東郷見習士官の一族擧つて薩軍に投じければ、僚友等皆其の胸中を察し、何かと之を慰めしに、彼は慨然として『兄弟始め一門皆薩軍となりたる事朝廷に對し奉り洵に恐懼に堪へざる次第なるも、從來の事情より推察して、西郷先生にして起たば

一門恁くなるべしとは豫て推測せる所、今更如何とも致し方なし。切めては自分丈なりとも、益〻海軍の技を修め、後日何かのお役に立ちて皇恩に報い奉るの決心なれば、上命あるまでは斷じて歸朝など願ひ出でず。』と、涙を振つて物語りければ、聽く者皆其の健氣なる覺悟に感ぜり。

又餘事ながら併せ記さんに、此の役に於て、東鄕見習士官の兄壯九郎實次は、明治十年九月二十四日城山にて花々しき戰死を遂げたるが、亂軍の際なりければ、戰友等其の屍を毛布に包み假埋となし置きぬ。母益子之を本意ならずとし、亂平ぐや改めて埋葬せんと思ひ立ち、他人の力をも借らず唯一人にて墓所に至りしが、鋤鍬の類を愛兒の遺骸に觸るゝに忍びずとて、赤手土を掘りては息み、息みては掘り、十指の破れ傷くも厭はず遂に遺骸を發掘し、改めて之を鄭重に埋葬し、絶えず其の菩提を弔へりと云ふ。

## 第二章　歸朝後に於ける軍艦乘組

海軍中尉―扶桑艦乘組―海軍大尉―再度比叡艦乘組―海軍少佐迅鯨艦副長―天城艦副長―結婚

明治十一年五月二十二日英國より歸朝したる東鄕見習士官は、同年七月三日海軍中尉に



任ぜられ、依然比叡乘組なりしが、同艦は英人同航員の手より我が海軍に引渡さるゝと同時に、海軍中佐澤野種鐵其の艦長に補せられ、副長以下もそれ〴〵任命ありて、六月二十二日常備艦と定められ、七月十日に扶桑、金剛の二艦と共に、横濱港に於て天覽の榮を賜はれり。

附けて記す。當時東鄕中尉は未だ我が海軍の號令を熟知せず、兵員に對し思ふ儘の號令を爲すにより、同僚は之を違式なりと詰りたるに、『否上官が下に發すれば卽ち命令なり。之に違背するものは斬り捨てんのみ』とて遂に屈せざりしと云ふ（編者嘗て軍事談片にて、此の事を淺間艦に於ける逸話とせしは誤りなり。）

既にして八月十六日に至るや、東鄕中尉は扶桑に轉補せられたるを以て、直ちに比叡を退艦し、横須賀港にて扶桑に乘艦せしが、乘員は艦長海軍中佐伊東祐亨（後の元帥）以下、何れも俊秀の聞えある將校のみなりければ、英國仕込の中尉の鼻を挫き呉れんと種々の難役に當らしめぬ。然るに中尉は些の顧慮躊躇もなさず、平然として我が海軍流と、英國流と、我流とを打雜ぜ、思ふ存分に活動せしかば、衆皆其の强情に呆れ、後には之を凌辱せんとするもの一人も無きに至れり。

附けて記す。當時扶桑艦にありし海軍少尉山本權兵衞（後の大將）は、惡戲者の首領と立てられし程なれば、何とかして東鄕中尉を閉口させやらんものと、一日之に逼りて索梯の

昇降競を試みたり。兩人は一、二、三の合圖にて兩舷より同時に昇り始めたるに、東郷中尉の熟練は山本少尉に及ばず大に後れ、而も中途にて穿袴破れ、山本少尉が既に降り終りし頃、猶ほ檣の中央にありしが、急がず、騒がず紆々と降り來りたるより、衆皆中尉を負けたりと評したりしに、中尉は頭を振り、『否負けたにあらず、穿袴が破れたる爲なり』と言ひ張り終に衆議に服せざりしとぞ。(編者嘗て軍事談片にて、此の事を金剛に於ける逸話とせしは誤りなり。)

尋いで伊東扶桑艦長は、乘員に、同艦搭戦の新式武器たる、グルツプ砲及び水雷の練習を奬勵し猶ほ機關其の他に修理を施し、十一月廿八日試運轉として、横濱より熱海迄往復したるが、其の際太政大臣三條實美等、之に便乘して其の狀況を視察せり。既にして十二月六日に至るや、更に運用試驗として兵庫まで往復することゝなり、東海鎭守府司令官海軍中將伊東祐麿の一行、及び各艦より選拔の火夫等乘艦し、途中金田灣に寄港の上、八日兵庫に到着したるが、之に關し伊東中將より、海軍卿川村純義に提出せる報告書中に左の言あり。

(前略)七日午前九時三十分比より遠江灘へ掛る風浪も有之候得共、大艦故に聊動搖不致至て平穩にて速力も次第に相增し、十里より十一里位の平均に有之殊之外都合克く本日正午十二時三十分當港へ着艦投錨仕候、乍去孟春鳳翔等の如き小艦にては餘程動搖甚敷



御座候半と被存申候(下略)

之に徵するも、同艦の如何に重視せられたるかを察するに足るべく、同時に當局者が之に對する得意の狀さこそと推知せらるゝにあらずや。

恁くて數日の後、扶桑艦は横濱に歸港したるが、同十二月二十七日、東郷中尉は海軍大尉に任ぜられ、引續き扶桑艦乘組となれり。翌十二年四月二十八日、同艦は皇太后宮、皇后宮の台覽を辱うせり。尋いで同年九月五日、東郷大尉は更に比叡乘組に補せられ、直ちに之に轉乘し愈〻艦務に勉めしが、時に比叡は東海鎭守府に屬し、常備艦たるを以て、時々他艦と共に艦隊運動を試み、諸操練を勵行する等常に活動を續くるうち、同年十二月二十七日に至り東郷大尉は、現官にある僅に一年にして少佐に拔擢せられ、十三年一月五日迅鯨艦(艦質木製、長二四九呎、幅三一呎、馬力一四〇〇、排水量噸數一四五〇乘組一七〇人、製造場横須賀)副長に補せられ、直ちに横須賀に赴き、先づ其の艤裝より監督し、竣工するに及んで引續き其の職にありき。

世に劇職多し、而も軍艦の副長程繁劇なる職務は稀なるべし。兵員に先だちて起き、後れて寐ね、操練、事業等艦内細大の事務は云ふまでもなく、兵員の衣服の洗濯、食物の善惡、さては厠内の掃除まで、日々監視して些の汚物を留むるを許さず、譬へば一人にして、主婦と、執事と下女下男取締とを兼ねたる如きものなれば、寛嚴宜しきを得ること頗る難き職務なるが、東

鄉少佐は身を持すること謹勉に、誠實人を待ちしかば、暫時にして名副長の譽を得、部下の悅服する所となりぬ。

附けて記す。東鄉副長は乘艦以後寒風骨に砭して甲板氷よりも冷き朝と雖も甲板洗の時の如き、兵士と共に穿袴を褰げ靴を脫し、素足に甲板を步し、洗方を督すること一日も惰らざりしとぞ、又秋の末の或夜のこと、暴風强雨遽に襲來しければ、豫て勤直を以て聞えたる甲板掛士官、夜間三度起き出でゝ上甲板を巡視したるに、每時副長が、兵士と見紛ふ許り雨衣に身を固めて、雨中に佇み居るを見、其の精勤に驚愕したりと云ふ。

恁くて迅鯨副長たること約二年にして、明治十四年十二月二十七日、更に天城艦（横須賀に於て製造せられたるものにして、艦質木製、長二〇〇呎、幅二九呎、排水量噸數九二六、馬力七二〇、乘組定員一三〇人なり。）副長に轉職せり。

附けて記す。三十五歲となれる東鄉少佐は、此の年二月鹿兒島藩士海江田信義（同藩士有村治右衞門の次男にして、海江田家を襲げり。夙に尊王の大義を唱へ、西鄉隆盛、大久保利通と計畫する所尠からず。戊辰の役には、東海道征討總督參謀となり、西鄉等と江戸城引渡を受く。明治二十年五月華族に列し子爵を授けられ、後樞密顧問官に任ぜらる。）の長女てつ子（文久元年九月二十八日生る）を娶りて夫人となす。てつ子時に芳紀二十一、性恬淡謙讓にして淑德の譽高く、當時豐な



らざりし東鄉家の財政を整理し、姑に事へ夫に侍し、苦心慘憺以て著々內助の功を擧げ、雄心勃々細事に拘らざる夫君をして、絕えて後顧の憂なからしめ、又親く奔走金策して、同年遂に麴町上六番町七番地に、三百坪の地所を家附にて購ひぬ。これぞ後に東鄉坂と命名せられて、東京名所の一に數へらるゝ元帥が現在（大正十年）の邸宅なり。而して明治三十九年に至り、西洋式の玄關、應接室、食堂等を增築し、邸內も六百餘坪に增加し、門の位置は數間北方に移りたるを以て、玄關前の趣一變したるも、蝕みし黑塗の門は從前のものなり。

## 第三章　朝鮮仁川廻航

中艦隊仁川回航—濟物浦條約—袁世凱訪問—大同江測量—第二丁卯艦長

明治十五年朝鮮京城に變亂起り、暴徒我が公使館を襲へり。

是より先き朝鮮政府は、從來の軍隊の外に新式隊を設立し、我が陸軍中尉堀本禮造に其の訓練を託したるが、舊式兵之を嫉視し、終に兩隊相反目するに至りぬ。然るに國王の生父大院君は素と王妃の一族閔氏と相善からざるを以て、舊式兵の不平に乘じて頻に之を煽動せり。之が爲め明治十五年七月二十三日舊式兵遽に暴發し、閔族數名を殺し、闕內に闖入して王妃を索めしも獲ず、轉じて堀本中尉及び我が留學生七名を殪し、更に公使館に襲來したる

を以て公使花房義質は二十餘名の部下を率ゐ、先づ王城に赴かんと欲し、圍を衝いて南大門に到りしに嚴鎖して入ること能はず。公使乃ち意を決して仁川に走り、途中奮鬪して屢〻暴徒を擊退し、翌曉遂に仁川の海岸に出で、小舟に乘りて港口にある月尾島に渡れり。適〻英國測量艦フライングフイッシ號、其の附近にありしを以て、公使之に急を告げて救を求め同艦に乘りて僅かに長崎に到るを得たり。此の報東京に達するや、朝野騷然、外務卿井上馨急行して下の關に赴き、花房公使と會して之に問罪の訓令を與へ、朝鮮に再航せしめぬ。

花房公使は、明治丸に乘じて八月十日出發し、陸軍少將高島鞆之助は、陸兵二中隊を率ゐて公使と同船し、海軍少將仁禮景範は、金剛艦に駕し、清輝）始めて邦人の手により、横須賀にて建造せられたるものにして、艦質木製、長二〇〇呎、幅三〇呎、馬力四四三、排水量噸數八九七なり。）天城、日進（元は佐賀藩の艦にして艦質木製、長二〇三呎、幅三一呎、馬力七一、排水量噸數一四六八なり。）比叡、迅鯨、孟春（元は佐賀藩の艦にして、艦質鐵骨木皮製、長一三一呎、幅二二呎、馬力一九一、排水量噸數三五七なり。）盤城（艦質木製、長一五四呎、幅二五呎、馬力六五九、排水量噸數六五六なり。）の諸艦より成る中艦隊を指揮し、明治丸を護衛して相共に出發し、同十二日仁川港に著するや、公使は陸兵に護られて直ちに京城に入り、艦隊は同港にありて專ら操練を勵行せり。而して東鄕少佐は依然天城副長なりき。



朝鮮政府との交渉は、例により澁滯せり。我が要求したる數事の覆答は、期を限るに三日を以てしたるに、彼の議政官は、急に山陵巡視の要起りたるが故に、歸後之を議せんと答へ、更に要領を得ず。蓋し大院君勢力を得て、其の從來の主張たる、鎖攘の政策を取らんとするを以てなり。我が公使其の邦交を侮蔑するを憤り、決然談判を止めて仁川に歸り、陸海の將士は皆腕を撫して後命を待ち、雞林の風雲轉た急ならんとせり。

此の時に當り、清國提督吳長慶、北洋水師統領丁汝昌、道員馬建忠、袁世凱等、軍艦威遠、揚威、超勇の三隻を率ゐて仁川港にありしが、形勢の容易ならざるを見るや、南洋灣より上陸して京城に赴き大院君を欺いて其の軍艦に誘載し、急遽錨を拔て天津に還れり。是に於て朝鮮政府の議一變し、帝國の要求に應じて、所謂濟物浦條約を議定し、終に事なきを得るに至れり。

附け記す。東鄕元帥編者に當時の狀況を物語れる序に、『當時天城は南洋灣內を視察するの命を受けしが、水路を知れるものなかりしを以て、已むを得ず窮策を出し、先づ其の灣口に至りて假泊し清艦の出入するものあるを待ちしに、幸に一艦灣內より出で來りたれば、篤と其の水路を見定め、之に倣うて入港したるが、我ながら滑稽なりし。』と云うて微笑せり。

事件落著後も、天城艦は引續き仁川方面にありて警備の任に當り居りしが、此の際東鄕副

長は、陸軍將校（公使館附武官陸軍歩兵大尉磯林貞三なるべし）と共に、一日袁世凱を訪問し、始めて談話を交へたるは、又趣味ある一話たるを失はざるなり。傳ふる所に據れば、當時袁世凱は東洋の大勢より、日支親善の必要を述べ、說き去り說き來つて敎ふる如く、談論風發時餘に及びしが、其の間對手の面上を凝視して默默たりし東鄕副長は通譯了るを待ちて唯一語『了解らぬ』と答へしのみにて、其の後は世凱が數萬語の言論に一切耳を貸さず、空嘯きて一言の答をもなさゞりしかば、有繋の世凱も施に術なく、手持無沙汰に其の論鋒を收めしと云ふ。

此の警備中天城艦は大同江の測量にも從事せり。抑〻大同江は、朝鮮六大江（鴨綠江、大同江、漢江、錦江、洛東江、圖們江）の一にして、源を咸鏡道の境なる狼林山に發し、船橋里の平原を環りて西に走り、鐵島附近に至りて二川合流し、北緯三十八度四分の處に於て、黃海に注ぐの大河たり。而して天城艦は、仁川港を拔錨して黃海に出で、北航して白翎島の西方を過ぎ、少乳蠶角を遶廻して大同江口に達し、最も注意警戒して、席島より溯行すること三十餘里、鐵島附近に至りて投錨し、更に汽艇を用ゐて、猶ほ三十餘里を溯行して平壤附近まで到達し、地勢を視察し水深を測量せり。

かくて天城艦は大同江の測量を了へ、十六年二月馬關に歸著したるに、同月二十四日東鄕



副長は、『御用あり日進艦へ便乘歸京被仰付候事』との命令に接したるを以て、急遽旅裝を整へ、日進艦に便乘して横須賀に至り、三月十一日著京、直ちに海軍省に出頭したるに、翌十二日天城艦副長を免ぜられ第二丁卯艦（艦質木製、長一二〇呎、幅二一呎、馬力六〇、排水量噸數一二五製造所英國ロンドン）艦長に補せられぬ。これ實に元帥が艦長となりし最初にして、時に年紀三十七なりき。

附けて記す。東鄕少佐天城副長として馬關碇泊中、艦長不在の際某國の旗艦入港せり然るに其の司令官は大佐なるを以て、東鄕副長は代將旗に對する定數の禮砲を放ちしに彼は大佐なるも純然たる司令官なりしを以て、之に相當する禮砲を受くべきものなりと交渉し來れり。是に於て東鄕副長は其の粗忽を詫び、改めて發砲すべき旨を答へしも、全數は放ずして、單に不足の數のみに止めしかば、彼は益憤激して嚴談し來れり。然るに東鄕副長は冷然として、『前後合すれば司令官の定數となるべし』と答へしに、執拗なる彼は烈火の如く憤り、更に我が海軍省に交渉し、海軍卿より東鄕副長に、打ち直すべき旨申し來れり。之に對して副長は例の如く、『前後合すれば定數たるべし』と主張して屈せず終に譴責を蒙りしと云ふ。惟ふに這は副長が徒に奇矯を衒ひしにあらずして一は當時動もすれば傍若無人の擧動をなせる外國軍艦の暴慢を挫き、一は我が海軍將校の爲に氣

を吐きたるものなるべし。

## 第四章　南清廻航

天城艦長―天城艦上海入港―楊子江溯上―清佛開戰―新戰場視察―クルベー中將訪問―天城艦長崎歸著

明治十六年三月十二日始めて艦長に補せられたる東郷少佐は、第二丁卯艦にあること一年餘に及び其の間或は安藝の呉港を視察し、或は肥前の佐世保港を測量し、又本邦沿岸を廻航する等、愈ゝ海事の研究を積みて翌十七年に至りしに、同年五月十五日天城艦長に轉補せられぬ。

時に天城艦は中艦隊に編入せられ、旗艦扶桑（艦長海軍大佐伊藤祐亨）と共に司令官海軍少將松村淳藏に引率せられ、五月一日清國上海に向ひ横濱を出發して廻航の途にあり。是れ安南事件に關し、清佛兩國間に葛藤起りたるを以て、萬一の場合に際し、上海方面の居留民保護に任ぜんが爲にして、松村司令官は其の筋より、大要左の訓令を受けたるを以てなり。

今般我が政府は英國政府の發議に依り、英米獨三箇國と共に軍艦を清國地方に派遣することを決定せり、其の目的は專ら現下安南事件に關し清佛兩國の間將に平和を失はんとするの形勢あるを以て萬一急變事あるに至らば、右四箇國は各其の軍艦を以て清國に在留する中立國の人民及び財産を保護するにあり、依て清國碇泊中右の場合に至らば須く三箇國提督若くは軍艦長と商議し互に相協力し、以て其の目的を達することを務むべし右清佛兩國開戰の時期に際會せば、我が軍艦は堅く中立國の條規を守り、毫も兩國の兵事に干渉す可からず云々



新に天城艦長に補せられたる東郷少佐は、即日東京を出發して長崎に急行し、同港に於て僚艦と分れ新艦長を待てる天城艦に乘艦し、前艦長伊知地弘一と交代して直ちに出港、五月三十日上海に入港して旗艦扶桑に合せり。

附けて記す。前天城艦長伊知地少佐は、乘艦兵員の食費を、金錢にて支給する現制を弊害ありとなし自艦率先して物品に改めたしとの意見を持し居たりしも、未だ實現するに至らずして東郷少佐と交代したりしが、同少佐も亦大に此の説を贊し、幾もなくして遂に之を斷行し、他艦も漸次之に倣ふに至りぬ。

上海に入港せる天城艦は、數日碇泊の後松村司令官の命を受け、單獨錨を拔きて出發し、古來許多の英雄が、一興一亡幾變遷を重ねたる、其の歴史を浮べて永へに流るゝ楊子江を溯り鎭江、南京、蕪湖等を過ぎて、終に上海を距つる六百餘哩なる漢口に達し、其の支那大陸の中樞

にして四通發達の要地たることを視察し、六月下旬上海に歸著せり。是帝國軍艦が漢口に溯行したるの嚆矢となす。既にして八月下旬となるや、清、佛兩艦隊同月二十三日福州馬尾に於て、砲火を交へたるの報ありたるを以て、天城艦長は司令官の命を受け、同月二十九日上海を出で福州馬尾に向つて航行せり。

初め佛蘭西政府の安南國と一條約を締結するや、其の履行に關して憤激する所あり、爲に西曆千八百八十三年（我が明治十六年）遠征軍を起して安南を攻撃するに至りしが、當時清國政府は潛に兵を遣りて安南を援助したるを以て、清佛兩國間に紛議を生じ、一旦平和に歸せんとして遂に成らず、本年八月に及びて交渉至難の域に達せり。折しも佛國中艦隊司令官海軍中將クルベーは、艦隊の大部を率ゐて福州馬尾に泊し、司令官海軍少將レスピーは別に三艦を以て臺灣雞籠港（後に基隆と稱す）にありしが、八月五日レスピー少將の支隊は、遂に雞籠砲臺と砲火を交へたるを以て、事件愈〻重大となり、同月十九日和議全く破るゝに至りぬ。

此の時に當り福州馬尾には、清艦揚武（コルベット、一六八〇噸）、永保（コルベット、一四五〇噸）、深航（同上）、飛雲（通報艦、一二五〇噸）、伏波（同上）、濟安（同上）、藝新（砲艦、五一五噸）、福星（同上）、福勝（砲艦、八八〇噸）、建勝（同上）、振威（砲艦、六〇〇噸）、の十一隻、及び支那式兵船十二隻、蒸汽水雷艇七隻、放火用橈漕端艇數隻、佛國艦隊の上流に泊し、陸上三萬の兵士竝に下流の兩岸に屹立する金牌、長



門、北岸、南岸、新閩安、舊閩安、羅星塔船政局等の砲臺と相須ちて、外觀頗る威容あれども、是れ等の兵員は閩浙總督何璟より『暫く佛艦より開戰するを俟つべし、決して我より彼を砲撃すべからず、且彼を砲撃するよりも寧ろ固く己れを防禦するを要す』との訓令を受けたりしと云ふ。

附けて記す。閩江は支那福建省に屬し、一名馬江と稱す。溯江の汽船は、江口より二十五海里の馬尾に至りて泊するを常とす。馬尾は有名なる福州船政局の所在地なるを以て、其の下流所々に砲臺を設けて防禦を嚴にせり。而して其の第一の要害を、江口の兩岸にある金牌、長門の二砲臺となす、此の所江流狹隘にして、兩岸相距る千二百尺に過ぎず。

清國艦隊の下流に泊したる佛國艦隊はラ・ガリソニエール（巡洋甲鐵艦、四二〇三噸）、ヂュゲー・ルアン（一等巡洋艦、三二八九噸）、ビルラー（一等巡洋艦、二二六八噸）、デスタン（一等巡洋艦、二二三六噸）、シャトー・レノー（一等巡洋艦、一八七五噸）、ボルタ（三等巡洋艦一二〇二噸）、リンクス（砲艦、四七四噸）、アスビック（砲艦、四六三噸）、ビペール（同上）、サオーン（運送船、一五九〇噸）、水雷艇四十五號、同四十六號の十二隻にして孰れも嚴密なる戰鬪準備をなし、一令下らば大活動を開始せんと待ち構へぬ。（開戰後トリアンフアント（巡洋甲鐵艦、四一七六噸）も來り合したり。）

時は西曆千八百八十四年（我が明治十七年）八月二十三日午後一時五十六分、佛艦リンクス

號の檣樓より一簇の白烟迸るよと見る間に、自餘の佛艦一齊に砲火を開きて、清國艦隊を攻撃せり。清艦亦直ちに應戰したりしも、敵の砲數七十一門（四十三門の一舷發砲を爲し得）に對し、僅に四十五門（二十三門の一舷發砲を爲し得）を有するのみならず、各艦の主砲は艦首の方へ備へあるに、恰も干潮に際して艦尾佛艦の方に向ひたるに由り、愈〻砲數を減じ、且は防禦にのみ力を盡せよとの豫ての訓令に士氣挫け居たるを以て、忽ち敗色を呈し揚武號の如き僅に一回發砲したるのみにて、砲員の大部分敵の機砲彈に斃れ、其の他の清艦も開戰後十五分間を過ぎざるに盡く火災に罹り、甲板上死屍累々として慘狀を極めたり。佛軍之に乘じ、水雷艇四十六號は、砲烟を冒して揚武號に肉迫し、艇首に備へし外裝水雷（圓材の尖端に水雷を附し敵艦を衝きて爆發せしむるの裝置なり）を觸發せしめて敵に大損害を與へ、揚武號は淺瀨に遁れ辛うじて沈沒を免かるゝを得たり。又水雷艇四十號も伏波號の襲撃に向ひしが、敵艦に達する前、清國の水雷小艇に障げられ、微傷を伏波號に與へしのみにて退却し、之に代りてボルタ號の小汽艇、再度の襲撃を試みて伏波號の推進機を破壞し、同艦をして下流に漂泊せしめ、佛砲艦の兵員之に闖入して高く佛國軍艦旗を揭げぬ。クルベー中將之を望みて會心の笑を漏し、更にリンクス、アスビツク、ビペールの三艦をして、錨を拔きて淺瀨に擱坐せる揚武號及び其の上流にある清艦に向はしめ、ビルラー、デユゲートルアン、デスタン及び開戰後に



來會せるトリアンフアントの四艦には、其の附近に錨泊せる清艦飛雲、濟安、振威の三隻と羅星塔砲臺との破壞を命ぜり、恁くて佛艦隊は、開戰後約三十分にして戰鬪を止めしが、清艦は或は沈沒し、或は大破し、僅に永安、藝新の二隻のみ吃水特に淺かりしを以て、一旦上流に遁れしも、幾もなくして浸水の爲め沈沒し、清國艦隊又隻影をも留めざるに至り、唯其の碎片の波間に漂ふを見るのみ。既にして佛艦隊は、更に砲火を開きて船政局、羅星塔、馬尾山上等の砲臺と戰を交へたる後、日沒の頃砲臺よりの發射線外に退きて碇泊せり。クルベー中將は戰勝に乘じ、廿四日には船政局を砲撃し、廿五日には陸戰隊を揚げて羅星塔砲臺の備砲を破壞せしめ、是に於て同中將はボルタ號よりデユケー・トルアン號に移乘し、自餘の諸艦を率ゐ、流に從うて閩江沿岸の砲臺攻撃に向ひ、先づ舊閩安砲臺を撃破し、廿六日より廿九日に亙りて金牌、長門等數箇所の砲臺を攻撃し、陸兵を揚げ備砲を水中に沈め砲臺を破壞せり。此の役佛艦隊は、僅に戰死者十名（內士官一名）負傷者五十八名（內士官六名）を出せるのみなるに、清軍は實に數千名の死傷者ありしと云ふ。

越えて九月一日我が天城艦新戰場に入港し、東鄕艦長は仔細に戰場を視、兩軍勝敗の由つて來る所を鑑みて深き感慨に打たれ、乘組將校を集めて、軍人の覺悟と技術の練磨とに關し懇に訓戒する所あり。尋いで詳細の報告を松村司令官に提出したる後、佛國艦隊の跡を追

うて香港に移りしが、十月初旬に至り、同艦隊は臺灣に進航し、其の北部にある雞籠淡水の二港を砲擊すべしとの情報あるに及び、更に松村司令官より其の方面を視察すべきの命を受けたるを以て、十月三日香港を出發し、同五日先づ淡水港に投錨せり。

附けて記す。淡水港は臺灣の北部高山脈の南を流るゝ淡水河の河口にあり、港口西北に開き、南風西南風は之を避くるを得べし。港の防禦は港口の陸上にある一砲臺と、北山上に設けたる四箇の土壘のみなりと雖も、其の地勢たる層巒相連りて溪澗縱横に走り、所謂一夫守れば萬卒攻め難きの要害を成せり。西曆千六百年頃、西班牙人此の地を占領し砲臺を築きサンチヤゴ城と名づけしが、後阿蘭人の領する所となり、更に明末の快男子鄭成功臺灣を領するに及び、之を修復して守備兵を置けることあり。

是より先きクルベー中將は、福州馬尾の一戰に清國艦隊を粉齏したりと雖、未だ清國をして和を請はしむるに足らざるを察したるを以て、乃ち更に臺灣の要部を略取せんと欲し、艦隊を二分し司令官レスビー少將をして三艦より成る一隊を率ゐて臺灣淡水港を攻擊せしめ、自ら他の一隊七艦を指揮し、雞籠港を陷れて陸路陸兵を淡水に進め、レスビー少將の艦隊と水陸の連絡を取るの計畫たり。是に於て兩艦隊共に十月一日を以て各目的の港に浸入せしが、雞籠砲臺中の重要なるものは、先にレスビー少將の攻擊に遭うて概ね破壞せられ、僅



に兵營及び假設砲壘等あるのみなれば、クルベー中將は直ちに攻擊を開始し、運送船に搭載し來りし二千名の陸兵を揚げて、一戰に防禦の清兵を破り、一日にして悉く兵營及び砲壘を略取せり。

附けて記す。雞籠港は淡水の東方に位して其の地形勝を占め、港口は北に向つて開け樹木繁茂して水際に及び、小巒連り延びて風景畫くが如し。此の地も亦淡水と同じく曾て西班牙人に占領せられ、支那南部と呂宋との貿易の中心を爲しゝが後阿蘭人の有に歸し、更に鄭成功臺灣を領するに及び守備兵を分配せることあり。

然るに淡水に向へるレスビー少將の一隊は、同月二日より連日港の北方山腹にある四箇所の砲壘を攻擊したる後、八日に至り六百名の陸戰隊を北部の海岸より擧げて進軍せしめたるに、三千の清兵險に據りて力戰し、爲に佛軍は將校以下六十五名の死傷を生じ、終に退軍するの已むなきに至りたるのみならず、雞籠より淡水方面に進出せんとせし佛軍も、清軍に支へられて是亦容易に其の目的を達すること能はず、暫く休戰の狀を呈せり。是の前後に於て東鄕天城艦長は雞籠港を視察せんと欲し、同月七日淡水より同港に廻航し、直ちにクルベー中將を訪問して親く戰況を聽き、陸上の防禦線を視察せんことを請ひしに、中將快諾し案內者を附隨せしめんことを約す。是に於て東鄕艦長は乘組の將校七名及び上海より視

察の爲乘艦せる陸軍歩兵大尉山根武亮と共に、八日早朝より上陸し、清軍の砲臺築造法備砲の種類、及び佛軍の射擊熟練の程度等を詳細に視察したり。其の記事中に、『清兵は善良の機械を實用せざるものと見えたり』と云ひ、又『佛軍が、占領したる砲臺のクルツプ砲迄も自用に供せずして破壞したるより察すれば、早く此の地を立ち去るなるべし』等の語あり又以て其の注意周到なるの一證となすべきなり。

尋いで五日、天城艦は再度淡水港に戻り、前日の戰況を調査し、東鄕艦長は記して曰く『此の日の戰爭は佛軍の大敗北なり、今後は十餘日の後陸軍兵の到着する迄進擊を中止するなるべし。』と。恁くて十二日に至り淡水を出港し、厦門、南日島、馬祖島を經て同月二十三日上海に歸著し、東鄕艦長は更に松村司令官に馬尾、雞籠、淡水等の戰況より、香港、厦門等の狀況を詳細陳述せり。

上海歸着の後、天城は尙ほ警備の任務に服しつゝありしが、同年末に至り歸朝の命に接し明治十八年一月十四日長崎に歸著せり。

附けて記す。雞籠を占領したる後の佛國艦隊は、同港を根據として臺灣の海岸を封鎖し、翌年二月此處を出で、清國の東南岸を巡航しつゝ同國艦隊を追蹤し、遂に馭遠、澄慶の二艦を擊沈し、三月二十八日を以て澎湖島に進み、其の砲臺を攻擊して之を占領し、四月十五



日を以て休戰の告示を爲せしが、六月九日に至り兩國遂に和を講ずるに至れり。

## 第五章　布哇廻航

海軍中佐—大和艦長—海軍大佐—沈滯時期—國際法研究—吳鎭守府參謀—浪速艦長—浪速
布哇廻航—布哇政變—禮砲問題—囚人投艦—浪速歸朝—浪速再度布哇廻航—浪速品川歸著

明治十八年一月南清より歸朝せる東鄕少佐は同年六月二十日海軍中佐に任ぜられ、同二十二日天城艦長より主船局出勤に轉職し、七月七日に至り更に神戸小野濱在勤となり、新造軍艦（艦質鐵骨木皮、長二〇六九噸、幅三六呎、馬力一六二二、排水量噸數一四七六。）の工事を督し、同十九年五月其の竣工して大和と命名せらるゝや、同月十日同艦々長に補せられ、七月十三日には武官々等の改正に據りて大佐となれり。（中佐は、大佐奏任二等と定められたるものなり。而して其の奏任一等となりたるは、二十一年十月十八日なり。）是より二十三年に至るまで、或は淺間（艦質木製、長二一九呎、幅三十二呎、馬力三〇〇、排水量噸數一四二二なり。）艦長兼横須賀鎭守府兵器部長となり、或は比叡艦長となりしが、而も此の數年間は元帥の一生中最も沈滯せるの時にして屢病魔の爲に惱まされ、轉地療養等をなせること一再に止まらざりき。之を其の官歷より摘記すれば左の如し。

明治二十年一月七日　往返を除き三週間熱海へ入浴願（同月二十六日出發）
二月十三日　猶ほ三週間滯浴追願（二月廿四日出勤）
七月六日　病氣引入
同　八日　往返十二日を除き三週間鹽原溫泉へ入浴願（同二十五日出發八月二十四日出勤）
同二十一年二月廿七日　病氣に付二週間引入（三月十日出勤）
十月廿八日　氣管支加多兒症に因り二週間引入
同　三十日　往返四日を除き三週間湯ヶ原に入浴願（十一月九日出發十二月三日出勤）
同二十年六月十二日　紛瘤摘出後創傷にて一週間引入
十一月十八日　往返四日を除き三週間湯ヶ原に入浴願（十一月二十四日出發十二月十七日出勤）

何人も其の生涯には、他動的若くは自動的に沈滯の期あるを免かれざるが、特に偉人に於て其の然るを見る。惟ふにこれ、此の時機に於て浩氣を含蓄せしめ、他日の大發揚に資せしめんとするの天意にあらざるなきか。況してや失意若くは疾病は、往々にして人格陶冶の



機會たることあるに於てをや。されば東郷大佐に取りても、前記の沈滯は沈滯にあらずして精神修養の機會となり、同時に外交に關する知識の研究も此の間に積まれ、後年演ぜられたる高陞號擊沈の如き大活劇も、其の推理的決意の源泉此の際に養はれたるを思へば、洵に云ふ可からざるの妙味を喚起するにあらずや。

一附けて記す。東郷元帥は壯年時代より常に國際法の研究に意を用ゐ、後には外交時報東邦協會雜誌の類までも反覆熟讀し、屢〻青年將校に向ひ、『貴君等艦長となりし際に、最も研究を要するは外交なり、艦長は屢〻外交上自分一個の意思に依り決せねばならぬ場合に遭遇するものなり。從つて平素之を研究し居らざれば、事に臨んで思はぬ手違ひを生じ、累を國家に及ぼすべし。艦長として戰術及び艦の操縱等が必要なるは勿論なれども、是等は專門の事なれば、研究も熟練も比較的容易なるが、外交に至つては特に心掛けざる可からず。而して外交上には往々他の氣付かざる微細の裏に重大なる關係を生ずべき動機の伏在することのあるものなれば、之を看破して判斷を誤らざるやうなすべし。これ艦長の職責上最も大切なることなり。』と懇諭せり。

既にして二十三年の始より健康舊に復し、同年五月十三日には吳鎭守府參謀長に補せられ、同鎭守府司令長官海軍中將子爵中牟田倉之助を補佐して、溫厚篤實の名を博しぬ。（吳鎭

守府は佐世保鎭守府と共に、明治二十二年七月一日開廳せられたり。）此の時に當り、清國政府は鋭意海軍の擴張を圖り、今や優勢なる北洋艦隊を建設し得たるを以て、其の威力を示す爲めにや北洋海軍提督丁汝昌は、數隻の堅艦を率ゐて二十四年の七月横濱に來り、同月十一日我が朝野の貴紳、兩院議員、新聞記者等を旗艦定遠に請待し、盛宴を張りて款待を極めたり。而も彼が握手談笑の裏に包める得意の色は、痛く我が國民の神經を刺戟したると共に、三十珊半の巨砲を載せ、七千五百の排水量噸數を有する定遠、鎭遠の名は、天魔破旬の如く轟き、巍然として沖に泛べる其の雄姿を望見して、嘆聲を漏せる憂國の士も尠からざりき。恁くて丁提督は猶ほ他の諸港を巡廻し、遂に安藝の宮島に碇泊し、此處にても中牟田吳鎭守府司令長官、東郷參謀長等陸海軍の將校其の他の紳士を請待し、亦もや定遠鎭遠の雄大を示し、觀者の膽を寒からしめぬ。されど東郷參謀長は、熱心に兵器其の他を觀察せるのみにて、讃否に關しては一言をも發せず、默々として歸府せしが數日の後清國艦隊中の一艦、修理の爲め吳軍港內に入るに及び、微行して仔細に同艦の周圍を視、爾來清國艦隊の恐るゝに足らざるを主張して曰く、清國艦隊は燒身の名刀の如きのみと。

附けて記す。東郷元帥當時の感想を編者に語りて曰く、『たしか平遠なりしかと覺ゆ修理の爲入港せし故、海岸に到り見物せしに、一砲門よりは、洗濯物下り、且不潔不整頓を極め居れり。神聖に保つべき砲門に對し、恁かる不作法を而も外國にありて敢てするを憚からずとせば、彼等が覺悟の程も推し量られ、如何に堅艦巨砲を有すればとて、いかで其の威力を十分に發揮し得べき、縱し其の中に二三の名將ありとも、精神振はざるの兵員を使ふにては、勝を得ること難かるべしと思考したり。』



恁くて東郷大佐は、吳鎭守府參謀長の職にあること一年半に及び、健康愈良好に赴きしが翌二十四年十二月十四日常備艦隊中なる浪速（英國にて製造せられたるものにして、艦質鋼、長三〇〇呎、幅四六呎、馬力七六〇四、排水量噸數三七〇九ないし。）艦長に轉補せられ更に海上生活を爲すに至りぬ。（從來何某艦と稱せしを、此頃より軍艦何某と稱するに改まりたり。）

附けて記す。東郷大佐は是より先き明治十八年二月二十八日に長男彪を、同二十三年九月十日に二男實を設けしが、今年十月十日三女（長女二女共に夭せり）八千代を擧げたり。

尋いで二十五年には、或は隣邦諸港を巡航し、或は那覇港倭口水道を測量し、海圖に記載なき暗礁を測知し、同年十月十日よりは、四隻の僚艦と共に品川を發して荻の濱、室蘭、青森、函館舞鶴、瀨戸崎、佐世保、博多、長崎の各港灣を歷航して十一月十五日品川に歸著し、二十六年二月三日には難破船救助の爲め横須賀を發して豆南諸島に向ひ、更に紀州勝浦に至りて漂流人を上陸せしめ横須賀に歸著せしが、居ること數日にして遽に帝國居留民保護の爲め布哇國

に廻航を命ぜられ、同月八日横須賀軍港を拔錨して布哇の首府たるホノルヽ港に向ひ急航せり。これ同國に一大政變起り、而して群島には二萬二千人の帝國居留民散在せるを以てなり。

抑ミ布哇國と呼ばるゝは、北太平洋の中央に位し、大小八個の住人島（布哇島、オアフ島、加哇島、馬哇島、モロカイ島、ラナイ島、ニイハウ島、カホオラウエ島）と、數個の無人島より成れる群島の總稱にして、總面積我が四國島より稍小なり。其の土人は南洋諸島と同じくポリネシア人種に屬す。而して同群島は一面中央亞米利加、メキシコ、カリフオルニア及びカナダを控へ、一面は我が帝國、支那、比律賓群島及び濠洲と相對峙し、軍略上竝に商略上共に樞要の位置を占め、實に北太平洋の鎖鑰たり。

附けて記す。明治二十六年より六百三十年前、即ち英國海軍大佐ゼームスクツクの布哇發見に先だつこと五百年の昔、群島の一なる馬哇島に一外船漂著せしが、其の乘組は皮膚甚しく黑からぬ外人にして、土人と婚して子孫繁殖し、遂に布哇に於ける色黑からぬ一種族を成せりと傳へらる。此の漂著船乘組は日本人なりしとの說あり。黑潮の關係、且は明治以前に於て同群島に漂著したる日本船十數回に及びたるより察すれば、此の說必ずしも無稽ならざるべきなり。



初め群雄八島に割據し、相抗爭して下らざりしがカメハメハなる者布哇島に起り、常勝の威を逞うし、西曆千八百十年（文化七年）遂に群島全部を征服して王位に登り、オアフ島ホノルルを其の首府と定めたり。それより王統連綿として八十餘年を過ぎ、第八世リリオカラニ女王の代となりしが、西曆千八百九十二年（明治二十五年）同女王は內外の形勢を察せずして從來布かれたる憲法に大改正を加へんとしたる爲め、端なくも參政權を有する歐米の移住者より猛烈なる反抗を受け、一轉して市民市會となり、再轉して保安會の設立となり、終に王政を廢し假共和政府を建設するの議決せられて、其の委員亦選出せらるゝに至りぬ。されど土人中には忠義を思ふ王黨ありて憤慨に耐へず、蹶起して權力の回復を計りしも、兵力なき悲しさは、米國軍艦ボストン號より上陸したる百六十名の兵員に威壓せられて忽に雌伏し、あはれカメハメハ王より八代續ける王室も、『米國公使ジョル、エル、スチーブン氏は米國の水兵をホノルヽに上陸せしめ且之に依りて假政府を保護す可しと宣言せるが、朕は此の兵力に對抗する能はざるの故を以て玆に服從す』との最後の布告文を以て終結を告げ、群島全く假共和政府の手に渡りぬ。時に西曆千八百九十三年（明治二十六年）一月十七日なり

越えて二月廿三日ホノルヽ港の埠頭には、燦たる旭日旗潮風に翻りて堂々たる軍艦浪速の雄姿現れたり。帝國居留民の歡喜は言ふもさらなり。土人の考若男女迄も海岸に群集

して、恰も期待する所あるものゝ如く、喃々喋々として何事か頻りに語り合ひぬ。時に港内には我が練習艦金剛（一月二十八日米國サンフランシスコより入港）在泊し、又米國艦隊司令長官スカーレツト少將ボストン號に坐乘し、別にモヒカン、アリアンスの二隻を率ゐて雄威を示し、英國軍艦ガーネツト號亦入港し居れり。

附けて記す。ホノルゝは群島の首府たるのみならず、第一の開港場にしてオアフ島の南端に位し、我が横濱との距離三千四百四十海里なり。港は珊瑚礁の中間を開き築港したるものにして、頗る狹隘なれども、街衢は整然として或は歐洲風の家屋兩側に櫛比し、或は熱帶產の樹木高樓大厦を掩包して、綠苑蒼庭の間に之を點綴する等、風光賞するに足るものあり。當時の人口は二萬餘にして、米人最も多く葡人清人之に次げり。

浪速既に繫泊し了るや、東郷艦長は金剛艦長海軍大佐田代郁彥及び我が領事館員の來訪に接したるを以て、先づ政變の經過並に現下の狀況大要を訊き、尋いでヌアノ街なる領事館に總領事藤井三郎を訪うて詳細を知悉し得たるを以て、乃ち歸艦して之を乘組將校等に傳へ更に容を正して曰く、

『改めて申さずとも、諸君は既に十分の心得あるべしと雖も、本艦が當港に碇泊するは、皇國領土の一部が此處に延長したると意義相同じきものあり。此觀念よりして我等の責



任一層重大となるを覺ゆるなり。されば今後變亂生ずると否とに拘らず、我等の一擧一動は直ちに皇國の品性に影響を及ぼすべきを思ひ、輕擧妄動を愼むと同時に、いよ〳〵決行するに當つては些の躊躇なく、斷乎として進むべきに進み、以て帝國武人の本領を發揮せんことを切望す。』

それより猶ほ事變に際し、取るべき方針及び居留民保護に關する配置、準備覺悟等細大漏さず之を示し、乘員をして其の迅速機敏なるに一驚を吃せしめぬ。

此の日の黃昏時、紺の背廣服に麥藁帽を戴ける矮軀清楚の一日本紳士、埠頭の方より靜に歩をキング街に運ぶあり。今し革命黨によりて占領せられをる舊王宮の畔に出しが、昔の面影を留めて多感の遊子を泣かしめつゝある高樓を仰ぎ、更に其の周圍を往來する土人等を凝視して、轉た感慨に堪へざるものゝ如く、去りも得やらず暫時佇み居たりと云ふ。

尋いで三月一日東郷浪速艦長は軍艦金剛をして狀況視察の爲帝國居留民の散在する布哇島へ廻航せしめ、同艦は同月八日に至りホノルゝに歸著せしが、今や萬一の事變に備ふるには浪速一隻にて事足るべきを以て、金剛は同月十六日本邦に向ひホノルゝを出港せり。

是より先き一月十七日假共和政府の建設せらるゝや、二月一日より米國政府の保護を受くるとの故を以て、政廳の屋上には米國々旗翻へり、同國公使館、領事館及び政廳は、米國兵員に

依りて護衛せられぬ。而して假政府の大統領に對する禮砲は、金剛到著當時よりの問題なりしが、東郷浪速艦長は大に金剛艦長の否定說を讚し、固く其の所信を持して禮砲を行ふを肯んぜざりき。會々大統領ドール米艦訪問の事あり。數隻の米艦より打ち放す二十一發の禮砲は、四邊に轟き頗る壯觀を呈し、大統領の得意さこそと思ひ遣られしが、我が浪速は僅に數名の衛兵を甲板に整列せしめたるのみにて、艦内は常にも增して靜まり返り、後部艦橋には眼光炯々たる艦長が双眼鏡を手にしつゝ冷然として立ち、其の附近を行進する假政府の小蒸汽を瞰下し居たりき。

是より更に數日を經て三月十六日となりしが、其の日の早朝、埠頭附近邊にもの騷がしく人々の罵り叫喚くなかを、ヌアノ街の方より一人の我が青年、布哇政府の捕吏に追蹤せられつゝ海岸に逃れ來り、あはやと見る間に忽海に跳り入りしが、拔手を切つて浪速へと泳ぎ著きぬ、番兵直ちに之を捕へ、當直將校と衛兵司令とに報告せしかば、衛兵司令は彼を取調べしに、今田與作と云へるものにして布哇政府より犯罪者と認められ獄に投ぜられしが、隙に乘じて脫れ出で、警吏の追蹤を遁れて投艦したる事を知り得たり。是に於て衛兵司令は其の顚末を東郷艦長に具申せしに艦長は『然か』と答へて暫時默考の末、『其の儘留め置くべし』と命令せり。程なく布哇政府の捕吏等端艇に乘じて來艦し、『脫獄人の貴艦に投じた



るを見屆けたれば引渡されたし』と、談判頗る嚴重なりき。されど艦長は斷乎として、『予が邦人を犯罪人として貴下等に引渡すこと能はず』と答へ、其の請求を謝絕せり。捕吏等は已を得ず其の日は立ち歸りしが、翌日更に交涉し來れり。艦長は復之を退けぬ。二回、三回、數回の嚴談に目的を達し得ざりし假政府の吏員頗る激昂し、爲めに不穩の風說すら傳へられ、ホノルヽ發行の某歐字新聞の如きは激烈なる論法を用ゐ、浪速艦長にして猶ほ此の上にも犯罪人の引渡しを拒まば某國艦隊司令長官に依賴し兵員を浪速にさし向け、兵力に訴へて取戻すに至るやも知れずとの意味を以て威嚇的文字を連ねたり。浪速の艦長室に安樂椅子に倚りつゝ、此の新聞を手にせる東郷艦長は、人知れぬ微笑を漏せるのみにて、牛角を蚊の刺した程にも感じざりければ、彼の當局者は到底威壓の功を奏し難きを覺りしものか俄に態度を一變し、副統領親く浪速を訪問して東郷艦長に面會し、不穩の文字を揭げたる新聞の記事は、假政府の全然關り知らざる所なれば、誤解なからんことを切望する旨、竝に該新聞社に對しては、十分誡飭を加へ置けることを陳べて慇懃に挨拶せり。艦長は之に對して『御念の入りたる儀なり』と答へしも、依然として犯人の引渡を拒みぬ。尋いで藤井總領事よりも引渡す方然るべき旨を勸誘し來れり。されど艦長は之にも應ぜず、種々の風說のみ愈々高くなりゆけり。而して總領事は、東郷艦長の犯人留置に關する英文の返書を添へ

て、布哇政府に答辯するの必要ありとなし、之を請求し來れり。東郷艦長は返書の交付を承諾せしも、堂々日本文を以て之を記し、附言して曰く、『英文にするの必要あらば貴下に於て隨意譯さるべし、余の與り知る所にあらず。』と。

軈て幾日を經過せしに、或方面より一封の内訓到着せり。之を開き見たる東郷艦長の面上には、忽ち緊張の色漂ひしが、さしも頑強なる艦長も、今は犯人を退艦せしめざる可からざる場合となりぬ。尋いで我が領事館員は、之を引取らんとして來艦せり。艦長は容を正して館員に向ひ、『予は軍人の本分として、今は内訓に服從するの外なし。さりながら、彼犯人も予等と同じく日本臣民の一人ならずや、其の同胞が救助を求め來りしを、おめ〳〵引渡すは返すがへすも心外なり。定めし陸上には假政府の獄吏等が雙手を擴げて待ち居るなるべし、予は彼を彼等に引渡すにあらず、貴下等に渡すものなり。請ふ東郷の眼の屆かざる場所に於て、貴下等の爲さんと欲する所を爲せ。』と。館員等唯々として退き、此の事件辛うじて落着せり。

恁くて四月一日となるや、假政府の外務卿は、同日より米國政府の保護を謝したる旨を聲言し、政廳の屋上に揭揚せる米國國旗を撤して布哇國旗に換へ、上陸せる米國水兵も、同國公使館の分のみを殘して餘は皆其の本艦に歸り、群島右も左も平穩の狀を呈せり。是に於て



幾もなく浪速亦歸朝を命ぜられ、五月中旬ホノルヽを拔錨し、同月二十九日品川に歸着せり。

八月三日に至り浪速は、當時露領及び北海道沿岸巡航の途にある、常備艦隊の跡を追うて横須賀を出發せしが、同月二十五日浦鹽斯德港口に於て之と合したるを以て、相共に同港に泊する事五日に及べり。夫れより順次北海道等の沿岸を巡航し、十一月十一日品川に戻りしに、復もや布哇回航の命を受けぬ。是に於て直ちに其の準備に著手し、品川碇泊三日にして同月十四日遠航の途に就き、十二月二日無事ホノルヽに入港し、東郷艦長は再度爛々たる眼に群島の天地を睥睨せり。

此の時に當り布哇國の政權は、依然として假政府の手に握られ、王黨の首領等は尙ほ沈默を守り只管機會の到來をのみ待ち居るものゝ如し。而して港内には米國艦際司令長官アヤビン少將、ヒラデルヒア號に坐乘し、アダム號を率ゐて星條旗の雄威を示し、英艦シヤンビヲン號亦碇泊し居れり。尋いで同月下旬となるや風説あり曰く、『某國公使は布哇政府に或る要求條件を提出し、場合に依りては兵員を上陸せしむべし。』と。是に於て物情恟々形勢稍々險惡なるに至りしかば、東郷艦長乃ち諸將校を集めて更に決意を示し、萬一に處するの方法を定めて遺算なからんことを期せり。されど事なくして歲暮に改まり、軍艦浪速は暑氣酷き新年を迎へしが、一月十七日は布哇假政府建設一週年に當るを以て、同政府の外務

大臣は在港の各國軍艦に向ひ、『滿艦飾をなし、正午禮砲を放ちて祝意を表せられたし。』と依頼せり。此の交渉に接せる東郷浪速艦長は、斷乎として之に應じ難き旨を回答すると共に、其の主旨を英、米、兩國軍艦にも通知せり。

幾もなくして十七日は來りぬ。陸上にては假政府の手に依りて、祝意を表する種々の裝飾施され、土人中にも之に和して祝聲を擧ぐる輩も尠からざりしが、それに引き換へ港内は寂として、我が浪速を始め英、米の各艦も、滿艦飾は勿論一發の禮砲をも放つものなく、沈默の裏に此の記念日は暮れゆきぬ。

既にして東郷浪速艦長は、藤井總領事よりの協議に基き、二月十一日ホノルルを拔錨して布哇、加哇、馬哇の諸島の狀況を視察し、同月二十二日ホノルルに歸着せしが、越えて三月二十一日に至り、浪速の姉妹艦たる高千穗（勢力全く浪速に同じ）交代として本邦より來り、二艦相竝びて棧橋近くに繫泊せり。

高千穗艦長は、『死方』號令を以て有名なる海軍大佐野村貞なり。彼曾て清輝艦長たりし時、洋上にて颶風に遭ひ、漂ふこと一晝夜に及び、兵士困憊して艦危險に瀕す。彼乃ち艦橋より大喝して曰く、『總員死方用意』と、此の一言に士氣頓に振ひ、遂に暴風を凌ぎて無事なるを得たり。彼は東郷浪速艦長より長ずること二歲、意氣投合の親友なるを以て、高千穗著



布以來、絶えず相往復して意見を闘はし、相携へて領事館を訪ひ、談論數刻に亘ることも珍からざりき。

附けて記す。野村大佐は、戊辰の役に勝誇りたる官軍を馬蹄の塵に弄びし、北越の俊傑河井繼之助の從弟にして、當時野砲半隊長に擧げられ榎峠、今町等に健闘し、右脚に銃創を受けたるも更に屈せず益〻惡戰を續けて夙に聽名を得たり。これ恰も東郷大佐が、春日艦乘組にて新潟方面に出沒したる時にして、互に敵とはなりたれども、兩者の間既に一種の因緣を有せるにあらずや。加之兩者共に箕作塾に學び、又明治三年には同時に龍驤艦乘組となれり。爾來相雁行して累進し、今や又共に浪速、高千穗姉妹艦の艦長として、布哇警備の任に當ることゝなりぬ。編者當時高千穗乘組の一員たりしを以て、時に野村艦長に隨行して領事館に至り、兩艦長の會談をも屢〻傍聽するを得たり。身長五尺八寸、容貌魁偉、風骨堂々、飽まで東洋式豪傑振を發揮せる野村艦長が、越後訛の蠻聲に縱横快談し、興至る毎に膝を叩いて無遠慮の哄笑四隣を驚かすに對し、痩面黑髭五尺三寸の矮軀ながら滿身これ膽かと許り、泰然たる東郷艦長の應答は、低けれども力ある薩音にて、一言一句苟もせざる其の對照や極めて奇觀なるも禪機時に應じて逆發し、敵手の急所を衝くの妙趣に至りては、兩者の等しく心解する所にして、一正一奇端倪すべからざるものあるは、卽ち

之が爲なるべし。

恁くて浪速は新來の高千穗に事務引繼を了し、四月二日に思ひ出多き、ホノルヽを拔錨し同月十五日に品川に歸著せり。

布哇に旅行する人あらば、土人の故老に就いて當年の東鄕浪速艦長の爲人を訊ひ試みよ彼等は躊躇なく、『英雄』の二字を以て答ふべきなり。嗚呼本邦に於ては、未だ其の眞價を知る人稀なりし明治二十七八年戰役以前に、早く既に數多の崇拜者を海島の異人種中に得たるは洵に一奇と謂ふべきなり。

附けて記す。野村高千穗艦長は東鄕浪速艦長の取れる方針を踏襲し、益〻帝國武人の面目を發揚すると同時に、感ずる所ありて、最も不得意なる外人との交際を勵行し、巨額の私財を擲ちて盛大なる夜會を艦内に催し、幾百人の紳士貴婦人を招待したる事も數次なりき。又一夜相識の米人某老孃よりハワイヤンホテルに招かれ、十數名の將校（編者亦其の中にありき）と共に其の晩餐會に臨みしことあり。列席の外國士女宴後別室に移り、思ひ〳〵に談話の花を咲かせて興愈〻加はりぬ。時に艦長は主人役なる老孃に向ひて曰く、『僕猶ほ飲酒を欲す、幸に之を許せ。』と。老孃莞爾として『御隨意に』と答へ、給仕をして酒を持ち來らしめぬ、艦長『多謝々々』と言ひつゝ、手酌にて注いでは飲み瞬時にして



十數杯を重ね、『愉快』と叫びて身を起すよと見る間に、靴を脫ぎ、上衣を脫ぎ、穿袴を脫ぎヤツト叫ぶや前面の壁に向つて逆立をなし、禿頭を振りブウ〳〵と奇聲を放ちて曰く、『印幡沼の鰻が穴入りの一曲』と。一座呆然として驚愕の眼を瞠るうちに彼は忽ち衣服を著け了り、儀容整然慇懃に別を告げて悠々退席せり。是より勇猛艦長の名外人の間に嘖〻たりき。其の豪快概ねこの類なり。

恁くて六月十六日に至り、高千穗は直ちに歸朝すべきの電命に接したるを以て同十九日ホノルヽを出港し、七月十日横須賀に歸著せり。

又布哇の政權は、西曆千八百九十五年（明治二十八年）まで、依然として假共和政府の掌握する所たりしが、決死の王黨三百人、同年一月十七日を以て不意に起り假政府を轉覆せんと企てしたが、其の事假政府の爲め探知せられ、王黨の檢擧開始するに至りたるを以て、同黨は一月六日の夜半遽に兵を擧げ、假政府の軍隊と數日間銃火を交へしが、王黨利あらずして全軍潰散し、尋いで千八自九十八年（明治三十一年）八月十二日、米國政府は遂に布哇群島全部を併合するに至れり。

# 第三篇　明治二十七八年戰役時代

## 第一章　豐島海戰

浪速運送船護送―聯合艦隊佐世保出港―開戰―高陸號擊沈

智將にあらず。勇將にあらず。將に將たるの大器を具へて一見茫漠たる東鄕元帥が、初めて金龍の片鱗を示したるは實に明治二十七八年の戰役なりき。

是より先き、朝鮮國に東學黨と稱する暴民蜂起し、明治二十七年に及びて其の勢猖獗を極めしが、朝鮮政府之を鎭壓するの力なく、終に同年六月三日を以て援を清國政府に請ふに至れり。是に於て清國政府は機乘ずべしとなして直ちに此の請を容れ、六日を以て先づ三營の兵を送遣し、此の旨を我政府に通告し來れり。然るに其の文中に朝鮮國を屬邦と公言し大に我帝國の威嚴を犯す所あるを以て、我は卽日之に對し、帝國政府は朝鮮國を以て清國の附庸と認めざる旨を答ふると同時に、我も亦朝鮮國に派兵すべきことを通告せり。

恁くして我軍隊の渡韓開始せられ、軍艦浪速は第三回の運送船を仁川に護送すべきの命

を受けぬ。

初め浪速の布哇より横須賀に歸著するや、修理を要するの關係より、一旦非役艦となりしが、六月中旬に至り警備艦と定まり、同十八日には常備艦隊に編入せられぬ。而して前記運送船護送の命令も、此の間に受領したるを以て、東郷艦長は直ちに門司港に廻航し、同二十五日運送船和歌浦丸、熊本丸、三河丸、仙臺丸、兵庫丸、越後丸、酒田丸、住の江丸の八隻を護衛して同港を發し、二十七日を以て仁川に入り、直ちに陸兵の上陸に著手し、二日間にして略之を了りたるを以て、同二十九日浪速は本邦に歸航せんが爲め仁川を出港せしが、偶々港外に於て黄龍旗を揭げたる巨艦二隻の前方より進行し來るに會せり。前艦橋にある東郷艦長雙眼鏡を取りて之を凝視し、其の北洋海軍總兵(總兵は我が少將に相當す)林泰曾の乘艦たる鎭遠、及び平遠なるを確め得たり。乃ち萬一の變に備へんが爲め、兵員中の一部を特別の部署に就け而して各々其の附近の舷側に伏せしめ、前甲板には常の如く衞兵を立附け、將官禮式の喇叭を吹奏して悠然彼と行き過ぎぬ。鎭遠の艦橋には肥大の林總兵屹然として立ち、彼も同じく備砲に兵士を配備せり。

かくして彼我兩將の胸裏には、早く既に無形の刃を交へたりき。林總兵其の復命書中に當時の感想を述べて曰く、『鎭遠に駕し平遠を率ゐて牙山より仁川に赴くの途上、日本軍艦



浪速に逢ふ。我に對する賓禮尙ほ常のごとくなるも、竊に砲側に兵員を配し、而して從容たる態度、我をして憤激に堪へざらしむ』と。

附けて記す。林總兵は識見高邁、態度堂々として岳飛の風ありと稱せられ、提督丁汝昌の最も信賴する雄將なり。日清兩國の交涉漸次難局に赴くや、彼は鎭遠、超勇、廣丙の三艦を率ゐて六月二十日威海衞を發し朝鮮に到り、牙山、仁川間を往來して形勢を察し、開戰の到底免るべからざるを覺るや、北洋大臣直隸總督李鴻章に打電して、機を誤らざらん事を建議せり。然るに李鴻章は尙ほ外交に依りて日本を屈服せしむべしと爲したるものゝ如く、林總兵の建議を用ゐざるのみならず、遽に戰を言ふは反つて怯懦なりと叱責せり。總兵慨然其の復命書に述懷して曰く、『泰曾は一介の武夫、才拙に識淺し、只知つて言はざるなきのみ。既に傳相の成策あるを聞く、何ぞ敢て復戰等のことを言はん、惟傳相の命を待んのみ』と。

日、清、韓三國の形勢は益々切迫し來れり。我政府は清國政府に向ひ、戮力して朝鮮國の內政を改善せんことを提議せるも、彼は漫然之を斥けたるを以て、我は單獨進みて韓廷に改革を勸告し、清國政府は極力之を障げんとしたれども、終に果さずして韓廷漸く我眞情を知り其の好意に依賴せんとするに至れり。

當時我が派遣軍は京城に駐屯せしが、清軍は牙山方面に盤踞し、猶ほ大兵を續發せんとするの狀あり、而して北洋艦隊の主力は、七月初旬威海衛港に集合し、一大艦隊を組織して韓海を征せんとするの威を示し、我が有力なる諸艦も之と前後して概ね佐世保軍港に集り、晝夜操練を勵み準備を整へ、以て後命の下るを待てり。茲に彼我海軍の全勢力を對比すれば、帝國は軍艦二十八隻、水雷艇二十四隻、其の總排水量噸數五萬九千〇六十八なり、清國海軍は北洋、南洋、福建、廣東の四艦隊を有し、合計六十三隻の軍艦と二十四隻の水雷艇とありて、其の總排水量噸數は八萬四千餘に上り居るも、專ら我に當らんとするは、北洋艦隊及び廣東水師中の三隻にして、其の軍艦二十五隻、水雷艇十三隻、總排水量噸數五萬餘にして殆ど我と伯仲の間に在り。即ち別表の如し。

## 帝國軍艦表

| 艦名 | 艦種 | 艦材 | 排水量噸數 | 速力 |
|---|---|---|---|---|
| 扶桑 | 二等戰艦 | 鐵 | 三、七七七 | 一三 |
| 嚴島 | | 鋼 | 四、二七八 | 一六 |
| 松島 | 二等 | 鋼 | 四、二七八 | 一六 |



| 艦名 | 艦種 | 艦材 | 排水量噸數 | 速力 |
|---|---|---|---|---|
| 橋立 | 吉野 | 鋼 | 四、二七八 | 一六 |
| 吉野 | 浪速 | 鋼 | 四、二二五 | 二二/二 |
| 浪速 | 巡洋艦 | 鋼 | 三、七〇九 | 一八 |
| 高千穗 | | 鋼 | 三、七〇九 | 一八 |
| 秋津洲 | 三等 | 鋼 | 三、一七二 | 一九 |
| 千代田 | 巡洋艦 | 鋼 | 二、四三九 | 一九 |
| 比叡 | | 鐵骨木皮 | 二、二八四 | 一三/五 |
| 金剛 | | 鐵骨木皮 | 二、二八四 | 一三/五 |
| 筑波 | 三等 | 木 | 一、九七八 | 八 |
| 天龍 | | 木 | 一、五四七 | 一二 |
| 葛城 | | 鐵骨木皮 | 一、五〇二 | 一三 |
| 大和 | | 鐵骨木皮 | 一、五〇二 | 一三 |
| 武藏 | 海防艦 | 鐵骨木皮 | 一、五〇二 | 一三 |
| 高雄 | | 鐵骨鋼皮 | 一、七七八 | 一五 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 海門 | 筑紫 | 天城 | 磐城 | 大島 | 摩耶 | 烏海 | 愛宕 | 赤城 | 鳳翔 | 八重山 | |
| | 一等砲艦 | 二等砲艦 | | | | | | | | 通報艦 | |
| 木 | 鋼 | 木 | 木 | 鋼 | 鐵 | 鐵 | 鋼鐵骨皮 | 鋼 | 木 | 鋼 | |
| 一、三六七 | 一、三七二 | 九二六 | 六六七 | 六四〇 | 六二二 | 六二二 | 六二二 | 六二二 | 三二一 | 一、六〇九 | |
| 一二 | 一六 | 一一 | 一〇 | 一三 | 一〇/一四 | 一〇/一四 | 一〇/一四 | 一〇/一四 | 七/一四 | 二〇 | |



## 帝國水雷艇表

| 艇名 | 排水量 | 噸數 | 速力 |
|---|---|---|---|
| 小鷹 | | 二〇三 | 一九 |
| 第一號 | | 四〇 | 一七 |
| 第二號 | | 四〇 | 一七 |
| 第三號 | | 四〇 | 一七 |
| 第四號 | | 四〇 | 一七 |
| 第五號 | | 五四 | 二〇 |
| 第六號 | | 五四 | 二〇 |
| 第七號 | | 五四 | 二〇 |
| 第八號 | | 五四 | 二〇 |
| 第九號 | | 五四 | 二〇 |
| 第十號 | | 五四 | 二〇 |

| 備考 | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 以上の外第二十四號及二十五號の兩艇あるも當時猶ほ竣工に至らざりしを以て之を省く | 第二十三號 | 第二十二號 | 第二十一號 | 第二十號 | 第十九號 | 第十八號 | 第十七號 | 第十六號 | 第十五號 | 第十四號 | 第十三號 | 第十二號 | 第十一號 |
| | 八五 | 八五 | 八〇 | 五三 | 五四 | 五四 | 五四 | 五四 | 五三 | 五四 | 五四 | 五四 | 五四 |
| | 二〇 | 一九 | 二一 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 | 二〇 |



## 清國軍艦表 北洋海軍の部

| 艦名 | 艦種 | 艦材 | 排水量噸數 | 速力 |
|---|---|---|---|---|
| 定遠 | 甲裝 | 鋼 | 七、三一四 | 一四 一/二 |
| 鎮遠 | 甲裝 | 鋼 | 七、三一〇 | 一四 一/二 |
| 來遠 | 砲塔艦 | 鋼 | 二、九〇〇 | 一五 一/二 |
| 經遠 | 砲塔艦 | 鋼 | 二、九〇〇 | 一五 一/二 |
| 靖遠 | 巡洋艦 | 鋼 | 二、三〇〇 | 一八 |
| 致遠 | 巡洋艦 | 鋼 | 二、三〇〇 | 一八 |
| 濟遠 | 巡洋艦 | 鋼 | 二、三〇〇 | 一五 |
| 揚威 | 巡洋艦 | 鋼 | 一、三五〇 | 一五 |
| 超勇 | 巡洋艦 | 鋼 | 一、三五〇 | 一五 |
| 平遠 | 裝甲砲艦 | 鋼 | 二、一〇〇 | 一一 |
| 威遠 | | 木鐵骨皮 | 一、三〇〇 | 一二 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 廣乙 | 巡洋艦 | 木鐵骨皮 | 一、〇〇〇 | 四四〇 | 一七 |
| 廣甲 | 巡洋艦 | 木鐵骨皮 | 一、二九六 | 四四〇 | 一四、七 |
| 外に廣東水師より左の三隻を加ふ | | | | | |
| 鎭中 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 鎭邊 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 鎭西 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 鎭東 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 鎭北 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 鎭南 | 砲艦 | 鋼 | | 四四〇 | 八 |
| 泰安 | 砲艦 | 木 | | 一、二五八 | 一〇 |
| 操江 | 砲艦 | 木 | | 九五〇 | 九 |
| 湄雲 | 砲艦 | 木 | | 五七八 | 八 |
| 鎭海 | 砲艦 | 木 | | 九五〇 | 九 |
| 康濟 | 砲艦 | 木鐵骨皮 | | 一、三〇〇 | 九 |



## 清國水雷艇表

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 廣丙 | | 木鐵骨皮 | 一、〇〇〇 | | 一七 |
| 所屬 | 北洋水師 | 艇名 | 排水量噸數 | 速力 | |
| | 左隊第一號 | | 一〇八 | 二四 | |
| | 左隊第二號 | 不明 | | 一八 | |
| | 左隊第三號 | 不明 | | 一九 | |
| | 右隊第一號 | 不明 | | 一八 | |
| | 右隊第二號 | 不明 | | 一八 | |
| | 右隊第三號 | 不明 | | 一八 | |
| | 定遠附屬第一號 | 不明 | | 一五 | |
| | 定遠附屬第二號 | 不明 | | 一五 | |
| | 鎭遠附屬第一號 | 不明 | | 一五 | |
| | 鎭遠附屬第二號 | 不明 | | 一五 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 中 | 號 | 不 | 明 | 一五 |
| 捍 | 雷 | 不 | 明 | 六 |
| 福 | 龍 | | | 一一五 |

外に福建水師より左の一隻を加ふ

既にして七月十九日に至り、我は常備、西海の二艦隊を以て聯合艦隊を組織し、其の司令長官は、現に常備艦隊司令長官たる海軍中將伊東祐亨之を兼攝すべきの命を受けぬ。尋いで七月二十二日、海軍軍令部長海軍中將子爵樺山資紀東京より佐世保に著し司令長官に訓示する所ありしが、翌二十三日を以て聯合艦隊は盡く佐世保を拔錨して朝鮮海に向ふことに決せり。發するに先だち伊東聯合海隊司令長官は、十六隻の軍艦六隻の水雷艇を、本隊、第一游擊隊（以上常備艦隊）、第二游擊隊（西海艦隊）、水雷艇隊等に區分せり。而して浪速は吉野、秋津洲の二艦と共に、第一游擊隊に編入せられぬ。

『豫定順序に從ひ出港せよ』。これ伊東聯合艦隊司令長官が、佐世保港内に於て爲せる最終の信號なりき。時は七月二十三日午前十一時聯合艦隊中の第一游擊隊先づ發し、本隊、第二游擊隊、水雷艇隊等之に繼ぎ、序列整然として港外に出づ。折しも天晴れて海波蓆の如く、雄風



堂々たる二十餘隻の艦艇水を劈いて高く白沫を揚げ、景狀甚だ勇壯なり。樺山軍令部長は高砂丸に乘じて之を帆揚岩附近まで送り、將に別れんとするや、數聯の彩旗高砂丸の檣上に飜りて、一語千鈞より重き信號は聯合艦隊に餞されたり。曰く

『帝國海軍の名譽を揚げよ』

各艦の將士此の信號を望んで意氣軒昂覺えず踴躍せり。東郷浪速艦長乃ち副長をして

『總員上へ！』の號令を下して乘員全部を艦橋下に集合せしめ、莊重に訓示して曰く、

『諸子も略ゞ推知せるならんが、今回の出動は吾人に取りて重大の任務あるものにして、之に對するの覺悟は唯始終本分を盡すの一事あるのみ。視よ、軍令部長の彼の信號を、部長は吾人を送るに帝國海軍の名譽を揚げよとの一語を以てせり。本官は諸子の精神を知るを以て、更に之を詳說するの要なし。翼はくば諸子と共に拳々服膺して以て忠誠を勵むべし。』

三百五十の健兒皆肅然として之を聽けり。

第一游擊隊の三隻は常備艦隊司令官艦軍少將坪井航三之を率ゐ、他艦と離れ吉野（司令官旗艦艦長海軍大佐河原要一）、秋津洲（艦長心得海軍少佐上村彦之丞）、浪速の順序にて單縱陣を制り、單獨前進して二十五日の早朝牙山附近に達せり。是日天氣快晴微風拂々、海面時に淡霧を拭

するありしが、偶々豐島の方より三汽船の煙縷を吐きつゝ我に向ひ進行し來るを認む。坪井司令官乃ち各艦の速力を十五海里に增さしめ、彼我漸く近づきて諦視すれば、是れ清國軍艦濟遠（巡洋艦、艦質鋼、排水量噸數二三〇〇、速力一五、定員二〇四なり。）廣乙（巡洋艦、艦質鐵骨木皮、排水量噸數一二〇〇、速力一七、定員未詳なり。）の二隻にして、孰れも嚴重に戰鬪準備を爲し居れり。怎くと見たる司令官は各艦に戒嚴を令し、午前七時五十二分進みて三千米突の距離に達するや、濟遠の砲口一簇の白煙を吐くよと見えしが、飛彈忽ち我が頭上に轟けり。司令官激怒して直ちに之に應じ、三艦共に左舷砲を以て先づ濟遠を猛射し、續いて廣乙を擊ちしに、廣乙狼狽して濟遠に近づき、更に我中央艦秋津洲と殿艦浪速の間を望んで奮進し來れり。是に於て吉野は其の水雷及び衝突を避けんが爲めに、左方に施回して今將に逃走せんとする濟遠を追はんとせり。時に砲煙海霧咫尺朦朧として殿艦浪速は暫く前進艦秋津洲の所在を知ること能はざりしが、近く霧中より汽笛聞え、秋津洲の信號たること紛ひなかりければ、浪速も亦直ちに汽笛を鳴して之に應ずる折しも、其左舷艦尾の近距離に當り、煙霧迷離の間に驀然として廣乙の三檣現れたり。浪速の砲手は一齊に砲口を轉じて巨彈を轟發す。時に海霧漸く散じ、命中歷々指點すべし。廣乙遂に支ふること能はず、倉皇艦首を轉じ陸岸に向つて逃れ、濟遠亦全速力を以て、北西の方に走れり。是に於て坪井司令官各艦に令して隨意の



運動を取らしめたるを以て、秋津洲は廣乙を追ひ（廣乙は自ら陸岸の淺瀨に乘上ぐ）、吉野は濟遠に向ひぬ。東鄕浪速艦長航海長を顧みて曰く、『濟遠を追擊すべし』と。乃ち益々汽力を高め北西に急航せしが、前進せる吉野は其儘進航すれば航路安全ならざる處に到るべきを虞りて針路を變じ、更に秋津洲浪速に命ずるに旗艦に續航すべきを以てし、微速力となして其來會を待てり。此の時に當り、浪速は吉野の前方に出で、尙ほ濟遠を追ひ居たりしが會々清國軍艦操江（砲艦、艦質木製、排水量噸數五九〇、速力九）、及び英國商船旗を揭げたる運送船西方より來り、濟遠に接近すると見るや、操江は濟遠の信號を受けて西方に引返し（同艦は遂に秋津洲の爲に捕獲せらる）、唯英船のみ進行し來れり。既にして浪速愈々濟遠に迫り之を痛擊するに方り、英船は浪速の右舷を通過し仁川の方に航せんとす。東鄕浪速艦長艦橋にありて之を注視するに清兵を猶載せる狀ありければ、直ちに信號兵に命じ萬國信號を以て、『直ちに止まれ』、『直ちに投錨せよ』と嚴令して之を停止せしめ、猶も濟遠を追はんとするの際司令官より命令ありたるを以て濟遠の追擊を吉野に讓り（濟遠は遂に遁れて威海衞に入れり）、浪速は停止せしめたる英船の側に到れり。時に午前十時八分なり。

同十時四十分東鄕浪速艦長は、同艦分隊長海軍大尉人見善五郎に英船の臨檢を命ぜり。是に於て同大尉は端舟に乘じ往いて船長英人ガルス、ウォルスエーに面接し、船籍證書を檢

閲し、且數回の質問を試みたる後歸艦復命して曰く、『同船は英國倫敦なる、印度支那汽船會社の代理店怡和洋行の所有船高陞號にして、清國政府に雇用せられ、清兵千百名大砲十四門其の他若干の武器を太沽より牙山に運送するものなりしを以て、船長に向ひ我艦に隨航すべきを命ぜしに、彼も亦之を承諾せり。』と。東郷艦長乃ち同船に對し、『錨を揚げよ少しも猶豫する勿れ』との信號を揭げて拔錨を命ぜしに、少焉ありて彼より、『肝要の事あり談ずる所あらんとす』との信號をなし、且端舟を送らんことを乞へり。仍つて東郷艦長は再び人見大尉を派遣するに決し、訓示して曰く、『清兵若我命令に應ぜざるの狀あらば、歐人船員に肝要とは如何なる事なるやを問ひ、船長以下我艦に移乘せんことを望まば端舟にて連れ來るべし。』と。幾もなくして大尉歸艦し、清將等は船長を脅迫し我命に服從する能はざらしめ、且船内頗る不穩の狀ありと報告せり。艦長乃ち船員に向ひ、『直ちに其の船を見捨てよ』との信號を爲し、彼は更に我端舟を送らんことを請求せるも、今や危機已に迫り、清兵の意測るべからざるを以て、『端舟送り難し』と報ぜしに、彼は『許されぬ』と答信せり。此間船内なる清兵の騷擾愈〻甚しく、船長をして强ひて我命を峻拒せしめんとせり。されど艦長は猶ほ愼重に考慮し、再度『直ちに其の船を見捨てよ』との信號を爲し、且檣頭に危險を表せる赤旗を揭げ、以て清兵の反省を望みしも、彼は更に應ずるの狀なきのみならず、或は銃を



擬し、或は刀劍を拔き、百方船長等を脅迫し、頑然我命に從はずして交渉今や二時間半を費せり。艦橋に立てる東郷艦長の面上には痛烈の氣漲りぬ。常識に訴へ、法理に鑑み、熟慮を重ねたる結果は、何れも最後の手段を取るの一點に歸著し、遂に之を斷行するに到らしめぬ。

『擊沈します』

凛として力ある艦長の此一語は、霹靂の如く將士の耳底に轟きぬ。軈て艦内に響き渡る『打方始め』の號令と共に、水雷發射に次いで砲擊開始せられたり。千餘人の清兵かくと見るや、先を爭うて海中に投じ、殘餘は小銃を執りて抗せしが、午後一時十五分同船は後部より漸次沈沒し始めたり。東郷艦長は直ちに發砲を止め、端舟を下して溺者の救助に從事中同四十六分船體全く沈沒し了り、船長以下船員一同は無事我が艦に收容せられたり。

附けて記す。高陞號擊沈に關し、同船長ガルス、ウオルスエーが佐世保鎭守府職員の質問に對する答書あり、參考の爲め之を左に揭ぐ。

ショパイウォールに近づくとき日本軍艦浪速より『進行を駐止せよ』と命ぜられ尋いで『投錨せよ』と命ぜらる、乃ち其の命に從へり然る後浪速他方に航進せり、蓋し他の日本軍艦と商議の爲なりき、此時余信號を以て進行すべきやを問へり浪速より、『止まれ然らざれば其の責を負へ』と答ふ幾何もなく浪速より尋問士官端舟にて來り船

船書類を見んことを望む、余之を示す、又種々の問を發す余之に答へたる後士官は余に浪速に隨行(船を以て)せんことを求む、余之を諾す、是浪速の軍艦なるを以て我は之を拒むべき力なきに由りてなり、恁くて士官は本艦に還り浪速より『直ちに錨を揚げよ』との命令あり然るに船中の支那將官之を許さず、且謂て曰く『汝浪速に隨行し或は去らんとせば汝を誅戮(ちうりく)し或は銃殺せん』と而して兵士をして余を看守せしむ、兵士は大刀或は銃鎗を著けたる銃を以て余を看守す、余是に於て浪速に信號し面陳したき事あるを以て端舟を送らんことを求む、此の請求により浪速の端舟到るや支那武官は初め余が舷門に至り日本士官に面會するを許さざりしが、終に纔(わづか)に之を許可したるを以て日本士官に面會し、支那武官等本船の浪速に隨行するを許さず、彼等と協議の途は唯太沽(タクー)に船を引戻すの一あるのみなること、並に本船は元來英船にして其出港したる時は未だ宣戰を公布せられざりし時なりしを以て、此事をも浪速艦長に通知せられんことを日本士官に請へり。端舟浪速に歸る後幾もなくして『直ちに船を去れ』と信號傳へらる因て『余等は去るを許されず端舟を送られたし』と答ふ。此時浪速は『端舟を送り難し』と信號し尋いで前檣に赤旗を揭げ、高陞に向つて水雷を放ち且發砲し終に之を沈沒せしめたり云々。



更に同船長が、當時支那將官の決心に關し、陳述したる書面は左の如し。

支那將官に於て余が本船を以て浪速に隨行せんと企つる趣を聞くや、余の隨行することを拒み余に日本軍艦に隨行することを許さざる旨を傳へり、余之に答て曰く『浪速艦の一發の彈丸は以て高陞號を沈沒せしむるに足る、之に抵抗するは無益なり』と將官曰く『浪速に隨行せんよりは寧ろ死せん、我に千百人の勇兵あり浪速の乘組は僅に四百人に過ぎず、之と戰ふ何ぞ難からん』と余は彼等に其事の愚なることを語り且彼等支那將官にして戰はんと欲せば、余は余が士官及び機關士と共に上陸せんと此に於てか彼等は暴威を以て余を脅し、余に於て船を去り浪速に隨行するが如き企を爲さば直ちに余を誅戮し余を銃殺すべしと斷言せり』云々。

恁の如くして高陞號は海底深く沈沒し、僅に其兩檣の尖端(せんたん)を海面に露出し、海鳥のみ時を得顔(とがほ)に嬉々として其周圍を翔(かけ)旋(めぐ)れり。

附けて記す。東鄕元帥編者に當時の狀況を說きたる際、下の如き奇緣に付き物語れり。

『高陞號擊沈當時の船長は、予が英國留學の際乘組ゐたる練習船ウースター號にて海事を學びたる者にて、予より二期後に卒業したる由なり、擊沈當時には船長も、何とも言はず、予は固より知らざりしが、明治四十四年依仁親王殿下に隨行し奉りて渡英したる時、ウースタ

1號の卒業生達にて予の爲め歡迎會を開き呉れしに、適々此の船長より書面を寄せて、予も歡迎者の一人たる資格を有し居るも高陞號事件に顧み遠慮するを至當と認むる由申し來れり。予は始めて其の事を知り、奇縁なりしに愕くと同時に擊沈當時少しも此の關係を口にせざりし處に、英人氣質見えて面白しと思へり。』

英船擊沈の報我内地に傳へらるるや、朝野震駭し、西郷海相の辯明あるに拘らず、廟堂の諸公頗る憂色ありて浪速艦長に對する非難の聲高く、加之英國の輿論亦一時囂々として、其の外務大臣キンバレー伯の如きは我が青木公使に向ひ、『日本海軍將校の措置より生じたる英國民の生命財産の損害に關しては日本政府其の責に任ずべきものとす。』との抗議を提出せるなりき。然れども公平なる同國一流の公法學者中には、浪速艦長の行爲を至當なりと爲すもの尠からず、就中有名なるホルラント博士の如きは、一編の論文を「タイムス」新聞紙上に揭げて極力東郷艦長を辯護せり。其の大意に曰く、

高陞號の沈沒せしときは既に戰爭の始まりし後なり、蓋し戰爭なるものは豫め宣告することなくして之を始むるも毫も違法の措置と云ふ可らず、此の事は英國及び米國の法廷にて幾度となく確定せられたる所なり、左れば假令高陞號の船員は初め戰爭の既に起りたることを知らざりしものとするも、日本の士官が我船に乘込み來りしときは之を知り



たるものと見做さざるを得ず、此の時に際し其の船が英國國旗を揭げたると否とは敢て注意するに足らざるの一些事たるのみ、當時日本の軍艦より捕獲の目的を以て高陞號に兵員を乘船せしむることは、到底實行せらるべき見込なかりしを以て、日本の艦長は高陞號をして其の命令に從はしむる爲に、如何なる暴力を用ゐるも固より其の權内に在ること、知るべし、抑々高陞號には日本軍攻擊の爲に派遣せられたる遠征の一部隊乘り居るなれば、日本人が其の目的地に達するを妨げたるは正當の所爲と謂はざる可らず、又沈沒後に救助せられたる船員は皆規則通り自由の身となることを得たれば、此點に於ても亦日本の行爲は國際法に背きたるものと謂ふべからず。

されば日本政府は之がため決して英國に謝するの義務なく又船主及び溺死せる歐人等の家族は日本に對して損害を要求するの權理なし云々

又ウエストレーキ博士も同紙上に一文を揭げて、浪速艦長の措置を正當にして、毫も間然する所なしと侃諤の論を公表なしければ、幾もなくして英國の輿論沈靜に歸し、寧ろ此の果斷の措置を賞揚するに至り、東郷浪速艦長の名は智勇を兼備せる英雄として世界に轟けり

附けて記す。或る人編者に向ひ、『當時浪速艦長は、高陞號擊沈の爲め萬一累を國家に及ぼすに至らば潔く割腹して陳謝するの決心なりしならん。』と言へり、然り戰に臨んで生

還を期せざるは軍人の常情、改めて決心する迄もなけれど、東郷艦長は啻に恁の如き單純なる覺悟の下に此の大事を斷行したるにあらざるべし。同艦長は縱より、横より、上より下より、八方十方より研究し、必ず然らざるの結論を得て之を斷行し、安焉として艦長たる職責の上に立てるものなり。嗚呼萬一其の措置國際公法の理に背き、英國と葛藤を生ずることあらんか、洵に國家一大事にして、一艦長の割腹によりて解決せらるゝ如き容易のものにあらざるべし。其の事を究めずして單に死すれば可なりとの覺悟の下に妄進するは、匹夫の勇たるのみならず、或は國家の爲に最も寒心すべき場合なしとなさず、編者嘗て此の議論に據りて、東郷元帥に當時の覺悟を訊ねしに、元帥は微笑せるのみにて終に一語を發せざりき。而かも編者は如上の觀察を以て誤なきものと確信するが故に、世の元帥を研究せんとするものに向ひ、高陞號擊沈の一事を以て、元帥が果斷に富める證明のみとなさず、併せて活學修養より得たる明智の試金石となさんことを望むものなり。

## 第二章　黃海々戰

威海衛港前挑戰運動—艦隊强行偵察—敵艦隊發見—砲戰開始—浪速奮鬪—全勝

豐島沖海戰の當日、伊東聯合艦隊司令長官は、本隊、第二游擊隊等を率ゐて朝鮮郡山沖に假



泊しありしが、坪井司令官より海戰の狀況並に清艦濟遠の威海衛方面に逸走せしことを聞知したるを以て、敵艦隊の全力を擧げ來りて我と戰ひ、航路を回復して牙山の駐兵と聯絡を通ぜんとすべきを推し、翌日令を全艦隊に傳へ、隔晋島に前進して敵と一快戰を試みんとせしが、海上寂として黃龍旗の隻影をも認めざりき。

附けて記す。豐島の海戰より辛くも逃れたる濟遠は、翌二十六日を以て威海衛に歸著し戰況を報じたるを以て、北洋海軍提督丁汝昌は直ちに總艦隊に出港を命じ、即日大擧して威海衛を出でしも、遂に我と相會するに至らず空く三日間洋上を游弋したる後再び威海衛に歸港碇泊せり。

既にして同月三十日に至り、我が混成旅團は牙山の敵軍を破り、次で、八月一日宣戰の詔勅出で、兩國の戰爭は玆に完く成立せるも、敵艦隊の消息杳として聞ゆるなきを以て、伊東聯合艦隊司令長官は其の必ず威海衛港内に在るべきを察し、同港外に到りて游弋し、敵艦隊を誘出して雌雄を一擧に決せんと欲せり。是に於て八月初旬、先づ第一游擊隊を大同江に派して敵を偵察せしめ、自ら本隊、第二、第三游擊隊等を率ゐ同方面に向つて進發せり。時に坪井司令官は第一游擊隊の吉野、高千穗を第一小隊、同浪速、秋津洲を第二小隊と定め、必要に應じて或は交互に或は兩方面に、分離して偵察に從事せしめぬ。恁くの如く第一游擊隊の第二

小隊として、戰役中終始運動を共にせる浪速艦長東鄕大佐と秋津洲艦長心得上村少佐とが十年の後復相提携して露國艦隊を擊破するの運命を有したるは、蓋し妙因緣たるを失はざるなり。

北進せる第一游擊隊は、仔細に大同江方面を偵察せるも全く敵艦あらざるを以て、總艦隊は愈々進擊の準備を整へ、八月十日遂に威海衞港前に達し、各隊或は合し或は離れ、悠々艦隊運動をなして敵の出港を待ち居たり。然るに港內には數隻の小艦碇泊せるのみにて、我目的とせし主力艦隊あらざりければ、震天動地の計畫も水泡に歸し、伊東聯合艦隊司令長官は一先づ仁川附近に引揚げ、尋いで朝鮮南岸の要害古今島に據りて敵の動靜を攻究せり。

附けて記す。敵の提督丁汝昌は、八月九日卽ち我が艦隊が威海衞港口前に達する前日、主力艦隊を率ゐて同港を出發し、東行して海上を游弋すること三晝夜の後、再び威海衞に入港せり。而して彼は我が挑戰を以て其の主力艦隊の不在に乘じたるものと思考せる如く、李鴻章は其の上書中に於て『我が艦隊大同江を巡視するや彼直ちに虛に乘じて來りて威海衞旅順を窺ふ我が海軍歸るに及んで倭艦卽日退き去る』と云へり

當時清國政府は大軍を平壤に集め、我が陸軍の北進を禦がんとせるを以て、我が大本營の作戰は之を擊破するに決し、之が爲めに陸軍の大運兵船隊を朝鮮海峽より仁川迄護送すべ



きの命を伊東艦隊司令長官に傳へぬ。是に於て同司令長官は、敵艦隊の動靜を知ると同時に、我を窺はんとする敵の偵察艦を制壓せんが爲め、輕快迅速なる第一游擊隊に仁川以北の巡邏航行を命じ、吉野以下は二隊に分れ、交々渤海を游弋せり。

附けて記す。東鄕浪速艦長が、威海衞又は旅順口等を偵察し了り旋回して歸途に就かんとするの際は、必ず敵砲臺に近く艦首を旋回せりと云ふ。這は些細の事なれども、同艦長が常に兵氣を振興せしむるに如何に意を用ゐ居たるかを推知するに足るべし。

恁くて伊東司令長官は、總艦隊を擧げて前後兩回陸兵を仁川に護送し九月十二日全く之を了りたるを以て、第二游擊隊を仁川に留めて揚兵掩護に當らしめ、第三游擊隊及び水雷艇隊には、平壤攻擊の陸軍に應援の爲め大同江の溯行を命じ、而して親しく渤海灣內の强行偵察を試み、以て敵艦隊に會して決戰せんとの計畫を立てたり、然るに當時、敵艦隊は黃海の東岸大孤山沖に出沒し居れる如しとの情報に接したるを以て、先づ第一に小乳纛角より黃海北部の海洋島に至り、夫れより大孤山沖、威海衞、大連灣、旅順口、太沽、山海關、牛莊等を巡回偵察せんと決定せり。

時は九月十六日の夕暮、黃海の秋稍々闌けて、四邊の光景物寂たる小乳纛角の、錨地を出發せる我が主力艦隊は、第一游擊隊吉野（艦長海軍大佐河原要一）、高千穗（艦長海軍大佐野村貞）、秋

津洲(艦長心得海軍少佐上村彦之丞)、浪速(艦長海軍大佐東郷平八郎)先鋒となり、本隊松島(艦長海軍大佐尾本知道)、千代田(艦長海軍大佐内田正敏)、嚴島(艦長海軍大佐横尾道昱)、橋立(艦長海軍大佐日高壯之丞)、比叡(艦長海軍大佐櫻井規矩之左右)、扶桑(艦長海軍大佐新井有貫)、之に次ぎ、外に砲艦赤城(艦長海軍少佐坂元八郎太)、及び巡洋艦代用西京丸(艦長海軍少佐鹿野勇之進)、も艦隊に隨伴し進路を北西に取りて豫定の如く先づ海洋島に向へり。而して伊東司令長官は本隊の旗艦松島に在りて艦隊を統督し、坪井司令官は第一游擊隊の旗艦吉野に在りて同隊の指揮を掌り、別に數日前東京より艦隊所在地に來れる大本營海軍參謀官樺山中將は、戰況視察のため西京丸に搭乘し十二隻の艦隊威風堂々月明に乘じて海面の金龍を碎きつゝ、曉天の頃早くも海洋島附近に達しぬ。是に於て伊東司令長官は赤城をして同島錨地を偵察せしめたる後針路を北東に轉じ、大孤山沖大鹿島錨地に向つて航進すること卅海里に及びぬ。此の時先鋒たる第一游擊隊は東北東の水平線に一縷の煤煙を認めたるを以て、乃ち針路を其の方面に轉じて漸次相近づきしに、一縷は二縷となり、三縷となり、次第に其數を增して終に十餘縷の煤煙簇々として揚り、最早敵の艦隊たる事疑ふべからざるに至りければ、坪井司令官は檣頭高く信號旗を揭げて曰く、『敵の艦隊東方に見ゆ』と。時に午前十一時三十分なり。

附けて記す。我が艦隊威海衛に挑戰を試みたる後清國艦隊は總理衙門より『何等の事



情あるも山東燈臺より鴨綠江に劃する一線以外に出づべからず』との嚴令を受け、全く朝鮮海上の權を拋棄せるが、其の後我が陸軍が平壤に向つて進軍するの報に接したる同所の清將等は、急を李鴻章に告げて頻に援兵を請へるを以て、李鴻章も之に同意し、增兵を大連灣より運送船五隻に乘せ、海路鴨綠江附近に送りて上陸せしむることに決し、丁汝昌には之が護衛を命ぜり。是に於て丁汝昌は艦隊を率ゐて威海衛より大連灣に廻航し、九月十五日の夜半同所を拔錨し、十六日の午後目的となせる大東溝に著し、運送船は直ちに港内に入りて陸兵の上陸を始め、艦隊の一部は溝口にありて警護の任に當り、其他の諸艦は十海里の沖に投錨して十七日朝に至りしに、遙に我艦隊の來るを望見し、急に拔錨して我を邀擊せんとせるなり。

本隊旗艦松島にありて敵艦隊出現の報告を得たる伊東聯合艦隊司令長官は、直ちに令を下し各艦をして檣頭に大軍艦旗を揚げしめぬ。之と同時に諸艦に起る戰鬪の號音は、凄曉として海面に響き、日清兩國の運命を賭すべき大激戰は、一秒一秒迫り來りて殺氣四邊に充滿せり。忽にして第一游擊隊、本隊共に戰鬪陣形たる單縱陣を制り、赤城と西京丸とは本隊の非戰側に移り、孰れも汽力を增して急進せり。恁くて漸く相近づきて敵艦隊を望見すれば、彼は我前面に在りて最も展開せる後翼單梯陣を布き、東洋無雙の戰艦と誇れる定遠、鎭遠

は其中堅に位置し、左翼には來遠、致遠、廣甲、濟遠を、右翼には經遠、靖遠、超勇、揚威を列ね、我に向ひ進み來るの狀壯觀を極めたり。而して猶ほ別に遠く我が左方に當り、平遠、廣丙及び數隻の水雷艇黑煙を吐き控へたり。

浪速の前艦橋に立てる東鄕艦長は、此時靜かに副長(海軍少佐石井猪太郎)を顧み總員の集合を命じたるを以て、時を移さず兵員悉く艦橋下に集りぬ。艦長凜然として諭して曰く、

『視よ、精銳を盡したる敵は既に彼方に近づけり。快戰應に開かるべし。本官は忠勇なる諸子に向ひ改めて言ふべきことなしと雖も、一艦の勇戰は一人の勇戰より成り、一隊の勇戰は一艦の勇戰より成る。諸子夫れ之を思うて飽くまで本分を盡し、敵を粉齏して以て皇恩に報い奉れよ。』

之を聽ける三百の將士意氣天を衝き、仰ぎて艦長を瞻つゝ、無言の裏既に敵を呑むの概を示せり。

本隊の先頭に立ちて嚴整なる單縱陣を制り、敵陣の中堅を望んで猛進せる第一游擊隊は敵前六海里に及びて俄然左方に旋轉せり。これ敵の右翼を擊破し、延て敵全軍の兵器を挫折せんと企てたるものにして、午後零時五十分彼と相距ること約六千米突(三海里)となりぬ時に定遠の前砲臺白烟を吐き電光閃くよと見る間に、二發の巨彈は我近傍に落着せり。之



と同時に十隻の敵艦一齊に砲火を開き、唯一戰に我を粉齏せんとの氣勢を示せり。されど第一游擊隊は自重して未だ一發も應砲せず、自若として前針路を保ち、十四海里の速力を以て飛ぶが如くに敵の右翼に迫りぬ。彼我の距離は急に短縮せり。時正に午後零時五十五分旗艦吉野は距離三千米突を確測し、第一彈を翼端なる揚威に向つて打放せり。恁くと見たる他の三艦も相前後して砲擊を開始せるが、殿艦浪速にては、東鄕艦長司令塔に入らずして前艦橋にあり。敵勢を考へ砲術長を顧みて曰く、『本艦は先づ來遠(編者曰く來遠と見えしは其姉妹艦經遠なりしなり)を擊つべし』と言ひも終らず喇叭手をして『打方始め』の號音を吹かしめぬ。是に於て浪速の諸砲は經遠を猛擊し、尋いで靖遠(編者曰く艦長の報苦には致遠とあり致遠と靖遠とは姉妹艦なり)より超勇揚威と、次第に目的を翼端に移し、砲擊大に勉むるの際、一時八分敵の巨彈右舷側外一米突の所に落ちて反跳し、一番砲臺の直下水線部を穿ち、海水飜騰して甲板を浸し、東鄕艦長も飛沫を受けて全身濡鼠の如し。

既にして旗艦吉野は徐々に針路を右方に轉じて敵の右翼を旋り、航路波上に半月形を畫がきて彼の背面に出で、益ゝ猛擊を揚威、超勇に加へ他艦之に隨ひしが、浪速は二千五百米突まで近づき、主として靖遠等の三艦と戰を交へぬ。今や右翼の二敵艦は大損害を蒙り、超勇先づ大火を起し、尋いで揚威も之と運命を同うし、共に早くも運轉の自由を失へり。我は之に乘

じて愈々砲火を注ぎしかば、超勇終に堪ふる能はず、右舷に轉覆して海中の藻屑となり、揚威は火災に包まれながら大鹿島を望んで逸走せり。（後に至りて同艦の大鹿島の傍に乘揚げ燒棄せるを發見せり）。恁くの如く勇戰しつゝ敵の背面に出でたる我游擊隊は、其の儘右方に旋回を續くれば、今正に敵と砲戰を開始せる本隊の砲擊と相對し稍危險なるを以て、坪井司令官は左方に旋轉し、本隊を圈の內方に見つゝ之と反對の方向に進行して更に敵に向はんとせり。

游擊隊との一戰に脆くも右翼の二艦を失うたる敵は、憤然として傷つける野猪の氣勢を示し、定遠、鎭遠以下の堅艦は、各〻其の艦首を我本隊に向け、側面より單縱陣を衝かんとするが如く猛進し來れり。我が本隊は十海里の速力にて依然單縱陣を保ち、猛烈に砲火を交へつゝ敵前を通過せしが五番艦比叡は砲戰酣なるの際、前續艦橋立より千三百米突後れ、敵の堅艦に衝突せらるゝの虞あるに至りしかば、同艦長は意を決し、單獨列を離れ右方に回轉して敵艦隊の中間に突入し、殊死して戰ひ遂に重圍を脫し、再び僚艦に合する如く運動せり。是に於て比叡を逸したる敵の三大艦は速力及ばずして孤立の位置に立てる砲艦赤城を圍み、四方より之を猛擊したるを以て赤城艦長は戰死し、將校も亦概ね負傷したりしも更に屈せず、益〻惡戰苦鬪を續けたり



此の時恰も第一游擊隊は伊東司令長官の命を受け、本隊に續航すべく運動しつゝあるの際なりしが、其の後方にありたる西京丸より、『比叡赤城危險』との報を受けたるを以て、坪井司令官は之を救はんと決心し、直ちに本隊に續航するを止めて左方に旋り（第四圖參觀）十五海里の速力にて赤城と敵艦隊との中間に向へり。幾もなく殿艦浪速は、其の左側に當り西京丸の、『我舵故障あり』との信號を揚げつゝ航行し來るを望見せり。蓋し西京丸は敵艦定遠以下四隻の爲めに追蹤せられ、十數發の巨彈を蒙り、汽管を破られて蒸汽舵機頓に其の用を失ひたるを以てなり。東鄕浪速艦長は卽時に其の進路我と交叉せるを判斷し航海長を顧みて『停止』と叫びぬ。忽にして浪速は航進を停め西京丸の前面を通過せるを待てり。之が爲め前續艦との距離甚大となり、殆ど孤立の狀態に陷りしを以て、西京丸の無事過ぎ行くを見るや、全速力を出し僚艦に追及せんとせり。此時敵艦定遠、鎭遠、致遠の三隻雁行し來りて我に迫り、巨彈怒り飛んで海波林立し、浪速の甲板に海水濺ぐこと雨の如し。有繫に沈著なる艦長の面色も緊張し來り、爛々たる眼光もの凄まじく、兵士を督して大敵に當り奮鬪最も努むる折しも、更に敵水雷艇の砲烟中に出沒するを發見し、機砲を放つて之を亂射しつゝ遂に前續艦に追及するを得たり。

附けて記す。浪速と別れたる西京丸は、人力舵機を用ひ航馳するの際、新に敵軍に加はれ

る平遠、廣丙の二隻が水雷艇を前後に控へて襲來するを認め、先づ前進する水雷艇を擊退し、尋いで二艦と一戰を交へて通過せしに、後部にありし水雷艇福龍號猛進し來りたるを以て、乃ち衝突して之を乘沈めんと試みしも、轉舵意の如くならずして目的を達する能はず、彼之に乘じて四十米突の近距離に迫り、水雷を發射せしも、倖に艦底を潛過せしを以て、事無く戰域を脫して大同江に向ふことを得たり。

既にして第一游擊隊は敵艦隊を三千米突の距離に見て猛射を開きしに、彼の前半隊は右先鋒梯陣を制り、後半隊は單縱陣となり、赤城、比叡を見捨てゝ第一游擊隊に迫り、我一時苦戰に陷りたりと雖も、恰も好し敵を一週して反對側に出でたる我本隊と、兩々相應じて彼を夾擊せり。かくして、激戰今や極度に達し、數里の海面戰雲漠々として電光閃めき、百雷轟き、彼我二十餘隻の艨艦乍ち合ひ乍ち離れ、巴の如く旋轉して戰鬪數時間に亙りしが、我が巧妙迅速なる進退に當りかねたる敵は運動次第に亂れ、加之提督旗を揚げたる定遠、鎭遠の檣頭は、孰れも我が砲彈の爲めに折られ、信號旗を繫ぐべき少索も盡く切斷せるを以て、復信號を行ふこと能はず、諸艦長は是非なく各自の判斷に依り、定遠の行動に倣ひて屢〻方向を轉じたるも、終に一致の行動を爲す能はざるに至り、或は西し或は東し、紊亂益々甚だしく特に前面にありたる致遠は前後より猛射を受け、右舷に傾くよと見る間に俄然覆沒し、海面沸くが如



き渦卷を生ぜり。

附けて記す。當時鎭遠に乘組み居たりし米人某の海戰記に曰く、『時しも致遠は二艦を突擊すべく思ひけん決然身を挺んで堂々たる日本游擊隊に向つて驀進せり其所爲たる稍々暴虎馮河の嫌ありたるにせよ亦剛毅大膽と稱せざるを得ず、而して其後の消息は之を詳にし能はざりしも水線下に十吋か十三吋の重砲榴彈を受けたるは明瞭なる事實にして程なく該艦は强く一方に傾きはじめたり、稍々執拗とは云へ最も勇敢の聞えある艦長鄧世昌は最早致命の迫りたるを察し、切ては敵の一艦なりとも打沈めて死を潔くせんと決したるものゝ如く、一大艦に向ひ衝突すべく猛進せり。されど其の大艦より發射する重砲機砲は雨の如く注ぎ、あはれ之に達するに垂として遂に覆沒し艦首より沈みはじめ、艦尾直立して螺旋半空に回轉しつゝ、乘員の殆ど全部を伴うて深く海中に葬られぬ』云々。

既にして丁提督の旗艦定遠には猛烈なる火災起り、其消防の爲めに下層の甲板は四呎の水に浸されたりと云ふ。尋いで來遠、平遠も火災に苦み、其他の敵艦も終に支ふること能はず、濟遠、廣丙先づ逸し、廣甲、經遠、來遠、靖遠之に次ぎ何れも列を亂して大連灣の方に遁走し戰場に留りたるは旗艦定遠と、之を守護せる鎭遠及び一隻の水雷艇のみ。

是に於て我艦隊も二つに分れ、本隊五隻（比叡不在）は定遠、鎮遠の二戰艦に當り、游擊隊の四隻は逸走せる敵の數艦を追擊せり。恁くと見たる敵艦靖遠は一信號を揚げ、火焰に包まれたる來遠と共に大鹿島の方に針路を轉じ、平遠、廣甲等は陸岸に走り（廣甲は後大連灣口にて坐礁し自ら爆沈す）外觀何等の損傷をも示さざる經遠のみ依然大連灣の方に遁れぬ。

坪井司令官乃ち之を擊沈せんと欲し、四艦飛ぶが如くに追ひ逼り射距離に入るや吉野得意の速射砲を連發し、三艦亦之に次ぎて猛擊せしかば、黑煙敵艦内に漲り、忽ち左舷に傾きつゝ縱横に旋轉し、乘員或は綱を舷側に垂れて水際に身を釣るあり、或は檣上に登るありて慘狀を極むるうち、艦體愈々傾斜し左舷艦首より漸く水中に沈み、右舷推進器空を蹴りつゝ轉覆し瞬時赤色の艦底を露出したる後全く沈沒し了れり。是より先我本隊五隻の包圍攻擊を受けたる定遠は火災益々猛烈となり、且舵機にも故障を生じ、二百餘發の彈丸を被りて丁提督も負傷し、苦戰萬狀唯鎮遠の護衛に依りて僅に沈沒を免れ得たるのみ、鎮遠の管帶（艦長に相當す）は嘗て仁川港口にて東鄕浪速艦長と夙に精神上の鬪鬪を試みたる總兵（少將に相當す）林泰曾なり。而して彼の艦も亦定遠に讓らざるの彈數を被り、甲鐵ならざる部分は悉く破壞せられたるの窮境に陷りたるも、林總兵は自若として艦橋に立ち、身邊を掠め飛ぶ彈丸を知らざるものゝ如く、一意定遠を護りて冷靜果敢の奮戰を續け、機を觀て三十珊半



の雙砲を轟射したるに、二發の巨彈空に叫び飛來して我旗艦松島の艦體を貫き、砲楯に命中爆烈して彈片四方に飛散し、將士二十八人を殪し、六十八人を傷け、且備砲の大部を破壞して復用を爲さゞるに至らしめたり。時に艦橋上にありし伊東司令長官靜かに參謀長海軍大佐鮫島員則を顧みて曰く、『本艦大破して殆ど戰鬪力を失へり、今は是非なし他艦をして各自隨意に戰鬪せしむべし。』と乃ち本隊の諸艦に向ひ、『旗艦に關せず追擊せよ』との命令を下せり。

附てけ記す。此の海戰に於て全艦隊の將士皆忠勇義烈の日本魂を發揮し、後世に傳ふべき美談擧げて數ふべからず、左に揭ぐる一話の如き、僅に其の一斑に過ぎざるも、亦以て全豹を窺ふべきなり。

旗艦松島の敵彈の爲め大破するや、伊東司令長官は親しく其の被害の場所を巡視す。時に彈片に打たれ鮮血溢流して仆れたる一兵士あり。其の顏面は硝烟に冒され腫脹燻焦し、頭部亦糜爛して其の誰なるかを辨ずる能はず。今將に瞑せんとして僅に餘喘を保つのみなりしが、司令長官の近づくを知るや幽に眼を開きて凝視し、『長官閣下御無事でしたか』と叫び直ちに起立せんとしたれども、骨節碎けたるを以て意の如くなる能はず辛うじて隻手を上げ敬意を表し得たるのみ、司令長官之を憫み傍に近づき其

の手を握りて曰く、『祐亨はこの通り無事ぢや』と、足踏なして之を示したるに兵士は嬉氣に微笑して、『閣下さへ御無事なれば安心です』と叫びて長官の手に縋りつゝ遂に瞑せり。嗚呼如何に氣高き其の光景なるよ。部下を熱愛する將軍と、身を忘れて長官を念ふ兵士とが最後の握手を交したる此の刹那の感情程清く美しきものは世に稀なるべく、後日談此の事に及ぶ毎に、伊東長官の眼は必ず露に潤ひ、東郷大佐亦感嘆を禁じ得ざりき。

叙上の如き本隊の砲擊中に、夕陽將に沒せんとしたるのみならず、第一游擊隊との距離も大に隔絶したるを以て、伊東司令長官は遙に游擊隊を招きて之と合し、定遠、鎮遠も散亂せる艦隊の一部を收集して南方に航し、將に威海衛に逃れんとするものゝ如し。司令長官以爲らく夜間更に砲火を交ふるは雷に隊列の混亂を來すの恐あるのみならず、敵には水雷艇隊附隨し居るを以て、之を追究するは策の得たるものにあらずと。乃ち明旦を待ち威海衛沖に於て彼を遮ることに決し、敵と竝行するの想像航路を執りて進行し、(松島は損害甚だしきを以て司令長官は將旗を橋立に移せり)天明に及びしに、全く敵を相失し隻影をも認むること能はざりければ、更に前日の戰場を巡りて後大同江の假泊地に歸航せり。

此の一戰に於て敵艦隊は、經遠、致遠、廣甲、揚威、超勇の五隻を失ひ、其他も皆損傷を被り、修理



を加へずして巡航し得るもの一隻も無きに至り、勝利全く我に歸しぬ。

附けて記す。此海戰後提督丁汝昌が盛宣懷に與へたる書中に曰く、『海軍の兵力は元來薄弱なりしに加へ鹿島の役四艦は沈焚せられ一艦は擱淺して今や極めて薄弱となり且各艦の砲身損壞せるあり兵器彈藥は何の時か到着すべきや此等の事を想起すれば心中焦灼の至に堪へず若此際靖遠、濟遠、平遠、廣丙の中又一二艦を失はば聲勢更に減退せん汝昌已に定見あり傷癒え上艦するに至らば、全艦隊の修理完成を俟ち或は勅命を奉じ或は李中堂の訓令を承け、艦の多寡を論ぜず必ず應に力戰して以て國に酬ゆべし艦も人も共に亡びたる時は汝昌の責卽ち盡くの日なり』云々。彼の胸中亦憐むべきにあらずや。

我が艦隊にありては旗艦松島受傷最も甚しく、赤城、比叡、西京丸之に次ぎ其他は殆ど破損と云ふべき程のものなく、就中東郷大佐の乘艦浪速の如きは、九發の敵彈を被りしに拘はらず、一人の戰死者をも生ぜざりければ、世其幸運を稱へ、同艦を呼ぶに寶船の名を以てするに至れり。

戰後東郷浪速艦長は、同戰の戰鬪詳報を坪井司令官に提出せり。乃ち之を左に揭ぐ。

二十七年九月十六日午後五時五分本隊第一游擊隊及び赤城西京丸の諸艦と共に夢金浦を發し海洋島の方に向ふ翌十七日午前五時四十五分同島の東端を過ぎ其の西方を遶り

大羊河口に向ふ同十一時右舷艦首に當り遙に煤煙の上るを見る同時旗艦吉野より敵艦三隻以上見ゆの遠距離信號に接す同五十分敵の艦隊十隻我が針路に交叉して航し來り又其の右翼に當り數隻の煤煙を望む、此の時我が陣形は單縱陣にして第一游擊隊之が先鋒たり午後零時十一分戰鬪部署に配員し戰鬪旗を揚ぐ、而して敵の陣形は恰も張翼單橫陣或は後翼單梯陣なるもの〻如く、其の右翼列は定遠、來遠(或は經遠)、致遠(或は靖遠)、揚威超勇其の左翼は鎭遠、經遠(或は來遠)、靖遠(或は致遠)濟遠廣甲の諸艦にして又廣丙及び平遠は水雷艇六隻と共に別に敵隊の後方に在りて運動せり同廿分旗艦松島の信號に依り敵隊の右翼に向ひ航進す同五十六分敵艦先づ發砲を始む同五十七分我が先頭各艦砲擊を始む同五十八分我が艦打方を令し砲擊大に努む、同一時八分敵の巨彈我が右舷側に落ち一番砲臺の直下水線を穿ち海水飛揚甲板を浸す、尋いで旗艦吉野に從ひ右に轉じ敵の右翼來遠、揚威、超勇を猛擊す(近距離二千五百碼)其の一艦火災起る、既にして本隊敵の右翼を環攻す、同三十五分吉野に從ひ左十六點に方向を轉じ再び左方に廻轉して本隊の後に出づ此の時比叡及び赤城の孤立するを見る、同二時十五分比叡より『我火災』の信號を爲す因りて我が第一艦隊は左に轉じ之に赴援す同三十分我が艦の左轉せんとするや、西京丸は我が左側に方りて『我舵を損す』と信號しつ〻我が艦首を通過せんとす、我が艦乃ち航進を



停止し西京丸の我が艦首を橫過するを待ちて後旗艦の通跡に入りしを以て前續艦の距離甚大となり殆ど孤立するに至れり然れども尙ほ全速力を以て之に追及せんとす、此の時敵艦定遠、鎭遠、靖遠(或は致遠)の距離漸々接近して專ら我に迫る(距離三千碼)我應擊最も努む時に敵の水雷艇の運動するに會し機砲を以て亂射す、同三時十二分前續艦に接近す、此時比叡は已に去つて南に航走し、赤城は遠く南東に在るを見る、同二十分第一游擊隊は左に轉廻し本隊と共に敵艦隊を夾擊す、敵艦隊大に亂れ交々逃走を始む同三十一分致遠の後部大に傾斜し同三十五分遂に沈沒す已にして定遠に火災起り鎭遠と共に東南に走り經遠、來遠、靖遠、廣甲は西北方面へ平遠、廣丙、水雷艇は鹿島の東に逃走するを見る、是に於て我游擊隊は專ら西北逃走の敵を追ひ、本隊は定遠、鎭遠を追ふを見る、暫くにして經遠(編者曰く經遠とあるは其姉妹艦來遠なり)、靖遠は艦首を旋して廣丙、平遠と共に東方に向ひ濟遠は已に遠く海洋島の西に走れり、因りて我が游擊隊は專ら來遠(編者曰來遠とあるは其の姉妹艦經遠なり)に迫る、同五時十五分之に追及し烈しく砲を加ふ、少時にして彼艦內に火を發し發砲を止む、且艦體は漸々左舷に傾斜し同三十九分遂に沈沒す、而して旗艦松島の信號に依り同六時三十分本隊に會す。

## 第三章　金州半島占領

陸軍上陸掩護—大連灣占領—旅順口占領

陸に平壤の鏖戰あり。海に黃海の奮鬪あり。勝利孰れも我軍に歸したるが、就中黃海海戰の結果は、殆ど敵海の全部を制壓するに至りたるを以て、大本營の作戰方針は、直ちに大兵を渤海灣頭に輸送し、直隸の野に一大決戰を試むる豫定なりき。然れども季節稍々後れたるが故に之をば明年氷雪融解の候に讓り、差當り此の決戰の地點を進むるの目的にて、先づ金州半島を占領することに決定せり。是に於て伊東聯合艦隊司令長官は遼東半島の沿岸に於て適當なる陸軍の上陸地點を選定せんと欲し、本隊及び第二游擊隊を率ゐ、九月二十三日小乳蠟角錨地を拔錨して海洋島の北方に進み、別に東鄕浪速艦長に命令を與へ、秋津洲と共に威海衛、芝罘、旅順口、及び大連灣の偵察に赴かしむ。

命を受けたる東鄕浪速艦長は、秋津洲を率ゐ九月二十二日午後四時本隊等に先だちて小乳蠟を發し行々信號に依り、上村秋津洲艦長と意見を交換しつゝ、翌二十三日を以て威海衛以下の四港を仔細に視察し、二十四日の黎明大鹿島附近にて本隊に合し報告して曰く、『威海衛港には砲艦三隻、商船一隻、水雷艇二隻。芝罘港には外國軍艦四隻。旅順口には水雷艇二



隻碇泊せるを認む。又敵艦廣甲は大連灣外の險礁に擱座し、自ら爆壞したるが如き狀あり』（爾後他艦と共に屢々偵察に從事したれども之を略す）既にして伊東司令長官は、盛京省の南岸なる花園口（大連灣を北東に距る五十餘海里）を以て比較的良好の上陸地點と認めたるを以て之に關する意見を大本營に打電し、二十八日本艦以下を率ゐて假根據地と定めたる朝鮮漁隱洞に入りしが幾もなく更に東鄕浪速艦長に、西海艦隊司令長官海軍少將相浦紀紅に隨ひ、第二游擊隊及び秋津洲と共に山東高角附近を游弋すべきの命を傳へぬ。是蓋し故に山東省に意あるの狀を示して敵の注意を此の方面に惹き、以て我に金州半島を占領するの計畫あるを覺らざらしめんが爲なり。

相浦西海艦隊司令長官は、十月十五日を以て漁隱洞を拔錨し、翌朝目的地に達するや浪速秋津洲に威海衛の偵察を命ぜり。是に於て兩艦は單縱陣を制り港口に向つて進みしに、敵の東口砲臺我に向つて發砲すること前後四回、兩艦長顧みずして悠々偵察を遂げ、港內に威遠及び砲艦四隻の碇泊せるを認め、歸りて之を報告し第二游擊隊と共に七日漁隱洞に歸著せしに、十二日に至り東鄕浪速艦長は復も命を受け高千穗吉野と共に大鹿島沖を偵察せり。恁くの如く渤海黃海方面の偵察は、主として浪速等快速巡洋艦の任務なりき。

附けて記す。當時李鴻章は、日本兵大連灣附近に上陸を企て、海陸兩軍相合して旅順口を

攻擊すべしとの情報を接受せるを以て、提督丁汝昌、旅順道臺龔照璵兩人に對し、屢々詰責する所ありければ、汝昌憤慨禁ずる能はず、一書を李鴻章に贈りて要路の大官等平時は海軍の整備に冷淡を極めながら、有事に際すれば彼我の勢力をも計らずして妄りに接戰のみ促すを駁し終に曰く、『汝昌君相の重恩を受け湯火をも辭せざるものなり現に諸將も同心協力奮つて戰勝を圖らざるものなし、勝たば卽ち國家の幸福否ざれば敢て微軀を棄つるのみ若し事後詆議するものあらば罪を汝昌に歸せよ』と衷情を開陳せり。

是より先き新に第二軍編制せられ、陸軍大將伯爵大山巖其の軍司令官に補せられぬ。是に於て同軍を搭載せる陸軍運送船逐次漁隱洞に來集し、十月二十二日には其數既に二十二隻に達せり。是に於て翌二十三日艦隊は之を護衛して漁隱洞を出港し、翌朝上陸地點に達したるに、先發せる千代田の陸戰隊豫め上陸地點の一部を占領し、日章旗を樹て居たるを以て早くも上陸は開始せられぬ。

附けて記す。上陸は三回に分ち、一回各運送船十六隻、合計四十八隻（外に長門丸あり）にして、十五日間に上陸事業の全部を了れり。

而して艦隊は上陸點の近傍に碇泊して警戒に任じ、東鄕速浪艦長は例の如く秋津洲を率ゐて威海衞に於ける敵情を視察すべきの命を受けぬ。乃ち二艦は卽時上陸地を發し、二十



五日の朝威海衞に近づき西口より港內を望見せしに、定遠以下數隻の堅艦碇泊し、而も汽罐に點火せりと覺しく盛に黑煙を吐き居たりしが、折しも定遠の揭げたる一信號と同時に諸艦一齊に錨を拔き、定遠鎭遠、靖遠、平遠、濟遠、廣丙の六艦及び水雷艇二艦は威風堂々として港外に出で來れり。されど東鄕浪速艦長は依然港口附近を游弋しつゝ、尙ほ敵の動靜を窺ひ居たるに敵は我を眼中に置かざるものゝ如く、針路を山東高角方面に取り、單縱陣にて悠然航行し去れり。怎くと見たる上村秋津洲艦長は、切齒して之と一戰を交へんと欲し、手旗信號を以て浪速艦長に告げて曰く、『砲擊ては如何』と、されど浪速艦長は肯んぜずして、『吾人の任務は一刻も速に之を伊東司令長官に報告するにあり』と答へ、直ちに僞航路を取り速力を增し、同日黃昏の頃艦隊碇泊地に歸著し、敵艦隊出動の旨を伊東司令長官に急報せり。是に於て同司令長官は敵の來襲を慮り、翌二十六日早朝本隊及び第一、第三游擊隊を率ゐて錨地を出で、裏長山列島の東方を游弋して敵に備へしも、彼終に來らざりしを以て乃ち同列島錨地に入り、遙に上陸を掩護せり。

附けて記す。清國艦隊は十月十九日旅順口より威海衞に移りしが、越えて二十五日に至り、丁汝昌は艦隊を率ゐて港外に出でしも、敢て索敵せんとはせず、山東高角附近を一巡せるのみにて直ちに威海衞に歸港せりと云ふ。

陸兵の上陸著々進捗し、第二軍に屬せる第一師團は、十一月五日金州城に向つて出發し一舉に之を拔き更に兵を三隊に分ち、六日大連灣を望んで進擊せり。

大連灣は關東半島の南岸に位し、旅順口の東方二十七海里にあり。兵略上旅順及び金州と首尾相顧み頗る重要の區域なれば、海に枕みて九箇所の砲臺を設け、港内にも許多の水雷を敷設せしが、我が二砲は其の背後より和尚島及び大箇口の砲臺を望み、他の一隊は旅順方面を警戒し、三隊氣脈を通じて進みしに、敵は我が襲擊に先だちて早くも遁走し、我軍は銃口を汚さずして確實に之を占領し得たり。此の日黎明伊東司令長官は、本隊第一、第二游擊隊及び摩耶を率ゐ、裏長山列島錨地を出でて大連灣に向ひ、午後二時同灣口を距る約五海里の沖に達して游弋し、翌七日數隻の砲艦を陸岸近くに進め以て陸軍に應援せしめんとせしに、端なくも陸地各砲臺の既に我が軍の占領に歸したるを知り得たり。是に於て港内要所の掃海を行ひたる後、九日より各艦逐次入港し、浪速艦長は秋津洲を率ゐて旅順口を偵察すべきの命に接したるを以て、直ちに同港に赴き視察せしも、羊頭窪等の港灣内に敵の隻影をも認めざりければ、乃ち歸りて之を司令長官に報告せり。

既にして伊東司令長官は、第二軍の旅順口攻擊を開始するまでに猶ほ餘日あるを知りしを以て、此の間を利用して威海衛港内に潛在する敵艦隊に誘出を試みんと欲し、同月十五日



の夕刻、本隊第一、第二游擊隊、及び六隻の水雷艇、母艦近江丸、報知艦八重山を引率して大連灣を發し、針路を南に取りて十六日の曉天威海衛附近に達し、暫く停止して第一游擊隊及び八重山のみを港前に進め、以て敵の有無を檢せしむ。幾もなく同游擊隊は港口に迫り遙に港内を望見せしに、數隻の堅艦煤烟を騰げ縱横に碇泊し居たりければ、第一游擊隊は或は離れ或は合し、悠々として種々の運動を行ひ、敵を港外に誘はんと謀りしも敵更に應ぜずして互に信號旗を揭げ、何等か應答をなしつゝ終に錨地を灣奥に換へぬ。此の際秋津洲と共に最も港口に近寄り居りたる東郷浪速艦長は、雙眼鏡を取りて此狀を見、苦笑しつゝ航海長を顧みて『無益ぢや』と叫び、遂一之を吉野の坪井司令官に告げたるを以て、第一游擊隊は已むを得ず港口を去りて本隊に合し、伊東司令長官に報じて曰く、『港内には定遠、鎭遠、靖遠、濟遠平遠、康濟、廣丙及び砲艦四隻碇泊するを見るも、容易に出動するの狀なし』と。恁くして艦隊は空く大連灣に引上げぬ。

旅順口攻擊の準備完く成りたるを以て、第二軍は十一月十七日より逐次金州を出發し、二十日を以て諸縱隊は旅順口附近に達し、軍司令部を土城子に置き、兵を四隊に分ちて其の北方より東方に亙りて開進し、愈々二十一日より擊進を始めんとせり。

旅順口は直隷灣の北角に在り、大連灣を西に距る二十七海里、芝罘を北に距る七十四海里

にして、威海衛と直隷海峽を隔て遙に相對し以て渤海を扼して北清一帶の門戸を成せり。之を以て其防禦も頗る嚴に、二十四箇所の砲臺四面を固め、六十餘の砲門一令の下に巨彈を放つべく、加之一萬四千の精兵之を死守し、港内の防衛亦十分なりと聞えたり。

二十一日の曉天陸兵の攻擊開始せらるゝや、聯合艦隊も其の主力を擧げて旅順港前に進出し、本隊、第一、第二游擊隊は老鐵山沖に至り、反轉して更に海岸の各砲臺前を通過し、運用巧に陣形を變じて威力を敵兵に示し、又砲艦四隻より成る第四游擊隊は諸砲に大仰角度を與へ嶗嶗嘴砲臺を望んで邁進せり。折しも陸上の砲戰酣なりと覺しく、電光曉霧を劈きて砲聲殷々山壑爲めに震動せしが、之に誘はれて海岸の敵砲臺も我が第四游擊隊の先登筑紫を目的として第一發を打放てり。我亦直ちに應戰し、本隊等の大艦は外方に運動し、海陸兩面の砲戰午後に及びしに、偶〻一群の敵兵羊頭窪海岸附近の山峰に據りて頑强に防戰するものあり、千代田乃ち命を受けて海岸に近づき、敵兵の簇がる中に榴霰彈を放つこと數回、遂に全く敵兵を潰走せしめ、尋いで灣口東側の砲臺既に我が陸軍の占領に歸したる報を齎して復隊せり。是に於て艦隊全部再び運動を始め、各艦單縱陣を制り、浪速等の第一游擊隊は本隊と左右相竝び、第二游擊隊は本隊に續航し、老鐵山高角を一旋して更に旅順港外に歸る折しも伊東司令長官は水雷艇より情報を得たり。曰く、『西側砲臺は我が騎兵今攻擊中』と。



此の夜砲艦等は小濱島に碇泊し、本隊、第一、第二游擊隊は遠く外海を游弋せしが夜半に至り滿天鬱黑風力八に達したるを以て、伊東司令長官は二十二日の曉天より各隊の列を解き各自大連灣に入りて風浪を避くべきの命を下しぬ。

二十三日風力衰へたるを以て、第一游擊隊先づ旅順港外に達せしに、旅順口全く我軍の手に歸したるの報に接し、直ちに之を本隊に報告せり。

是より先第二軍は、二十一日先づ旅順の背面防禦線の中央なる椅子山堡壘を奪ひ、續いて二龍山、鷄冠山及び其以東の諸堡壘、竝に黃金山堡壘を陷れ、敵を殪す數千にして竟に旅順口を占領せり。然るに其の敗兵數千、既に我が手に落ちたる金州城柳樹屯に逆襲するとの報ありしが、當時我が陸軍の守備兵少かりしを以て、大連灣にありし海軍の第三游擊隊は、陸戰隊を上陸せしめて柳樹屯より金州方面を守り、約二千の敵兵を擊退し、一旦歸艦して更に貔子窩に上陸し、兵站部に應援せしが、尋いで金州半島全く平定するに至れり。

## 第四章　威海衛の攻略

第一遊擊隊登州府砲擊—陸兵榮城灣上陸—林曾泰自殺—東岸砲臺陷落—水雷艇隊闖入—定遠以下四隻轟沈—艦隊總攻擊—敵水雷艇全滅—丁汝昌降を乞ふ—伊東司令長官の義俠

一、敵の艦隊は目下威海衛に退縮し我が艦隊の挑戰に應ぜず故に我が軍他日兵を渤海灣

頭に進めんとする作戰の障礙とす因て之を撲滅せんが爲め陸海軍を進め威海衞港を占領せしめんとす。

二、貴官は第二軍の上陸兵を護送し之と相協力して威海衞港を占領し又敵の艦隊を撲滅すべし。

這は明治二十七年十二月十九日大連灣にて、伊東聯合艦隊司令長官の受けたる大本營命令なりき。恁くて久しく雄威を東洋に振ひし清國北洋艦隊が、全滅の悲劇は爰に其の序幕を展開せり。

抑〻威海衞は北洋海軍の策源地にして山東省の北岸に瀕し、芝罘の東四十二海里、山東高角の西二十三海里に在り、直隸海峽を隔てゝ旅順口と相對し、其間僅に九十海里、共に直隸灣の咽喉たり。港の形勢は北東に面し、中央に周圍五海里なる劉公島横はりて以て港口を東西に分てり、最後の運命を賭して此の島に據れる敵艦隊は、東西の兩口に防材を張り水雷を敷設し、又陸上の砲臺としては、劉公島に四箇所、其の東側なる日島に一箇所、本陸西口海岸に六箇所、同東口海岸に四箇所ありて、一萬餘人の兵士之を守り、別に九箇所の堡塞さへありて防禦頗る嚴重なり。

伊東司令長官は、威海衞攻略の爲め先づ陸軍を上陸せしむる地點を、水路約三十海里の東



方に在る榮城灣と定め、上陸に關し計畫する所あり。而して陸軍運送船は大連灣より三回に輸送することゝし、其の第一回の十九隻は明治二十八年一月十九日に、第二回の十二隻は二十日に、第三回の十九隻は廿二日に、各〻大連灣を出發するの豫定と爲せり。既にして一月中旬となるや第二、第六師團の陸兵を滿載せる運送船續々宇品港より大連灣に入り來り艦隊の準備全く整ひたるを以て、伊東司令長官は先づ常備艦隊司令官海軍少將鮫島員規（二十七年十二月二十六日坪井少將と交代して司令官に補せられ、海軍大佐出羽重遠常備艦隊參謀長に補せらる）に、第一游擊隊吉野、浪速、秋津洲の三艦を率ゐ、芝罘の西方四十海里にある登州府沖に至りて游弋すべきの命を與へぬ。是務て敵を騷擾せしめ、以て我が陸軍の上陸地點たる榮城灣方面に對する敵の運動を牽制せんが爲なり。而して浪速艦長は依然として東郷大佐なりき。

命を受けたる鮫島司令官は、吉野、浪速、秋津洲を率ゐて十八日の早朝大連灣を出で、西行して午後三時の頃登州府沖に達し、暫時砲火を交へたる後同夜三艦共に砲礮島附近に泊し、翌朝更に登州府前に現れ、一戰の後東行して二十日の曉天榮城灣外に廻航し、運送船を掩護して同灣に到れる本隊に合せり。而して東郷浪速艦長は、此の砲擊の顚末を鮫島司令官に左の如く報告せり。

一月十八日午前六時三十分旗艦吉野に從ひ、秋津洲と共に大連灣を發し登州府に向ひしが、途上風雪交々至る午後三時登州沖に達したるを以て順列に依り海岸に沿うて通過しつゝ敵情を窺ふに府の西方丘上にある砲壘に赤旗の翻へるを見る、既にして府前を通過し去りたるを以て針路を轉回して右舷に敵壘を望みつゝ、砲擊を令して適當の距離に至るを待つうち同四十五分吉野は已に砲擊を始む、同四十六分本艦は四千米突の距離に到り先に認めたる敵壘に向つて砲擊を加へ漸次二千五百米突に近づく彼應ぜず、同四時五分に至り戰旗を下し砲擊を止めしが同十四分已に敵壘を右舷後方に見る頃に及び、彼應擊を始めしも彈丸我に達するものなし、本艦は六時四十七分吉野に從ひ砲磯島の東北端に至り投錨す、翌十九日午前十時拔錨し吉野に從ひ再び登州府に向ふ、午後一時同沖に達し左舷に登州府を望みつゝ同二十分本艦先づ海岸の望樓を砲擊し轟て吉野、秋津洲も砲火を開きしに、同四十分に至り彼應戰し海岸一帶十三箇所より一齊に發砲す、然れども克く我に命中するものなし、同時本艦は三千五百米突の距離を測りて應戰し二時八分針路を轉廻して一旦彈著距離外に出で更に轉じて左舷に登州府を望みつゝ同二十八分吉野復砲火を開き敵直ちに應戰爲せしが本艦は同三十二分四千米突の距離に達して擊砲を始め、同四十三分復々針路を轉じ砲擊を止め吉野に從ひ山東高角方面に向ひ二十日早曉本隊に合せり。



榮城灣に於ける陸兵の上陸は、一月二十日を以て開始せられぬ。而して敵の提督丁汝昌と嘗て親交ありし伊東司令長官は、彼が威海衛を固守して屈せざるの壯烈に感ずると同時に、空く此の名將を失はんことを惜み、大山第二軍司令官に協り攻擊を開始するに先だち、懇切なる一書を丁提督に寄せて誠心を披瀝せり。其の書に曰く、

謹で一書を丁提督閣下に呈す、事局の變遷は不幸にも僕と閣下をして相敵たらしむるに至れり、然れども今世の戰爭は國と國との戰爭にして、一人と一人との反目に非ざれば僕と閣下との友情に至ては則ち依然として昔日の溫を保てり、閣下幸に此書を以て單に歸降を促すものと爲さず、僕が苦衷の存する所更に一層深遠なる所に在ることを信認せられんことを冀望す、蓋し其の國及び其の身の爲に謀り一舉兩全の長計あるも局に當る者は迷ひ、往々之を目睫に失するが故に傍觀者たる僕に於て敢て默々に付するに忍びず、是れ玆に閣下に瀆告して熟考を請はんと欲する所以なり。

貴國海陸兩軍の連戰連敗するは、蓋し其の山來する所種々あるべきも其の眞正の原因は自ら他に在るあり、是虛心平氣を以て考察する者の觀るを難しとせざる所閣下の英明にして豈之を辨知せざるの理あらんや。

夫れ貴國の今日あるに至りたるは素と君臣一二人の罪に非ず、其の從來墨守せる制度の

弊實に之を致せるなり、人を採るに必ず文藝を以てし政權を握る者一に文藝の士なること今日猶ほ千年の昔の如し。此の制度當時に在りては必ずしも善美ならざるに非ず、貴國にして果して世界に孤立獨往するを得ば、永く其の善美を失はざるべきも一國の孤立獨往は今日宇內の形勢に於て復た望むべからざるを如何せん。

三十年前我が日本帝國が如何に辛酸なる境遇を閲し如何に危殆なる厄難を逃れ得たるかは閣下の既に熟知せらるゝ所なり、當時帝國は實に舊制を棄て新制に就くを以て存立を完くする唯一の要件と爲したり、卽ち今日は貴國も亦之を以て要件と爲さゞるべからず、貴國苟も之に遵へば則ち可なり、若し否らざるときは早晩滅亡を免れざるべし、是理勢必至の數なり、其の厄難は端なく令回の戰爭に因り發現したりと雖も、其の否塞の運命の如きは前定既に久しと謂ふべし。

既に此の否塞の運に際す、臣子の苟も邦家の爲に忠誠を致さんとする者豈徒に滔々たる頹波に徇ひ其の一身を委して而して已むべけんや、炳焉たる歷史と廣大なる疆域とを有する世界の最舊帝國を革新して基礎を永遠に鞏固ならしめんとする談何ぞ容易ならんや苟も勢の不可なる時の不利なるを見ん乎、則ち一艦隊を敵に與へ全軍を以て降るが如き之を邦家の興廢に比すれば洵に些々たる小節にして拘るに足らざるのみ、是に於て僕



は世界に鳴轟する日本武士の名譽心に誓ひ、閣下に向ひて誓く我邦に遊び以て他日貴國中興の運眞に閣下の勤勞を要するの時節到來するを俟たれんことを願ふや切なり閣下其れ友人誠實の一言を聽納せよ。

貴國往昔の歷史に於て小節を棄て小恥を忍び終に大功を成したる例尠からざるは、固より言を俟たず、彼の佛國の大將マクマホンの如きは一たび降て敵國に在り時機を待ち歸り本國政府の改革を助けたり、而して佛國曾て之に羞辱を加へざるのみならず、從て之を大統領に推選せしに非ずや、又彼の土國のオスマンパシヤの如きプレヴナの一敗城陷り身囚はるゝも一朝國に歸るや、陸軍大臣の要地に立て軍制改革の偉功を奏するを妨げざりしに非ずや、閣下にして果して我が邦に來らば其の待遇の如きは僕誓て我が　天皇陛下の大度を擔保すべし、　陛下は嘗て其の臣民の叛旗を揭げたる者を赦免し給へるのみならず、榎本海軍中將の如き大鳥樞密顧問官の如き各其の材能に應じ擧げて顯要の地位に陞さる此類甚だ多し、況や他國の人にして殊に名聲赫々たる閣下の如きに於てをや、其の優遇必ず數倍を加へ給はんこと復た疑を容れざるなり。

之を要するに今日閣下の決斷せらるべき最大條件は、貴國の頑然株守する舊制の弊を承け著々大厄に陷るに任せ之と運命を共にすべきか、將た餘力を蓄へて他日の計を爲すべ

きかの二途に在り、閣下請ふ深思熟慮して擇ぶ所あれ從來貴國武辨の敵將の書牘に接するや概ね大言壯語を吐て之に酬い强を示し弱を掩ふに是勉む、然れども閣下の賢なる必ず其の所爲に倣はざるを信ず、今僕が此書を致すや實に友誼の至誠より出て決して匆々に出たるものに非ず、閣下請ふ之を諒せよ、閣下幸に僕が此書に披瀝する鄙衷を採酌せらるれば之を實行するの方法の如きは閣下の免許を得て更に具陳する所あるべし。

此の書は一月二十四日を以て丁提督の手に到達せられぬ。

附けて記す。丁提督此の書を讀みて悵然たりしが、軈て諸將を集め之を示して曰く、『伊東中將は眞に禮を知るの士なり、文意切にして情義共に具はる。嗚呼汝昌も亦威海衞の久く支へ難きを知らざるにあらざるも、報國の大義は決して棄つべきにあらず。今や予は唯一死を以て臣節を完うするあるのみ。卿等若し戰意なくんば敵の軍門に赴け。汝昌決して卿等を怨みず。』と。之を聽ける將士皆感奮し、死を共にせんことを誓へりと云ふ。而も四圍の狀況は丁提督を悲境に導きぬ。就中彼が股肱と頼める總兵林泰曾の死は、彼に取りて最大の打擊なりき。是より先き十二月十八日、林泰曾の指揮せる戰艦鎭遠は登州方面巡航の歸途、威海衞西口に於て誤りて暗礁に觸れ艦底に大損害を生ぜり。是に於て泰曾は決然責を引きて自殺せるが、其の謝罪の遺書に接したる丁提督は、之を握りて慟



哭し遂に昏倒するに至れり。我が伊東司令長官も亦深く其の死を惜み、戰後他に向ひ彼が爲人を評して曰く、『丁提督の部下中第一に數ふべきは林泰曾なるべし。彼は凜然たる氣節を負ひ、風采亦堂々として晝がける關羽を見る如く、洵に頼もしき眞男兒にして、後來丁汝昌に代りて北洋海軍を統率するは必ずや彼なるべし、其の人物或は丁以上なるべしと思はれき。彼が職責を負うて自殺したるは然もあるべきことながら、それが爲め北洋海軍一般の士氣を阻喪せしめたること大なるものありたるべし』と。

北洋艦隊の厄運は、啻に鎭遠の坐礁と林總兵の自殺に止まらずして、其他の諸艦も黃海々戰に於て受けたる損害を回復するに至らざりき。即ち旗艦定遠は數百發の彈痕依然として存在せるのみならず三十珊半砲の彈丸缺乏を告げ、來遠は內部盡く燒け失せて殼のみ止むるに過ぎず、其他威遠は木艦なり、廣丙は小艦なり、稍〻恃む所は靖遠、平遠の數艦のみなれば到底港外に出でゝ精銳なる日本艦隊に當るべくもあらず。是に於て丁提督は終に飽くまでも劉公島を固守するの消極的方針を取るに決せしが、本陸諸砲臺の陸將等は無識なるもの多く、軍紀紊亂して士卒に戰意なく、交戰の際忽ち敗走すべきこと明瞭なるを以て、汝昌は先づ此砲臺を海軍の手に收めんと欲し、百方交涉する所ありしも遂に目的を達すること能はず、結局敗餘の殘艦及び劉公島上の二砲臺のみを以て日本陸海軍に

當らざる可らざるを覺り、此の時に於て既に死を決し居たりと云ふ。

劉公島蔭に錨を投げたる定遠の將官室にて、丁提督が前記伊東司令長官の書簡を閲しつゝあるの際、悠々として威海衛港外を遊弋せる一艦あり、是ぞ開戰當初より沈著の名を兩軍の間に馳せたる第一游擊隊の浪速にして、榮城灣に於ける陸兵上陸に關聯し清國艦隊の動靜を監視せんが爲なりき。而して其の艦橋上には、例の如く東郷艦長が沈毅なる態度を司令塔外に現はし、默々として敵を見張ること一晝夜に及びぬ。其報告に曰く、

明治二十八年一月二十四日午前七時威海衛軍港外警戒の命を受け榮城灣を拔錨して目的地に向ひ午前十時先づ同軍港東口に達し港内を熟視したる後去つて西港口に至り偵察せしに別紙略圖（編者曰く略圖は之を略す）の如く敵艦碇泊しありて煤煙を吐きつゝあるを認めたり爾後本艦は同港外を徐々に游弋し專ら警戒を努むるうち西北の風强吹し怒濤大に至る午後二時十五分英艦「セバーン」號港外に來り更に轉じて芝罘方面に航し去れり、既にして同八時五分に至るや、威海衛西口に當り電燈の閃光を見數發の砲聲を聞きしが夫れより約二時間毎に電燈の閃光を見たり、風力は正午頃より稍〻減退し漸次平常に復す、二十五日朝更に軍港に接近して視察せしに敵情前日に異らず、尋いで午前九時三十分高千穗來り合したるを以て東口沖にて同艦と交代し歸途に就けり



榮城灣に於ける上陸は豫定の如く進捗し、我陸軍は一月二十五日榮城を陷れて陸路威海衛の背面に進み、同月三十日先づ威海衛東口の海岸なる百尺崖砲臺に向ひ攻擊を開始せり。時に敵艦定遠以下の數艦陸岸に近づき、巨砲を放ちて其の砲臺守兵を援助せしも、我兵顧みずして奮戰し、忽ち百尺崖を陷れ、續いて鹿角嘴、趙北嘴、謝家所等をも占領し、旭旗は高く諸砲臺に飜りぬ。

附けて記す。傳へ云ふ此の際丁提督は其の陸兵を助くる爲め定遠に駕し、砲艦及び水雷艇を率ゐて海岸に進み、猛烈なる砲火を我が陸軍に注げりと。當時丁提督の幕僚たりし歐人某は其の戰況を記して曰く、『此の砲火に苦める日本軍の擧動は洵に歎賞措く能はざるものありき。彼等は其後續隊を掩護となし亂れず騷がず悠然として一旦少しく退軍し更に兵力を整ふるよと見る間に急遽清軍目掛けて面も振らず突貫せり元より未熟の清兵何條堪らん一支も支へず右往左往に敗走なしたる見苦しさ艦上遙に之を望見したる者誰か感慨に打たれざるべき丁提督は幾度か嗟嘆し左右を顧みて曰く忠勇義烈此の如き日本人を敵とするは予の本懷にあらざるなりと言ひ畢りてはらはらと落涙せり既にして日本軍は北るを追ひ進みて灣に近き廣野に出でぬ。待設けたる丁提督は吃水淺き砲艦をして益〻陸岸に近寄らしめ盛に機關砲を發射せしめて一時日本軍を惱ませ

しも彼更に屈せずして愈〻奮戰し三時間の激戰にて本陸東口の砲臺悉く日本軍の爲めに占領せられ指揮官劉超佩は僅に身を以て劉公島に遁れ諸兵概ね芝罘の方に潰走せり云々。

東口砲臺我が有に歸するや、我が艦隊より五十四名の兵員上陸し、陸兵に代りて砲臺に入り、其の備砲を用ゐて敵艦隊を脅せり。時に丁提督は掌大の孤島を守り、前方は島上の砲臺を以て我が海軍に當り、後方は其の艦隊を操縱して本陸の我が占領砲臺と戰ひ、且本陸の西口砲臺は悉く之を破壞し、悲壯の抵抗を續けて屈せざりき。

附けて記す。當時丁提督の幕僚たりし歐人某の戰記に曰く、『幾もなく西岸諸砲臺の破壞を必要とする時機は來れり豫て丁提督と不和なる指揮官戴宗騫も陷落せる東岸砲臺の爲め反つて味方の艦隊が砲擊せらるゝを目前に見ては有繋に西岸砲臺の破壞を拒む能はずして提督の意見に同意したりしかば提督は直ちに恁かる事に經驗ある歐人等を遣せしに砲臺の守兵は敵兵と見誤りけん狼狽して遁げ去り其の守將のみ留りて派遣員を助け九時間を費して破壞の準備成り明日之を決行せんとせしに何事ぞ電氣を通ずべき電纜は夜中何者にか切斷せられ了んぬ是必ず日軍に獄を通ぜんとする清兵の所爲なるべしと諸員憤慨したりしが丁提督は從容として再度準備に著手し遂に功を完うし日



軍に占領せられたる後些の用をも爲さゞらしめぬ洵に此の老將軍の忍耐强きこと驚嘆の外なきも其の胸中推し量られて同情に堪へず』云々。

威海衛の戰記は日本男兒の忠勇に寄書すべく漸次佳境に入りぬ。浪速等の快速艦は、風雪を冒し波濤を凌ぎて晝夜港口を警戒し、以て敵艦の逸走を遮り、六號水雷艇は二月三日の夜陰に乘じ、敵の哨艇七隻と戰ひつゝ、數回爆藥を擲つて遂に防材の一部を破壞せり。是に於て艇隊夜襲の活劇は演出せられぬ。

『本官は今諸君に港內なる敵艦轟沈を命ず。是各國海軍の未だ實驗せざる所にして固より難中の難事なり。諸君願はくは一命を君國に捧げて忠名を萬世に垂れよ』。

這は伊東司令長官の、三艇隊司令に親く下せる言命なりき。司令等は一齊に『諾』と答へ直ちに之を部下の各艇長に傳へ、盡く書類を燒き新衣を著、萬死を期して襲擊に向へり。

時は二月五日の午前三時、月は山頭に落ちて海面暗く最も潛行に適しければ、第二、第三兩隊の水雷艇合して十隻、肅々として港の東口に進み、探り探りて防材を越ゆると同時に、全速力にて闇に浮べる敵艦目掛け、眞一文字に闖入せしに、敵の警戒嚴にして哨艇を出し探海燈を點じ、忽ち我を發見すると同時に島上及び各艦より猛烈なる砲火を注ぎ、巨彈縱橫に迸りて戰雲濛々たり。されば九號艇の如きは機關破壞して機關部員悉く死傷し、六號艇の如き

は六十四箇の彈痕を止むるに至りしも更に屈せず、各艇何れも敵に肉薄し、遂に其の中堅たる定遠を轟沈し、翌夜は第一艇隊の五隻闖入して、來遠、威遠、寶筏を擊破したれば、さしも頑强に抵抗せる敵艦隊も其の勢頓に衰ふるに至りぬ。

附けて記す。當時丁提督の幕僚たりし歐人某の戰記に曰く、『二月五日午前三時半頃月沒するや否や日島の南に當り豫て敵艇闖入の信號と定まれる一發の火箭打揚げられしが幾もなく何れの艦なるや發砲するものありしが忽ち我が定遠も之に倣へりされど余は此時未だ敵艇を認めざりき暫くして我が艦發砲を止めしが之と同時に我が左舷正横約半海里を距てゝ海面に一點の黑體微に見えければ我が艦再び之に向つて發砲す余は羅針盤臺に登りて望見するに件の黑體は紛ふ方なき一隻の水雷艇にて我が艦の舳の方に進み來り約三百米突に近づきて左方に艇首を旋回せり此の時我一彈彼に命中せりと覺しく一簇の汽煙暗を彩りて上騰するを認めしが是より數秒時を經ざるに一發の水雷我が艦底に命中し轟然たる響と共に劇き震動起り一大水柱甲板上に逆倒せり此の水雷は余が船室下の倉庫を爆破し命中後一分時ならずして下甲板の浸水一尺に達し艦體少しく傾斜せり恁くと見たる丁提督は急に拔錨を命じ日島の南側に移りて港口を防禦せんと計れり然れども潮水愈〻深くなりたるを以て余は艦の到底浮ぶ能はざるべきを



提督に告げ其傾斜未だ甚しからざるに先だち速に艦を去るの得策なるを勸めたり』云々。

又他の一記事に曰く、『定遠を襲擊したりと思はるゝ日本水雷艇は翌日港内の淺瀨に擱坐し居るを發見せるが艇内には四名の屍あり提督之を見て是忠義の士なりと云ひ厚く之を島上に葬り且野蠻なる清國陸兵の辱を加へんことを恐れ嚴く之を豫防せり既にして六日午前四時頃第二回の水雷艇襲擊を被り爲に巡洋艦來遠は轉覆して艦底を水面上に露出し練習艦威衛は全く沈沒して僅に檣頭を水上に出し大形小蒸汽艇は底のみを埠頭の傍に顯せり』

我が水雷艇の闖入に因り敵軍の士氣頓に沮喪し、就中久く武威を東洋に振ひし定遠も、あはれ悲慘の末路を示しければ、伊東司令長官は此機に乘じて敵に一大打擊を加へんと欲し愈〻二月七日午前七時より總攻擊を行ひ、本隊及び第一游擊隊は劉公島砲臺を、第二、第三、第四游擊隊は陸上占領砲臺と相應じて日島砲臺を、各〻砲擊するに決定せり。

諸艦に起る戰鬪の號音は嘹喨たる響を曉霧に傳へ檣頭に翻翻たる軍艦旗の下には兵員早くも各其部署に就きぬ。豫定の如く本隊及び第一游擊隊の八艦は劉公島の東北より其東端砲臺に向ひ、第二、第三、第四游擊隊の十四隻は東口より日島砲臺に向ひ、孰れも單縱陣を

制り海面の薄氷を碎いて進む間もなく、劉公島の敵砲臺先づ火蓋を切て戰を我本隊に挑みぬ。待設けたる八艦直ちに之に應戰し、備砲皆大仰角度を以て斜に天を指し、榴彈、榴霰彈を相混じて砲臺を猛擊しつゝ、車懸の陣法其の儘、一艦去れば一艦來り、空に叫ぶ巨彈所々に爆裂して砲臺濛々たる黃煙に包まれ、金蛇の其の間に閃くを見る。日島に向へる一隊も相前後して砲火を開き、我が占領砲臺亦背面より瞰射しければ敵艦隊も之と對戰し、陸上海面入り亂れて戰雲漠々日光爲に朦朧たりしが、一段轟く爆聲と共に日島の火藥庫破裂し、我は之に勢を得て益々奮鬪せる折しも、港の西口より十餘隻の敵水雷艇煙を衝いて現れたり。驚破やと許り我が隊は、水雷艇防禦の備をなして待ち受けしに、敵艇敢て迫り來らず、際に乘じて芝罘の方に向ひ逸走せり。恁くと見たる伊東司令長官は、直ちに命を第一游擊隊に傳へて之を追擊せしめたり。是に於て四隻の快速艦は、煙突火焰を吐く許り有らん限りの速力出して追蹤したるに、敵艇狼狽して六隻は自ら沿岸の淺瀨に乘り揚げ、二隻は其の邊に彷徨し芝罘に逃れ得たるものは二隻のみなりしが、それすら吉野に追究せられて陸岸に坐し、盡く我艦隊の手中に落ち、敵は終に一隻の水雷艇をも有せざるに至りぬ。東鄕浪速艦長同日の戰況を報告して曰く、

二十八年二月七日劉公島東端砲臺砲擊の命に因り午前七時二十六分本隊並に第一游擊



隊は順列にて旗艦松島に從ひ戰鬪旗を大檣頭に揚げ同砲臺に向つて駛行す同三十七分敵先づ我先頭に進める旗艦松島に向つて發砲し、同艦も砲擊を開始せり、我は前後旋回砲を左舷に備へしめ同砲臺に四千米の距離を以て、獨立打方を令し同五十八分適當の距離に達したるを以て砲火を開き漸次三千米突に迫りて砲擊に努むるうち、八時十二分敵彈（二十四珊彈なるが如し）我六番炭庫に命中し横過して五番炭庫を貫通し舷外に飛べり然れども死傷者なく毫も戰鬪力に損害を來さず依然敵砲臺を猛擊しつゝ旗艦の通跡に從ひ右舷に轉じ八時二十二分には左舷より發砲し能はざるに至りたるを以て直ちに右舷砲臺に打方を轉じ三千五百米突を以て砲擊を續けしが同二十六分彈著距離外に出でしを以て乃ち之を停止せり、是より先き敵の水雷艇十一隻及び小蒸汽艇一隻西口より突出し來りしが今や彼芝罘方面へ逃走せんとせり、我が第一游擊隊は司令長官の命により全速力にて之が追擊に向ひ、旗艦吉野に從ひて其通跡を駛行す八時五十六分小蒸汽艇に追及し速射砲を以て之を擊ちしに九時三十分彼麻浦に逃入したるを以て發砲を止め更に水雷艇を追ひしに敵艇等は膠海州沖に至るまでの所々の沿岸淺洲に擱坐し或は自ら破壞せる者あり或は其儘放棄せるものあり此時吉野は全速力にて芝罘に逃れたる二隻の敵艦に向ひ同時に各艦各自の運動を取れとの信號を揚げたり、是に於て我及び高千穗秋

津洲は寄海洲沿岸に坐礁せる敵艇に迫り我は速射砲を以て二千五百米突の距離より其一隻を砲擊し尋いで高千穗は去つて吉野に從ひ我は秋津洲と共に轉廻して陸岸に接近し金山塞口の淺洲に沿うて擱坐せる四艇を順次擊破し更に他の一艇に及ばんとする際本隊に會し其の命令により午後一時三十五分砲擊を止め爾後松島の運動に從へり要するに第一游擊隊追擊の結果水雷艇九隻小蒸汽艇一隻をして戰鬪力なきに至らしめたるは疑を容れざる所なり。

伊東司令長官の威海衛攻略に關する作戰計畫たるや、初め敵艦隊を港外に誘出して一擧に之を粉齏せんとするにありしも、敵は一意退守を事としたるを以て其の目的を達する能はざりしかば、乃ち水雷艇をして敵艦を襲擊せしめ、尋いで艦隊を擧げて總攻擊を試み、脫出せる水雷艇を所々に追ひ詰め遂に之を全滅に歸せしめたり。是に於て更に此の機を失はず、再び防材を破壞して航路を開かんと欲し、第一游擊隊吉野、高千穗、秋津洲、浪速をして二月八日夜間の警戒に當らしむると同時に四艦の汽艇をして東口の防材を破壞せしむべきの命令を發し、其の結果約五百米突の間を破壞することを得、翌九日には第三游擊隊をして劉公島を砲擊せしめ、第一、第二游擊隊は遙に之に聲援し本陸の占領砲臺も亦相應じて砲擊を開始せるが、其の發射せる一彈敵艦靖遠に命中して之を沈沒せしめ、敵兵も亦此の日を以て



自ら爆發藥を裝置し、擅に我水雷の爲に大創を被り半沈沒の狀態にある定遠を爆破し了りぬされば我が軍愈〻勢に乘じ、各艦交代して晝夜劉公島及び敵艦隊の碇泊場を砲擊し、彼をして應接に遑あらざらしめ、二月十日紀元節にも單に遙拜式を擧行するに止め、依然として砲擊を繼續し、占領砲臺も之に應援して間斷なく敵を懊ましし、劉公島東端砲臺の備砲一門を破壞せしかば、敵艦は皆港內の西方に避け、今は劉公島上獨り黃島砲臺のみ克く我に對抗せり。是に於て浪速、秋津洲の兩艦は此夜銀より白き凍月の光を浴びつゝ肅々として同砲臺前に進み、之と一戰を交へて曉天に及びぬ。此の砲擊に關する東鄕浪速艦長の報告に曰く、

二十八年二月十一日午後五時四十分秋津洲と共に威海衛軍港外竝に劉公島西端黃島砲臺攻擊の命を奉じ同沖合を巡邏す時に南風大に至り月色朦朧たり既にして黃島砲臺の直前に出でしを以て九時五十六分千米突內外に於て一舷打方を行ひしに敵亦應戰せるを以て乃ち轉砲して一旦沖に出で更に旋廻して十二日午前零時十五分同三時の兩回一舷打方を試み夫れより專ら威海衛港外を巡邏せり

是實に威海衛に於ける最後の砲戰にして、敵は此の日を以て降を我が軍門に乞ふに至りぬ。嗚呼威海衛の戰記は浪速等の登州府攻擊に始まり、今又其の砲戰を以て終結を告ぐ。思へば逆ながらも兩者の因緣洵に深からずとなさゞるなり。